上峰町文化財調査報告書第14集

八藤遺跡 II
堤土塁跡 II

平成2年度佐賀県営農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年3月

上峰町教育委員会

上峰町文化財調査報告書第14集

八藤遺跡 II
堤土塁跡 II

平成2年度佐賀県営農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年3月

上峰町教育委員会

堤土塁跡と道路側溝状遺構（堤土塁跡２区）　―東北東より―

八藤遺跡 4 区（農道以西部分）・堤土塁跡 2 区調査区全景　―写真上方が北北東―

序

従来より、上峰町は遺跡の宝庫と言われてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生し南北に延びる洪積世丘陵と開析谷、さらに有明海へと続く沖積平野と変化にとんだ地形を含む町域には、いたるところに先人たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。

教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存・活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整を図ってまいりました。

上峰町では町北部の大字堤地区を対象とした県営農業基盤整備事業が昭和60年度より開始され、これに伴う埋蔵文化財発掘調査を進めております。

この報告書は、平成２年度に実施した八藤遺跡と堤土塁跡の埋蔵文化財発掘調査事業の報告書であります。今回の発掘調査では、縄文時代から中世に及ぶ人々の暮らしの跡が検出されました。とくに、縄文時代の遺構からは石鏃・石匙などの石器類が出土しました。この時代の遺跡の調査例が比較的少ない佐賀県の東部にあって、当時の人々の活動を考える上で貴重な資料を得ることができました。

この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力いただいた文化庁、佐賀県教育委員会文化財課、佐賀県農林部をはじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成10年３月

上峰町教育委員会

教育長　古賀一守

例　言

1．本書は、平成２年度佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴い、上峰町教育委員会が発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字迎原に所在する八藤遺跡および堤土塁跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、農業基盤整備事業の施工により削平を受ける部分14,000㎡について調査区域を便宜的に八藤遺跡４区（9,710㎡）・５区（940㎡）の２区及び堤土塁跡２区（3,350㎡。昭和53年調査分を１区とする。）の３区に分割し、佐賀県農林部の委託事業として、上峰町教育委員会が主体となり実施したものである。

3．今回の調査対象となる八藤遺跡４区及び堤土塁跡２区は、ともに上峰町大字堤字迎原の洪積世丘陵上に位置している。『佐賀県遺跡地図』（佐賀県教育委員会　1986）では、丘陵を南北に縦断する農道が便宜上の両者の境界となっているが、その内容は一連のものである。よって、本書では、両者を合わせて報告する。

4．現地での発掘調査は、平成２年６月25日から平成３年３月29日まで行った。

5．現場での遺構実測作業は、調査員の指示により実測作業員があたった。

6．遺構及び出土遺物の写真撮影は、原田大介が行った。また、空中写真撮影を有限会社空中写真企画に委託した。

7．調査後の出土遺物、記録類の整理作業は、上峰町船石文化財整理事務所にて実施した。

8．本文中の挿図の実測図作成、トレース作業等は調査員の指導で製図作業員があたった。

9．本書の執筆、編集は原田が行った。

10．今回の調査で出土した全ての遺物、図面・写真・記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　例

1．八藤遺跡・堤土塁跡の略号は、それぞれ「ＹＴＯ」・「ＴＴＭ」であり、今回の調査区略号は、「ＹＴＯ－４・５」、「ＴＴＭ－２」とした。

2．遺構番号は、発掘調査当時のままとした。八藤遺跡４区が401～499、551～564、八藤遺跡５区が501～510、堤土塁跡２区が201～250である。

3．遺構番号に冠した２文字のアルファベットは、遺構の種別を表す。

ＳＨ……竪穴式住居址　　ＳＫ……土壙・貯蔵穴　　ＳＢ……掘立柱建物址

ＳＤ……溝跡・溝状遺構　　ＳＥ……井戸跡　　ＳＸ……性格不明・その他

4．挿図中の方位は、既成の地形図を用いたものは特記のないかぎり図上方が座標北、現場で作成した遺構図等は図中方位が磁北を表している。

5．表中の数値に付した記号で、（　）は推定値を、※は部分値をそれぞれ表す。

6．遺構実測図中の点線は推定線を、一点鎖線は調査区境界をそれぞれ表す。

7．遺物実測図の縮尺は、原則として1/4であるが、土器拓影など縮尺が異なるものについては、遺物報告番号に続きその縮尺を特記している。

調査組織（発掘調査当時）

調査事務局	総　括	松田末治	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	馬場英孝	〃	教育課長
	経費執行	吉田　忠	〃	社会教育係長
	〃	鶴田浩二	〃	社会教育係
	〃	原田大介	〃	〃
調査組織	調査員	鶴田浩二	上峰町教育委員会	社会教育係
	〃	原田大介	〃	〃
調査指導		佐賀県教育委員会文化財課		

発掘作業参加者

秋山　巌、秋山ユキエ、石橋ツタエ、石橋テル、石丸ミチエ、江頭晴次、江口正弘、大坪光代、緒方ツタエ、緒方　中、小田鈴江、小田　強、川原ツヤ、川原　等、川原ミヨ、川原ヨシエ、北島八重子、黒石光利、古賀敬治、鴫山静江、執行ミハル、高島　昇、田中　巧、田中ミスエ、堤　イシ、堤　　一、鶴田久子、鶴田八重子、中原百合、中村初一、納富ヌイ子、福島一雄、古川シマ子、松尾トシエ、三好スエ、矢動丸茂利、矢動丸信子、矢動丸ミツエ、柳　和義、山口ミヨ子、和佐治夫（上峰町）
今村逸朗、大塚竹千代、大塚ツタエ、緒方敏男、小原木貞子、田多良シゲコ、浜尾カツエ、浜尾貞夫、平野アサコ、松本シズエ、真子キヨミ、真子美津子、真子八重子、牟田茂子、牟田ハナ、牟田富砂子、山下美佐子、山下義人、輪竹基喜（中原町）

荒木和代、江頭洋子、海良田順子、島美保子、馬原喜美子、矢動丸五十三（実測作業員）

整理作業参加者

大隈弓子、坂本恵子、島美保子、田尻祐子、中尾美千恵、馬原喜美子、矢動丸洋子（製図作業員）

目　　次

序
例言・凡例
調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1
　1．遺跡の位置 …… 1
　2．歴史的環境 …… 1

Ⅱ．調査の経過 …… 7
　1．調査に至る経緯 …… 7
　2．調査の経過 …… 8

Ⅲ．遺跡の概要 …… 9
　1．遺跡の概要 …… 9
　2．調査区の概要 …… 9

Ⅳ．遺　　構 …… 16
　1．竪穴式住居址 …… 16
　2．掘立柱建物址 …… 17
　3．土壙・貯蔵穴 …… 23
　4．溝　　跡 …… 41
　5．遺物包含層の調査 …… 45

Ⅴ．遺　　物 …… 59
　1．土　　器 …… 59
　2．石器・その他 …… 64

Ⅵ．ま と め …… 67

挿図目次

Fig. 1　上峰町北部地形概略図（1/10,000） …… 2
　2　遺跡の位置および周辺遺跡（1/50,000） …… 4
　3　遺跡周辺地形図および調査区位置図（1/5,000） …… 10
　4　八藤遺跡４区・堤土塁跡２区遺構配置図（1/600） …… 11～12
　5　八藤遺跡５区遺構配置図（1/600） …… 13
　6　竪穴式住居址実測図(1)　SH-424・SH-450・SH-456・SH-559（1/80） …… 19
　7　掘立柱建物址実測図(1)　SB-428・SB-482（1/80） …… 20
　8　竪穴式住居址実測図(2)・掘立柱建物址実測図(2)　SH-507・SB-502（1/80） …… 21

9　掘立柱建物址実測図(3) SB-503A・SB-503B（1/80）……22
10　土壙実測図(1)　SK-401～SK-410・SK-413・SK-414（1/60）……28
11　土壙実測図(2)　SK-415～SK-423・SK-425（1/60）……29
12　土壙実測図(3)　SK-426・SK-427・SK-429・SK-430・SK-432・SK-437・SK-441～SK-445（1/60）…30
13　土壙実測図(4)　SK-446～SK-449・SK-451～SK-455・SK-457～SK-460（1/60）……31
14　土壙実測図(5)　SK-461～SK-467・SK-469（1/60）……32
15　土壙実測図(6)　SK-470・SK-475・SK-477・SK-479～SK-481・SK-483・SK-484・SK-490・
SX-493・SK-494（1/60）……33
16　土壙実測図(7)　SX-497～SK-499・SK-552～SK-558・SK-560～SK-561（1/60）……34
17　土壙実測図(8)　SK-562～SK-564・SX-201～SK-208（1/60）……35
18　土壙実測図(9)　SK-209～SK-216（1/60）……36
19　土壙実測図(10)　SK-217～SK-225（1/60）……37
20　土壙実測図(11)　SK-226～SK-233（1/60）……38
21　土壙実測図(12)　SK-234～SK-237・SK-241～SK-243・SK-245～SK-247・SK-249・SK-250（1/60）…39
22　土壙実測図(13)　SK-501・SK-504・SK-508～SK-510（1/60）……40
23　溝跡実測図(1)　SD-429（1/80）……42
24　溝跡実測図(2)　SD-238・SD-239・SD-478～SD-488（1/200）……43～44
25　遺物包含層遺物出土状況図……46
26　遺物包含層中遺物分布図(1)　A-5-9Gr.～A-5-11Gr.・A-5-13Gr.（1/40）……47
27　遺物包含層中遺物分布図(2)　A-5-14Gr.・A-5-15Gr.・A-5-17Gr.・A-5-18Gr.（1/40）……48
28　遺物包含層中遺物分布図(3)　A-5-19Gr.・A-5-20Gr.・A-5-22Gr.・A-5-23Gr.（1/40）……49
29　遺物包含層中遺物分布図(4)　A-5-24Gr.・A-5-25Gr.・A-6-6Gr.・A-6-7Gr.（1/40）……50
30　遺物包含層中遺物分布図(5)　A-6-8Gr.～A-6-11Gr.（1/40）……51
31　遺物包含層中遺物分布図(6)　A-6-13Gr.～A-6-16Gr.（1/40）……52
32　遺物包含層中遺物分布図(7)　A-6-17Gr.～A-6-20Gr.（1/40）……53
33　遺物包含層中遺物分布図(8)　A-6-21Gr.～A-6-24Gr.（1/40）……54
34　遺物包含層中遺物分布図(9)　B-5-3Gr.～B-5-5Gr.・B-5-9Gr.（1/40）……55
35　遺物包含層中遺物分布図(10)　B-5-10Gr.・B-5-15Gr.・B-6-1Gr.・B-6-2Gr.（1/40）……56
36　遺物包含層中遺物分布図(11)　B-6-3Gr.・B-6-6Gr.～B-6-8Gr.（1/40）……57
37　遺物包含層中遺物分布図(12)　B-6-11Gr.・B-6-12Gr.・B-6-17Gr.（1/40）……58
38　出土遺物実測図(1)（1/4）……61
39　出土遺物実測図(2)（1/4）……62
40　出土遺物実測図(3)（1/4）……63
41　堤土塁跡全体図（1/2,000）……68

表　目　次

Tab. 1　出土竪穴式住居址一覧表……17
2　出土掘立柱建物址一覧表……18
3　出土土壙一覧表……23
4　遺物包含層調査区小グリッド別遺物出土数一覧表……45

5　出土石器等一覧表……65
報告書抄録……巻末

図版目次

巻頭図版
ＰＬ．1　堤土塁跡と道路側溝状遺構（堤土塁跡２区）
2　八藤遺跡４区（農道以西部分）・堤土塁跡２区調査区全景
巻末図版
3　八藤遺跡４区・堤土塁跡２区全景
4　八藤遺跡５区全景
5　遺構(1)　SH-424・SH-450・SH-256
6　遺構(2)　SH-507・SB-428・SB-482
7　遺構(3)　SB-502～SB-503A,B・SD-487・SD-488・SD-492
8　遺構(4)　SH-424・SH-450・SH-456・SK-401～SK-404
9　遺構(5)　SK-405～SK-410・SK-413・SK-414
10　遺構(6)　SK-415～SK-422
11　遺構(7)　SK-425～SK-427・SK-429・SK-430・SK-432・SK-437
12　遺構(8)　SK-441～SK-448
13　遺構(9)　SK-449・SK-451 SK-457・SK-459・SK-460・SK-462～SK-465
14　遺構(10)　SK-466・SK-467・SK-469・SK-470・SK-475・SK-477・SK-479・SK-481
15　遺構(11)　SK-484・SX-493・SK-494・SK-499・SK-552～SK-555
16　遺構(12)　SK-556・SX-201～SK-204・SK-206～SK-209
17　遺構(13)　SK-210～SK-218
18　遺構(14)　SK-219～SK-222・SK-224～SK-227
19　遺構(15)　SK-228・SK-230～SK-235・SK-241
20　遺構(16)　SK-242・SK-243・SK-245～SK-247・SK-249・SK-250
21　遺物(1)　SH-424・SK-427・SK-429
22　遺物(2)　SK-429・SK-430・SK-432・SK-442
23　遺物(3)　SK-442・SB-482・SK-557・SK-562・表採遺物
24　遺物(4)　SK-204・SK-220・SB-503・SD-506・SH-507・SK-508
25　遺物(5)　石鏃
26　遺物(6)　石匙・石剣・石錘・石鎌
27　遺物(7)　石斧・叩き石・鉄滓

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置（Fig. 1）

八藤遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字八藤、迎原の洪積世段丘上（標高20m～35m。「八藤丘陵」と呼称。）に位置している。堤土塁跡は、八藤遺跡が立地する八藤丘陵と西方の二塚山丘陵が最も接近する部分の谷部をせき止める形で構築された古代の土塁である。

両遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町・北茂安町、南部は三根町、西部は神埼郡東脊振村・三田川町と境を接している。

鳥栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部の脊振山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部の有明海へと続く沖積平野と、変化にとんだ地形が展開している。なかでも山麓から沖積平野へと移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって開析され数多くの南北に延びる舌状を呈した段丘となっている。そしてこれらの丘陵上には各地代の遺跡が密集し、県内でも有数の遺跡の宝庫となっている。

八藤遺跡は、町北部の大字堤地区のほぼ中央に所在している。大字堤地区には、中央を南流する切通川の本支流の開析作用で形成された谷底平野を境界として大小の南北に延びる舌状丘陵が発達している。八藤遺跡が立地する八藤丘陵もそのひとつで、堤地区北部の山麓から派生する丘陵であり、東方の船石丘陵、西方の二塚山丘陵とはそれぞれ切通川の支流である大谷川、切通川本流の開析谷によってそれぞれ分かたれている。

2．歴史的環境（Fig. 2）

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述のように洪積世段丘が古くから人々の生活の舞台となっており、各段丘上には遺跡の分布が知られ、県内でもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵のほとんどが集落あるいは墓域として占有され、縄文時代遺跡と比較すると、量的にも質的にも爆発的に増加、充実する。銅鐸の鋳型を出土した鳥栖市安永田遺跡[1]、約400基の甕棺墓が検出された中原町姫方遺跡[2]、12本の銅矛を埋納した北茂安町検見谷遺跡[3]、甕棺墓から舶載鏡を出土した東脊振村三津永田遺跡[4]、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構・遺物が検出された三田川・神埼・東脊振の２町１村にまたがる吉野ヶ里遺跡[5]など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ、弥生の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。南北約12km、東西約３kmと南北に細長い町域をもつ本町においても同様で、町の北部から中央部を占める洪積世段丘を中心に弥生時代の遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡は、各段丘ごとに層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の出土にとどまっている。町内では、平成４年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の調査において細石刃１点が発掘調査において検出されているのみで[6]、三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器が採取されている[7]。平成５年度の八藤遺跡下層における阿蘇４火砕流と埋没林に係る調査では、先土器時代の年代示標となっている姶良－Tn火山灰（AT）の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査で遺構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風積土層の最上部で検出されている[8]。

縄文時代になると中原町香田遺跡[9]や東脊振村戦場ケ谷遺跡[10]などが出現する。町内においてもこれまでは町北部の丘陵部から土器や石器が採取されていたが、農業基盤整備事業に伴う調査の結果、今回の調査を含め、平成

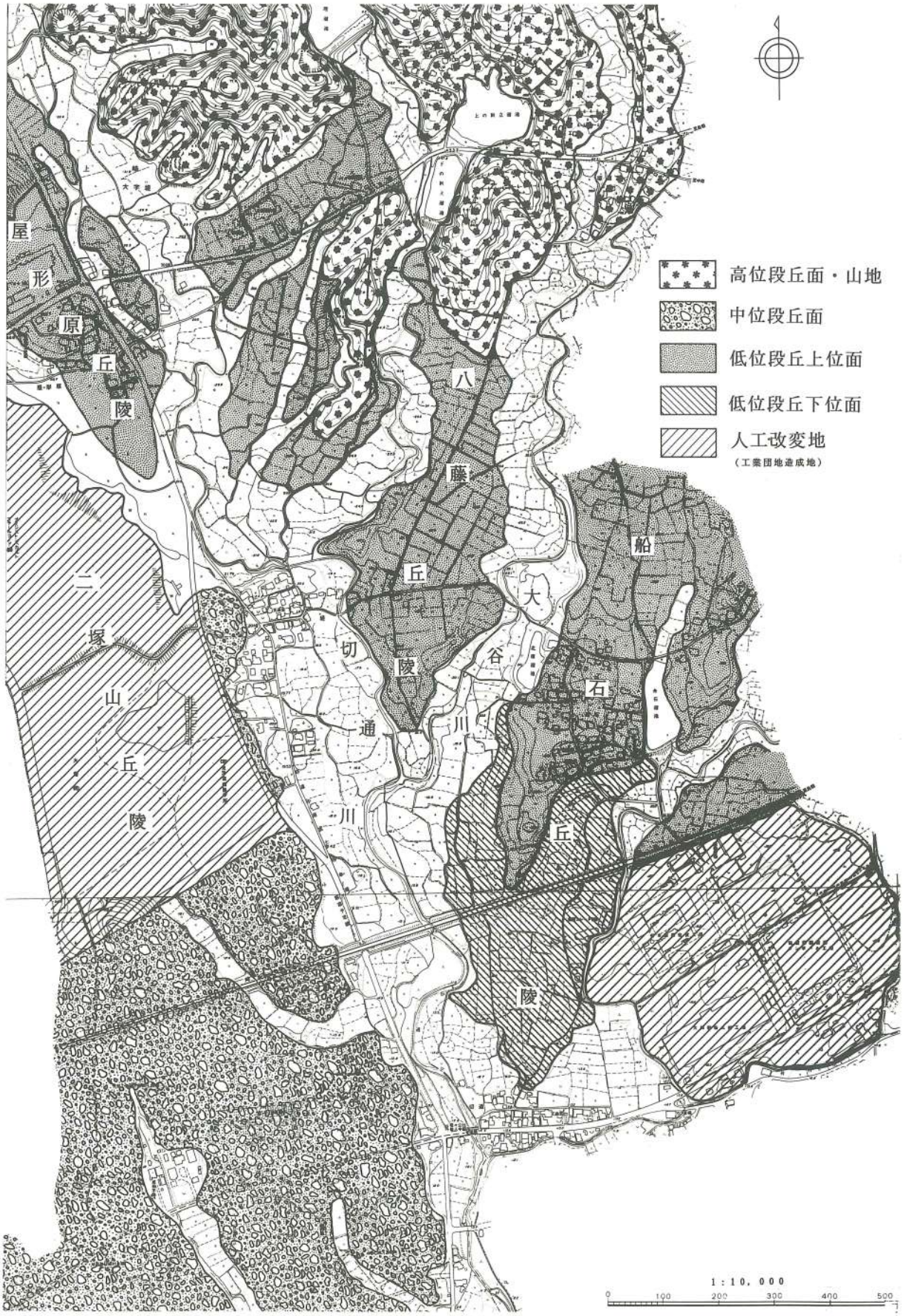


Fig. 1　上峰町北部地形概略図（1/10,000）

元年度の船石遺跡11区[11]の調査で遺物・遺構がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数、規模、内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから魏志倭人伝の「弥奴国」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町南地部の米多地区、坊所地区の丘陵部は、中近世以降集落として発達し早くから宅地化が進み、本格的な調査例に乏しくその内容を詳細に把握できていないのが現状である。これに対し、町北部の堤地区周辺は、近年の大型開発に伴い広範囲の遺跡が調査の対象となっていおり、当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的遺跡としては、甕棺墓から細形銅剣や貝釧を出土した切通遺跡[12]、神埼郡東脊振村・三田川町にまたがる佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い甕棺墓、土壙墓約300基が調査され舶載鏡、仿製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡[13]・五本谷遺跡[14]、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡[15]、地区運動公園整備に伴う調査で5世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の甕棺墓が検出された船石遺跡[16]などが知られている。またこの度の県営農業基盤整備事業に伴う調査においても船石南遺跡[17]・船石遺跡[18]から住居址や甕棺墓などが検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中原町姫方原遺跡[19]・五本谷遺跡などで方形周溝墓が営まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から大和町にかけての山麓部や丘陵部に前方後円墳が出現する。鳥栖市剣塚古墳[20]、中原町姫方古墳[21]、上峰町から三田川町にまたがる目達原古墳群[22]、神埼町伊勢塚古墳[23]、佐賀市銚子塚古墳[24]、大和町船塚古墳など佐賀県東部の代表的古墳が築かれる。後期になると、現在長崎自動車道や、県道鳥栖―川久保線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』に見える三根郡米多郷に属す当時の上峰町一帯は、『古事記』の記事によれば、応神天皇の曾孫にあたる「都紀女加」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南部の米多地区から三田川町の目達原一帯にあったと想定されている。町内の主要な古墳としては、米多国造一族の墳墓として、5世紀代後半に形成されたと考えられる前方後円墳7基ほか円墳数基からなる目達原古墳群[25]、同じく5世紀代の古墳で蛇行状鉄剣、鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳1～3号墳[26]が知られている。また、後期の群集墳としては、町北部の鎮西山の周辺山麓部を中心に古墳群が存在している。一方、この時期の集落は、三田川町下中杖遺跡[27]、東脊振村下石動遺跡[28]などが知られているが、弥生時代集落の調査例に比べると少なくいまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的調査例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中杖遺跡、東脊振村辛上廃寺跡[29]、霊仙寺跡[30]などが著名であるが、まとまった調査例が少なく実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条里制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。また大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土塁跡[31]や塔の塚廃寺跡[32]などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間を遮断する形で築かれた堤土塁跡は、版築工法をにより築かれた福岡県の水城に似た施設＝「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、潅漑用水確保のための堤防であるとする説など議論がなされてきたが、今回の土塁の東方に接する八藤丘陵の調査において、土塁東端から一直線

上峰町
1　鎮西山南麓古墳群
2　屋形原古墳群
3　谷渡古墳群
4　堤土塁跡
5　**八藤遺跡**
6　五本谷遺跡
7　二塚山遺跡
8　船石遺跡
9　船石南遺跡
10　切通遺跡
11　一本谷遺跡
12　目達原古墳群
13　塔の塚廃寺跡
14　上米多貝塚
中原町
15　山田蔵骨器出土地
16　山田古墳群
17　大塚古墳
18　八幡社遺跡
19　蓑原遺跡
20　姫方遺跡
21　姫方前方後円墳
22　姫方原遺跡
23　上地遺跡
24　ドンドン落遺跡
25　町南遺跡
26　天神遺跡
27　西寒水遺跡
北茂安町
28　宝満谷遺跡
29　宝満宮前方後円墳
30　大塚古墳
31　東尾銅剣出土遺跡
三根町
32　本分貝塚
三田川町
33　吉野ヶ里丘陵遺跡
34　二本黒木遺跡
35　下中杖遺跡
36　下藤貝塚
神埼町
37　志波屋六本松遺跡
38　伊勢塚前方後円墳
39　志波屋開拓団地古墳群
40　馬郡遺跡
東脊振村
41　山田谷古墳
42　西石動古墳群
43　西石動銅戈鎔笵出土地
44　戦場ヶ谷遺跡
45　三津永田遺跡
46　下三津前方後円墳
47　夕ケ里遺跡
48　西一本杉遺跡
49　西石動遺跡
50　下石動遺跡
51　松原遺跡
52　辛上廃寺跡
53　大塚遺跡
54　横田遺跡

Fig. 2　遺跡の位置および周辺遺跡（1/50,000）

に八藤丘陵を東方へ横断する側溝状の遺構が検出され[33]、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されることとなった。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚廃寺跡は、百済系単弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。また町内における奈良・平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査や坊所一本谷遺跡[34]などでまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られていたが、昭和40年代後半からの圃場整備事業によって原状が失われてしまった。そのようななかで、町の公園として整備された江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が建物跡ともに出土し、また、坊所城跡[35]では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と呼ぶにふさわしい地域といえる。

註

1）藤瀬禎博・石橋新次 『柚比遺跡群範囲確認調査第３年次概要報告書』 鳥栖市文化財調査報告書第30集 鳥栖市教育委員会 1980
2）木下巧・天本洋一 『姫方遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第30集 佐賀県教育委員会 1974
3）七田忠昭 『検見谷遺跡』 北茂安町文化財調査報告書第２集 北茂安町教育委員会 1986
4）金関丈夫・坪井清足・金関恕 「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』 日本考古学協会 1961
5）桑原幸則 『環濠集落 吉野ヶ里遺跡 概報』 佐賀県教育委員会 1990
6）平成４年度、上峰町教育委員会調査、整理中
7）七田忠志 「原始」『上峰村史』 上峰村 1979
8）下山正一・西田民雄 「Ⅱ．佐賀県上峰町周辺の地形と地質」『佐賀平野の阿蘇４火砕流と埋没林』上峰町文化財調査報告書第11集 上峰町教育委員会 1994
9）高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋 「香田遺跡」『香田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書２ 佐賀県文化財調査報告書第57集 佐賀県教育委員会 1981
10）七田忠志 「佐賀県戦場ケ谷遺跡」『史前学雑誌』６－２・４ 1934
11）原田大介 『船石遺跡Ⅴ』 上峰町文化財調査報告書第12集 上峰町教育委員会 1995
12）金関丈夫・金関恕・原口正三 「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』 日本考古学協会 1961
13）高島忠平・七田忠昭他 「二塚山遺跡」『二塚山』 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
14）木下巧・七田忠昭 「五本谷遺跡」『二塚山』 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
15）七田忠昭 『一本谷遺跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
16）七田忠昭 『船石遺跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
17）昭和60、62年度、上峰村教育委員会調査、整理中
18）鶴田浩二・原田大介 『船石遺跡Ⅱ 図録編』 上峰村文化財調査報告書第６集 上峰村教育委員会 1988
鶴田浩二・原田大介 『船石遺跡Ⅱ 本文編』 上峰村文化財調査報告書第７集 上峰村教育委員会 1989
19）木下巧他 『姫方原遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第33集 佐賀県教育委員会 1976
20）石橋新次 『剣塚前方後円墳墳』 鳥栖市文化財調査報告書第22集 鳥栖市教育委員会 1984
21）前出（３）
22）松尾禎作 『目達原古墳群調査報告 佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第９輯 佐賀県教育委員会 1950
23）木下之治 「古代国家の形成」『佐賀県史』 佐賀県 1968

24) 木下之治編 『銚子塚』 佐賀市教育委員会 1976
25) 前出 (23)
26) 前出 (17)
27) 七田忠昭・高山久美子・西田和己 『下中杖遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第54集 佐賀県教育委員会 1980
28) 高瀬哲郎他 「下石動遺跡」『下石動遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 6 佐賀県文化財調査報告書第86集 佐賀県教育委員会 1987
29) 松尾禎作 「東脊振村辛上廃寺跡の調査」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』 第 5 輯 佐賀県 1936
30) 田平徳栄他 『霊仙寺跡』 東脊振村文化財調査報告書第 4 集 東脊振村教育委員会 1980
31) 高島忠平・杠一義 『堤土塁跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1978
32) 松尾禎作「塔の塚廃寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』 第 7 輯 佐賀県 1940
33) 平成 3 、 4 年度、上峰町教育委員会調査、整理中
34) 平成 5 、 6 年度、上峰町教育委員会調査、整理中
35) 原田大介 『坊所城跡』 上峰町文化財調査報告書第10集 上峰町教育委員会 1992

II．調査の経過

1．調査に至る経緯

上峰町は、昭和30年代までは純農村として、近世以来の水田耕作を主とした農業経営が連綿として行われてきた。しかし、戦後の激変する社会・産業の構造は、労働力の都市部への流出などを招き、旧来の農業経営による農家経済を圧迫する事態となった。この農家経済の行き詰まりを打開するためには、近代的な大型圃場と農地の集団化を併せ行い、高度の農業生産技術と大型機械の一貫作業体系の導入により、労働生産性の向上と農業経営の合理化による農家所得の増大を図る必要があった。佐賀県では、昭和38年度より県営農業基盤整備事業の計画が策定され、昭和41年度より事業が開始された。上峰町においても、昭和42年度にモデル事業として町南部の碇地区を対象に事業が実施され、昭和46年度以後国道34号線以南の町南部の圃場を対象に事業が実施された。

一方、国道34号線以北の大字堤地区の耕地は、洪積世丘陵と切通川本支流の開析谷底平野からなっており、地区の１戸当たりの平均耕地面積は約0.6haと県平均を下回り、用水源には河川、溜池があてられていたが、いずれも用水確保が不十分であり、慢性的な用水不足を来していた。また、圃場は不整形で散在し、道路は狭く未整備で機械導入も困難で圃場条件は極めて悪かった。このため、昭和58年度より、堤地区を対象とした上峰北部土農業基盤整備事業の実施に向けた調査計画が開始され、昭和60年度より事業が実施されるに至った。

しかし、地形的制約の上に成り立ってきた従来の耕地の集団化、道路・用排水路の整備を目的とした農業基盤整備事業の実施は、一方では土地の大規模な改変を必要とし、ひいては地下の埋蔵文化財に工事の影響を及ぼすことが予想され、今日的要求と埋蔵文化財の保護との調整という問題が文化財保護行政の大きな課題となった。

この課題の解決策として、佐賀県においては、農業基盤整備事業とこれに伴う埋蔵文化財の保護との調整について、県農林部と県教育委員会との間で「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」（昭和53年４月締結、昭和59年４月一部改正。）という覚書を交わし、現在この確認事項に基づき、県農林部、県教育委員会、市町村土地改良担当課、市町村教育委員会の関係機関四者による協議が行われ、事業の実施面積の調整、工事の設計変更などによる調査面積の縮小など、文化財の保護に関する調整が行われている。

上峰北部農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する協議調整は、昭和59年９月に、県事業担当部局から県教育委員会に昭和60年度農業基盤整備事業施工計画が提出され、ＪＲ長崎本線以南の埋蔵文化財の取扱について協議されたたことに始まる。

平成元年10月17日、「平成２年農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第１回協議会」が開催された。その席上、平成２年度農業基盤整備事業として、堤地区北部一帯の事業計画が提示された。事業計画区域には、以前から「小水城」として専門家の注目を集め、昭和53年に生活道路設置に伴い調査が行われ、大規模な版築土塁が確認された堤土塁跡（「西側土塁」と呼称。）の東に位置し、当時自然の丘陵と認識されていた地域をはじめ、土塁の後背地と考えられる北側一帯、そして八藤丘陵の西側などが含まれていた。協議の結果、今回の八藤遺跡４・５区、堤土塁跡２区を含む堤地区一帯について埋蔵文化財の確認調査を実施することとなった。

確認調査は、農業基盤整備事業施工予定地内の町道堤・船石線の北部一帯の田面、耕地を対象に、稲刈り終了をまって実施した。調査は、２ｍ×２ｍの試掘溝を約20m間隔で設定し、実施した。その結果、試掘溝136カ所による調査で約40,000㎡におよぶ遺跡の広がりを確認した。

平成元年12月26日、確認調査の結果に基づいて「第２回協議会」が開催された。本席上では、約40,000㎡に及ぶ遺跡の取扱について協議が行われ、事業の設計変更による調査面積の縮小など文化財の保護に関する調整を進

めていった。その後個別協議を繰り返し、最終的に、堤集落北方に位置し堤土塁跡の後背地にあたる堤六本谷遺跡（大字堤字六本谷所在。今回の確認調査で発見、周知化。）8,000㎡、字迎原所在の八藤遺跡、堤土塁跡14,000㎡、合計３遺跡、22,000㎡について平成２年度事業として水田基盤造成工事、水路掘削工事などで地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲を事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することになった。

また、昭和53年当時、西側土塁の東部の自然の丘陵であると認識されていた部分については、確認調査の結果、自然の丘陵を整形し、その上部に約２ｍの厚さの版築遺構が検出されたことから、西側土塁と一対の人工物(「東側土塁」と呼称。）であることが確認され、堤土塁の全体規模が明らかになった。このことをうけ、東側土塁部分は農業基盤整備事業から除外され、保存されることとなった。

２．調査の経過

平成２年度の佐賀県営農業基盤整備事業に伴う発掘調査は、水田基盤造成工事により面的に削平が予定される部分14,000㎡を便宜的にに分割し、実施した。調査は、平成２年６月に着手し、翌平成３年３月26日まで現地での作業を行った。以下、簡略に調査経過を記す。

６月８日、堤六本谷遺跡調査地区において、重機による表土剝ぎを開始、平成２年度の農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財調査に着手した。６月21日、同調査区において簡単な調査の安全祈願を行い、作業員による遺構検出作業を開始した。

八藤遺跡４区、堤土塁跡２区の調査は、堤六本谷遺跡の表土剝ぎが一段落した６月25日より、調査対象地区西側の堤土塁跡２区南部より重機による表土剝ぎ作業を開始した。以後、表土剝ぎが終了した部分より、逐次作業員による遺構検出作業、遺構掘り下げ作業を進めていった。

８月11日より15日まで、お盆休み。

９月５日より、遺構の掘り下げ作業が終了した区域から遺構実測作業に着手すべく、磁北を基準としたグリッドを設定し、測量杭打ち作業を始めた。13日より遺構実測作業を開始。

10月に入り、工事側より、調査終了部分から現場の逐次引渡の要請がなされたことを受けて、堤土塁跡２区と八藤遺跡４区の農道以西の部分を10月末を目処に引き渡すこととなった。しかし、八藤遺跡４区の引き渡し対象地区のＡ-5･6Gr.、Ｂ-5･6Gr. において、チップ類を主体とする縄文期の遺物包含層が検出されこの部分の調査に時間が費やされた。Ａ-６-21Gr. では総数693点にのぼるチップ類が出土し、掘り下げ作業と記録作業に11月19日までを要した。その後気球による空中写真の撮影を行い、現場を引き渡した。

この後、発掘作業の主体を農道以東に移し作業を進めるが、その進捗状況はふるわず、12月より中原町の発掘作業員の方々の応援を仰ぎ、調査区北部を上峰町側、南部を中原町側でという２班体制で発掘を行うこととした。この中原町の応援は、年内一杯までの一月足らずであったが、同時に堤六本谷遺跡に６地区、8,000㎡の調査区を抱えていた上峰町にとっては何よりの協力であった。

平成２年12月28日より平成３年１月６日まで年末年始のため作業休み。

年が改まり、引き続き八藤遺跡４区の調査を進める一方で、５区の調査に着手した。５区の調査は、表土剝ぎから遺構検出、掘り下げ、実測まで約２カ月を要し、３月７日に終了した。

八藤遺跡４区の調査もようやく目処かつきかけた３月に始めになり、これまで、農業基盤整備事業の手続きの問題で未調査であった耕地１面（約1,000㎡）について、年度内に調査実施の要請が、土地改良区側よりなされた。この部分の調査は、３月29日まで行い、同日発掘器材等を撤収し、現場での調査を終了した。

Ⅲ．遺跡の概要

1．遺跡の概要（Fig. 3）

八藤遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字八藤、迎原の標高20m～35mの洪積世段丘（「八藤丘陵」と呼称する。）上に位置している。遺跡が立地する八藤丘陵は、東を切通川の支流である大谷川に、西を切通川本流および支流の大鳥居川にそれぞれ開析され、南北に延びる舌状の丘陵となっている。

遺跡は、これまでは、『上峰村史』[1]の縄文時代の項に、「堤東遺跡」、「堤東丘陵」出土遺物として、曽畑式土器、阿高式土器、石斧や石匙の採取が紹介されている程度で学術的調査の前例がなく、大字堤字八藤地区に位置する丘陵先端部のみが「八藤遺跡・縄文時代・散布地」として『佐賀県遺跡地図』[2]に周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていた。

しかし、昭和63年に実施した、昭和64年度農業基盤整備事業施工予定地区内文化財確認調査によって、弥生時代から奈良・平安期までの遺構が確認され、北方の新立古墳群が立地する高位段丘面までの字迎原地区の低位丘陵面全域に遺跡の広がりが確認され、これまで農業基盤整備事業に伴い調査を実施してきた船石遺跡と同様、大規模な複合遺跡であることが判明した。[3]

一方、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字五本谷・迎原・六本谷にまたがる堤土塁跡は、東側の八藤丘陵と西側の二塚山丘陵が最も接近する部分の谷を遮断する形で築かれた人工の土手で[4]、今回の農業基盤整備事業に伴う確認調査で自然の丘陵と考えられていた八藤丘陵から派生する一支丘上で厚さ約２ｍの版築土塁が検出され、西側土塁と一対のものであることが確認された。土塁の全長は、約300m、基部の幅は約40m、土塁南の田面との比高差は約９ｍを計る。現在土塁中央を切通川が流れ、その部分約70mの間に土塁は見られず、東西各々長さ約110mの分立した土塁として遺存しており、この間隙が本来のものか、流失したものかは不明である。

早くから堤の集落として開かれた西側土塁に比べて、昭和40年代まで近世以来墓地として利用されてきた東側土塁は比較的原状をとどめている。東側土塁は、前述のように、自然の丘陵を整形しその上部に版築土塁を築く二段築成で版築土塁の北側には犬走り状の平坦面をもっている。人工の版築土塁の幅は、試掘調査の結果では近世以来の墓壙によって壊され不明であるが、切通川に侵蝕され露頭にとなっている南面にもその断面が見えることから10m以上はあったものと考えられる。東側土塁と八藤丘陵との取り付け部分には、地元で「野越し」と呼ばれる、溝状の施設が土塁を横断している。

『佐賀県遺跡地図』では堤土塁跡の範囲はこの野越しを越え、八藤丘陵の西斜面に及んでおり、八藤遺跡のとの境界は、東側が丘陵を縦断する農道で、北側が耕地の畦道で便宜的に区切られている。

両遺跡が所在する大字堤地区一帯には、各段丘上に著名な遺跡が分布している。八藤丘陵の東側には、前述のように大谷川の谷水田を挟んだ船石丘陵上に船石遺跡[5]が、また、西側には屋形原遺跡[6]、更に西方の二塚山丘陵城には佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い調査が行われた二塚山遺跡[7]・五本谷遺跡[7]、切通遺跡[8]など弥生時代遺跡を中心に縄文時代から奈良・平安期の遺跡群が展開している。

2．調査区の概要（Fig. 3～5）

平成２年度県営農業基盤整備事業施工区域のうち、八藤丘陵において今回の調査の対象となった地区は、八藤遺跡４区・堤土塁跡２区と八藤遺跡５区の２カ所、３区に及んでいる。八藤遺跡４区・堤土塁跡２区は、上峰町大字堤字迎原の標高27m～30m付近の、八藤遺跡５区は標高30m～35m付近の低位段丘面に位置し、地目は田で

Fig. 3　遺跡周辺地形図および調査区位置図（1/5,000）

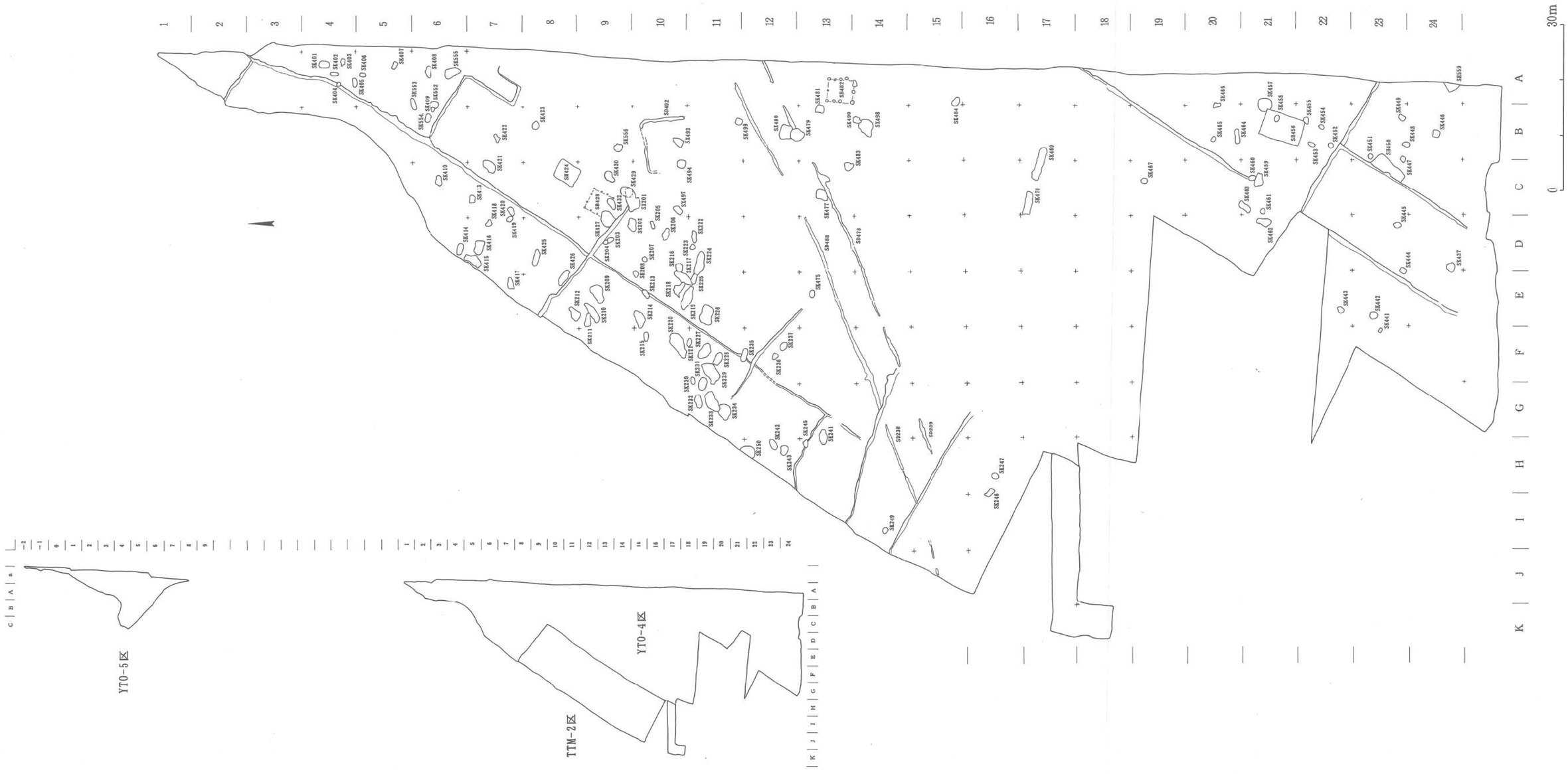


Fig. 4　八藤遺跡４区・堤土塁跡２区遺構配置図（1/600）

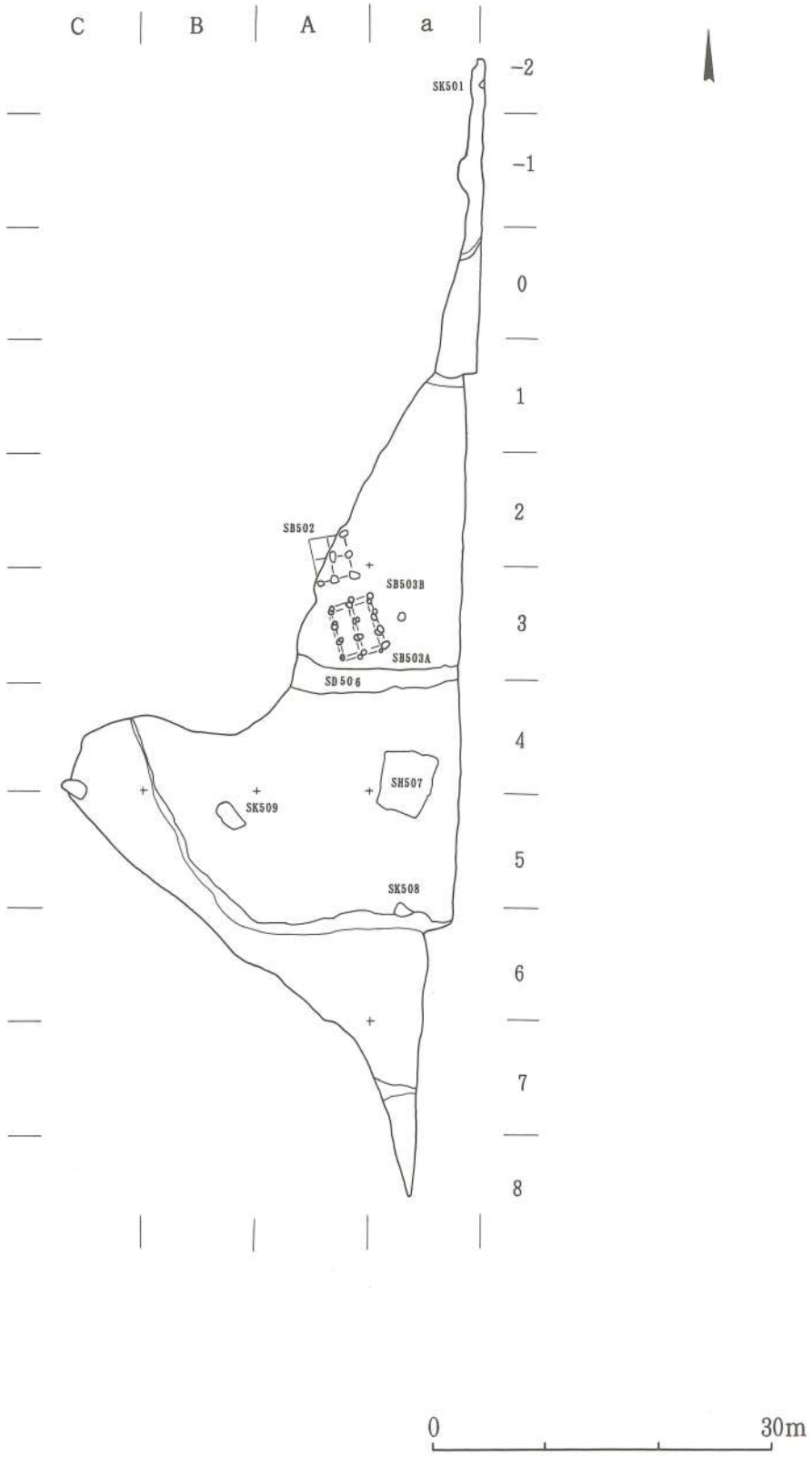


Fig. 5　八藤遺跡 5 区遺構配置図（1/600）

あるが、水掛かりが悪く、主に畑地として利用されている。大字迎原地区の八藤丘陵は、東西両側をそれぞれ切通川の支流である大谷川、大鳥居川に開析された馬の背状の舌状丘陵で、北方の新立古墳群が位置する高位段丘面から南南西へ向かって延びている。丘陵の尾根上には、堤集落から塚原集落方面へ農道が縦断し、この農道の一部が堤土塁跡と八藤遺跡の境界となっている。八藤丘陵は、大正年間に当時としては大規模な尽力による耕地整理が行われており、弥生時代以後の遺物包含層はほとんど失われている。

八藤遺跡４区・堤土塁跡２区の概要

八藤遺跡４区・堤土塁跡２区は、堤集落と船石集落を結ぶ町道以北の八藤丘陵中央部分西側にあたり、調査区の西方には、堤土塁の東側土塁が取り付けられている。前述のように、『佐賀県遺跡地図』上では２遺跡として登録されているため、調査は、便宜上、八藤遺跡４区9,710㎡・堤土塁跡２区3,350㎡に分割して実施したが、両者は八藤丘陵西斜面を占める連続した埋蔵文化財包蔵地であり、その内容も連続したものである。

八藤遺跡５区も含む調査対象区域全域に磁北を基準として、10m×10mグリッドを設定した。八藤遺跡４区・堤土塁跡２区については、南北列北から１～25の25列、東西列東からａ～Ａ～Ｋの12列を設定し、調査を実施した。さらに八藤遺跡４区のＡ-5･6Gr.、Ｂ-5･6Gr. における縄文時代の遺物包含層の調査では、この10m×10mグリッドをさらに２m×２mの１～25小グリッドとして調査を行った。

調査区域の土層は、後世の耕作により各地代の遺物包含層は失われ、耕作土あるいは表土直下が洪積世段丘を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

この八藤遺跡４区・堤土塁跡２区の調査では弥生時代中期後半の竪穴式住居址４軒、掘建柱建物址２棟、そのほか、溝跡２条、縄文時代後期の所産と考えられるの土壙、そのほかピットなどが検出された。さらに八藤遺跡４区北部のＡ-5･6Gr.、Ｂ-5･6Gr. では、チップ類を多量に含んだ縄文時代の遺物包含層検出され、石器製作の場であった可能性が高い。

遺物は、各遺構から縄文式土器片、弥生式土器片、土師器、須恵器、中世土器が出土しているが量的には少ない。これら土器とともに、石鏃、石匙、石斧、石剣などの石器類、鉄滓などが出土している。

今回の調査では、縄文時代の遺構・遺物がまとまって検出され、比較的調査例が少ないこの時期の人々の活動を考える上で貴重な資料と言えよう。また堤土塁東側土塁東部に端を発し、堤土塁跡２区、八藤遺跡４区をほぼ東西に横断し、さらに東の調査対象地区外の耕地下へ続くと予想される幅約６mの間隔で平行に延びる２条の溝跡は、道路の側溝であると考えられ、堤土塁跡の性格解明に一石を投じるものといえる。

八藤遺跡５区の概要

八藤遺跡５区（940㎡）は、八藤遺跡４区の北方約120mから230m付近に位置し、西を流れる大鳥居川の蛇行にあわせて丘陵が西へ突出した部分にあたっている。

調査グリッドは、八藤遺跡４区・堤土塁跡２区と同一グリッドを用いたが、この八藤遺跡５区については、南北列北から－２～０～８の11列、東西列東からｂ～ａ～Ａ～Ｄの６列を設定した。

八藤遺跡５区の調査では、弥生時代中期後半の竪穴式住居址１軒、掘建柱建物址２棟（内１棟は建て替えられたもの。）、そのほか土壙、ピットなどが検出された。

遺物は、遺構から出土したものはごく少量であるが、縄文式土器、弥生式土器、土師器などの小片が出土している。

註

1）七田忠志 「二　原始社会の発展（縄文時代）」『上峰村史』 上峰村　1979

2）『佐賀県遺跡地図』 佐賀県教育委員会　1986

3）樋口秀信・徳永貞紹 「昭和63年度文化財確認調査の内容」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書８』 佐賀県文化財調査報告書第98集　佐賀県教育委員会　1990

4）高島忠平・杠一義 『堤土塁跡』 上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1978

5）七田忠昭 『船石遺跡』 上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983

5）鶴田浩二・原田大介 『船石遺跡Ⅱ　図録編』 上峰村文化財調査報告書第６集　上峰村教育委員会　1988

5）鶴田浩二・原田大介 『船石遺跡Ⅱ　本文編』 上峰村文化財調査報告書第７集　上峰村教育委員会　1989

5）原田大介「２．船石遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書７」佐賀県文化財調査報告書第94集　佐賀県教育委員会　1989

5）原田大介 「６．船石遺跡８・９・10区」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書８」 佐賀県文化財調査報告書第98集　佐賀県教育委員会　1990

5）原田大介 「３．船石南遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書７」 佐賀県文化財調査報告書第94集　佐賀県教育委員会　1989

6）杠一義 『屋形原遺跡』　上峰村文化財調査報告書第二集　上峰村教育委員会　1979

6）樋口秀信・徳永貞紹 「昭和63年度文化財確認調査の内容」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書８』 佐賀県文化財調査報告書第98集　佐賀県教育委員会　1990

7）高島忠平・七田忠昭他 『二塚山』 佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会

8）金関丈夫・金関恕・原口正三 「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』 日本考古学協会　1961

Ⅳ. 遺　　構

今回の農業基盤整備事業に伴い遺構番号を関して調査を行ったものは、八藤遺跡４・５区、堤土塁跡２区あわせて173に及んだ。これらのなかで、調査を進めるに従い、近現代以降の耕作に伴う用排水路、掘り込みなど近世以降の比較的新しい時期の所産と考えられるものについては欠番として処理した。

その結果、遺構として発掘作業を行ったものは、竪穴式住居址５軒、掘立柱建物址４棟、その他、貯蔵穴などの土壙130基、溝跡２遺構など、144の遺構とのピットである。

ここでは、竪穴式住居址５軒・掘立柱建物址４棟・土壙など130基・溝跡２遺構について報告したい。

１．竪穴式住居址（Fig.６、８・PL.５、６、８・Tab.１）

今回の調査で検出された竪穴式住居址と考えられる遺構は、八藤遺跡４区C-8Gr.のSH-424、C-23Gr.のSH-450、B-21Gr.のSH-456、A-24Gr.のSH-559、八藤遺跡５区a-4・5Gr.のSH-507の５軒である。いずれも後世の削平を受けており SH-424が約20cm、他は10cm程度の掘り込みが残るのみである。出土遺物も、SH-424より弥生中期の甕、壺などが出土しているほかは、ほとんど無い。

SH-424（Fig.６・PL.５-１、８-１、８-２）

SH-424は、八藤遺跡４区C-8Gr.で検出された竪穴式住居址で、プランは、長辺4.3m、短辺3.4mの長方形を呈す。主柱穴は、長軸上に２本。主柱穴の間に炉跡と考えられる掘り込みをもつ。東壁中央部に1.4m×１mの不整方形の貯蔵穴状の掘り込みをもつ。西壁際には長さ3.3m、幅約40cmの不明瞭な壁周溝が設けられている。主柱穴の主軸は、N-31°-Eを計る。

SH-450（Fig.６・PL.５-２、８-３）

SH-450は、八藤遺跡４区C-23Gr.で検出された竪穴式住居址で、北西部を畑の段により失っており、全体の1/2弱が遺存している。プランは、遺存部から一辺6.1mの方形を呈すものと推定される。遺存部の一部を除き幅約20cmの壁周溝が巡っている。床面に２ヶ所の掘り込みがみえるが、柱穴とは断定できない。推定主軸は、N-43°-Eである。

SH-456（Fig.６・PL.５-３、８-４）

SH-450は、八藤遺跡４区B-21Gr.で検出された竪穴式住居址で、プランは、長辺7.4m、短辺4.8mの長方形を呈す。主柱穴はじめ、炉跡、周溝などは検出されなかった。主軸は、N-20°-Eである。

また、本住居址の南には数本のピットが円を描くような配置で検出されており（PL.５-３）、円形住居址が存在していたものと推定される。

SH-559（Fig.６）

SH-559は、八藤遺跡４区A-24Gr.でコーナー部分が検出された竪穴式住居址と考えられる遺構で、プランは、方形を呈すものと推定される。遺構の大半は東側の調査区域外に続くものと思われ、主柱穴はじめ、炉跡、周溝などは検出されなかった。主軸は、N-30°-Wである。

SH-507 (Fig. 8 ・PL. 6 - 1)

SH-507は、八藤遺跡５区ａ-4・5Gr. で検出された竪穴式住居址で、プランは、不整方形を呈す。中央部に炉跡と考えられる浅い掘り込みをもつが、主柱穴は検出されなかった。主軸は、N-17°-Eである。

Tab. 1　出土竪穴式住居址一覧表

住居址番号	平面形態	規模 (m・㎡)				棟方向	屋内施設				出土遺物 上) 土器・土製品 下) 石製品・その他	備考
		長さ	幅	深さ	床面積		主柱穴	溝	炉・焼土等	その他		
SH-424	長方形	4.26	3.44	0.21	13.5	N-31°-E	2本	○	炉状土壙	貯蔵穴	甕・壺・碗・蓋	
SH-450	方形	6.13	※2.6	0.07	※11.2	N-43°-E		○	炉状土壙？		甕	
SH-456	長方形	7.36	4.78	0.12	34.7	N-20°-E						
SH-559	方形	※2.4	※2.2	0.11	※ 2.6	N-30°-W						
SH-507	不整長方形	5.73	4.63	0.10	22.4	N-17°-E			炉状土壙		縄文式土器片	

2．掘立柱建物址 (Fig. 7～9 ・PL. 6、7 ・Tab. 2)

今回の調査で検出された掘立柱建物址と考えられる遺構は、八藤遺跡４区C-9Gr. のSB-428、A-13Gr. のSB-482、八藤遺跡５区A-2Gr. のSB-502、A-3Gr. のSB-503A，Bの５棟である。

このほか、比較的遺構の分布が少ないA～G-12～18Gr. 付近にはピットが多数検出されている。これらのなかには、単独のピットのほかに、建物の柱穴も含まれている可能性は高いが特定できなかった。

SB-428 (Fig. 7 ・PL. 6 - 2)

SB-428は、八藤遺跡４区C-9Gr. で検出された掘立柱建物址である。３間×３間の建物で、柱穴は直径30cm、深さ30cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱穴は約1.4mのほぼ等間隔に設けられているが、梁行の柱間は中央が約1.6mとなっている。規模は、桁行4.2m、梁行3.8m、床面積16.0㎡を計る。主軸はN-26°-Eである。

SB-482 (Fig. 7 ・PL. 6 - 3)

SB-428は、八藤遺跡４区A-13Gr. で検出された掘立柱建物址である。３間×２間の建物で、柱穴は直径50cm、深さ50cm程度の円形の掘り込みで、柱が据えられる部分がさらに直径20cm、深さ10cmほど掘りくぼめられた二段掘りとなっている。桁行の柱穴は、南側の１間が2.3mと広く、他の２間とほぼ同じ柱間となっており、本来２間×２間の建物であったものに、柱を追加した可能性が高い。規模は、桁行4.6m、梁行3.8m、床面積17.5㎡を計る。主軸はN-6°-Eである。柱穴より土師器、須恵器が出土している。

SB-502 (Fig. 8 ・PL. 7 - 1)

SB-502は、八藤遺跡５区A-2Gr. で検出された総柱の掘立柱建物址である。建物の北西部分が大鳥居川の侵蝕によって丘陵ごと失われており、２間×２間、６本の柱穴だけが遺存している。柱穴は直径60cm、深さ50cm程度の不整円形の掘り込みで、南側の３本、北側の１本の柱穴には根固め石がみられる。規模は、現存部分で桁行3.9m、梁行3.2m、床面積12.5m²を計る。主軸は推定でN-15°-Wである。

SB-503A, B (Fig. 9 ・PL. 7 - 1)

SB-503は、八藤遺跡５区A-3Gr. で検出された総柱の掘立柱建物址である。３間×２間の建物を建て替えたもので、柱穴は直径60cm、深さ60cm程度の円形の掘り込み。規模は、建て替え前のSB-503Aが桁行4.5m、梁行3.6m、床面積16.6m²、SB-503Aの西辺柱列を共有する形で建て替えられたSB-503Bが桁行4.5m、梁行3.7m、床面積16.7m²を計る。主軸はいずれもN-13°-Eである。

Tab. 2　出土掘立柱建物址一覧表

建物址番号	平面形態	規模 (m・m²)				棟方向
		桁行	梁行	長さ×幅	床面積	
SB-428	3×3	1.4	1.1・1.6・1.1	4.2×3.8	16.0	N-26°-E
SB-482	3×2	1.2・1.1・2.3	2.1・1.8	4.6×3.8	17.5	N-6°-E
SB-502	※2×2	2.0・1.9	1.6	3.9×3.2	12.5	N-15°-E
SB-503A	3×2	1.5	1.8	4.5×3.6	16.6	N-13°-E
SB-503B	3×2	1.5	1.9	4.5×3.7	16.7	N-13°-E

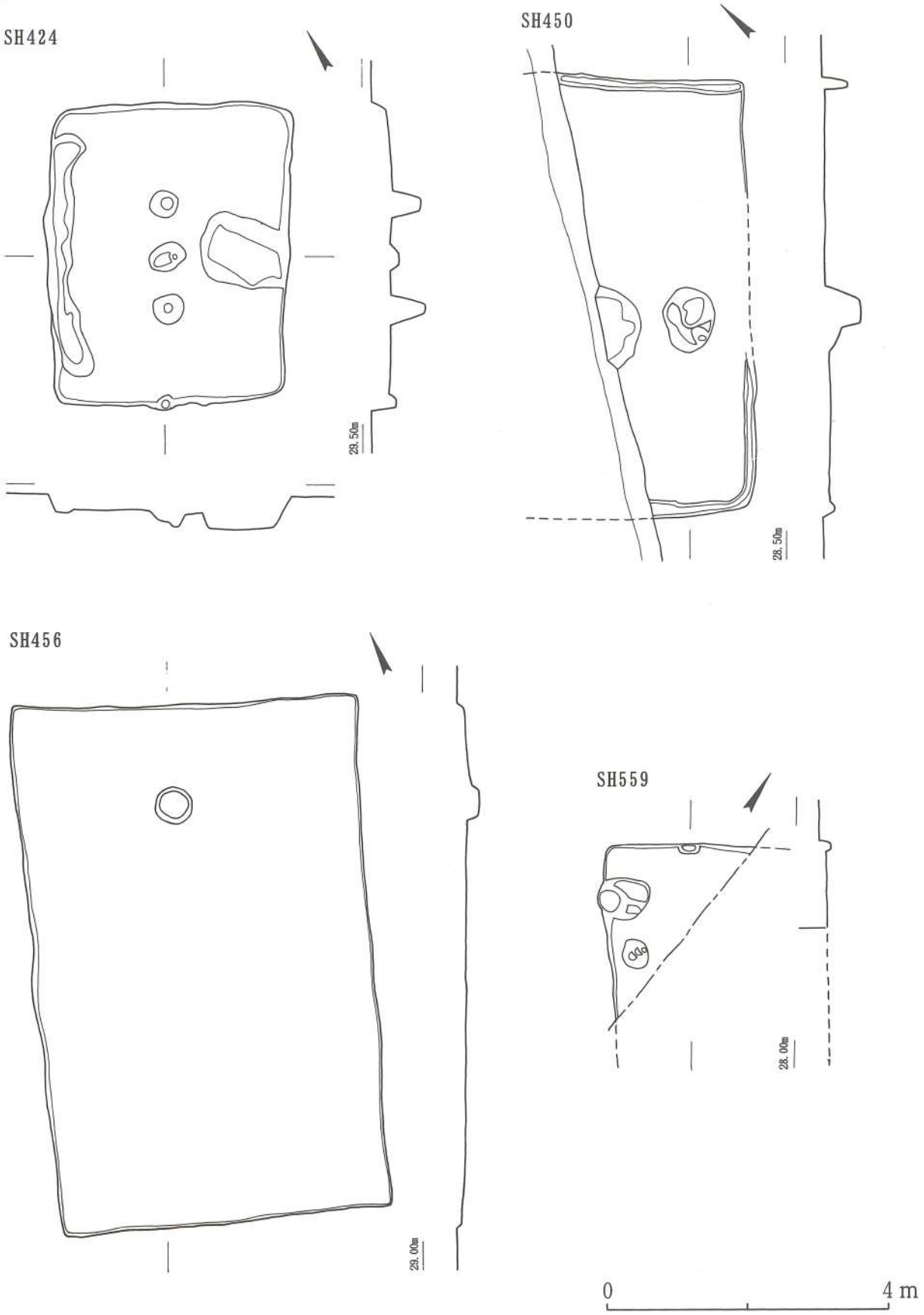


Fig. 6　竪穴式住居址実測図(1)　SH-424・SH-450・SH-456・SH-559(1/80)

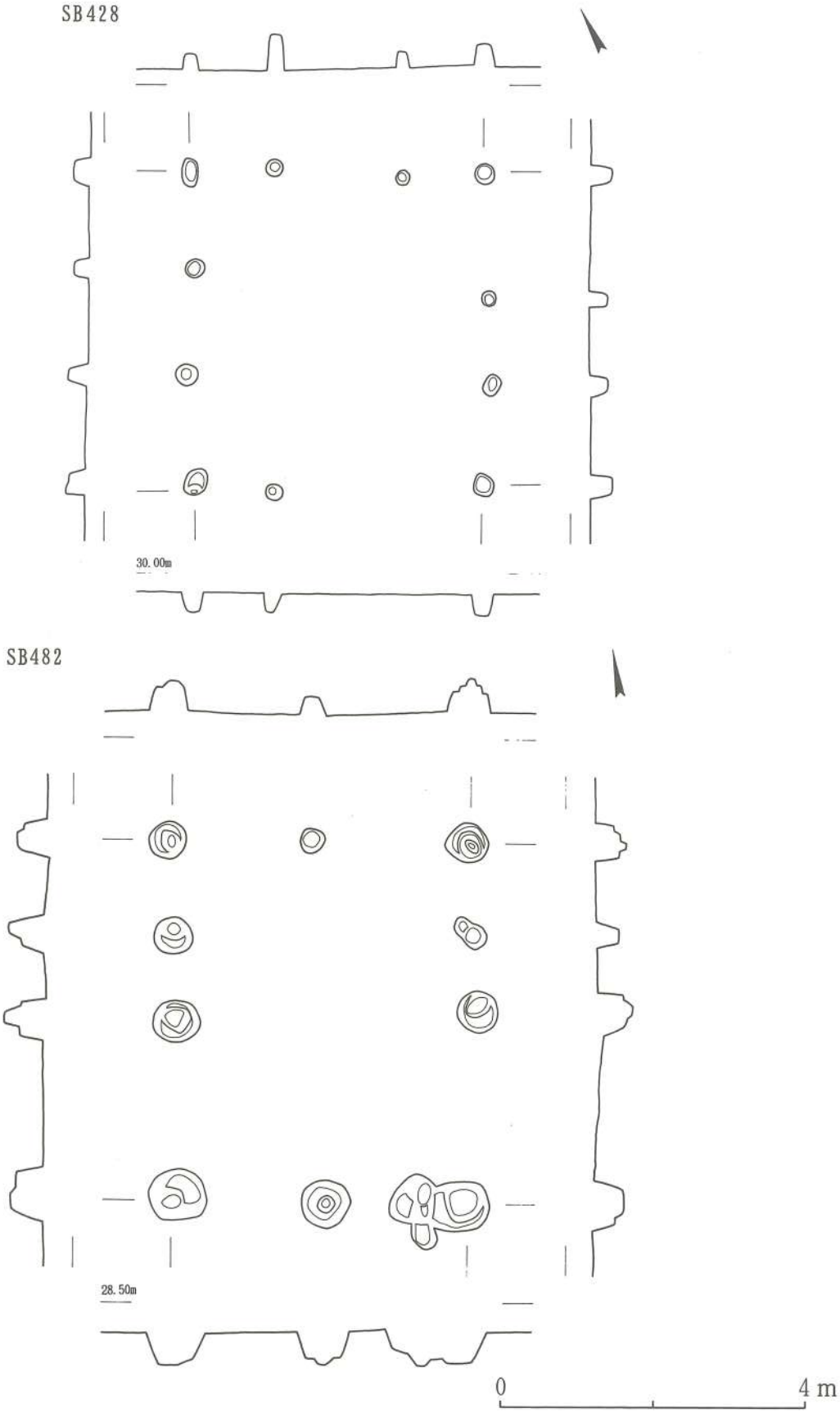


Fig. 7　掘立柱建物址実測図(1)　SB-428・SB-482(1/80)

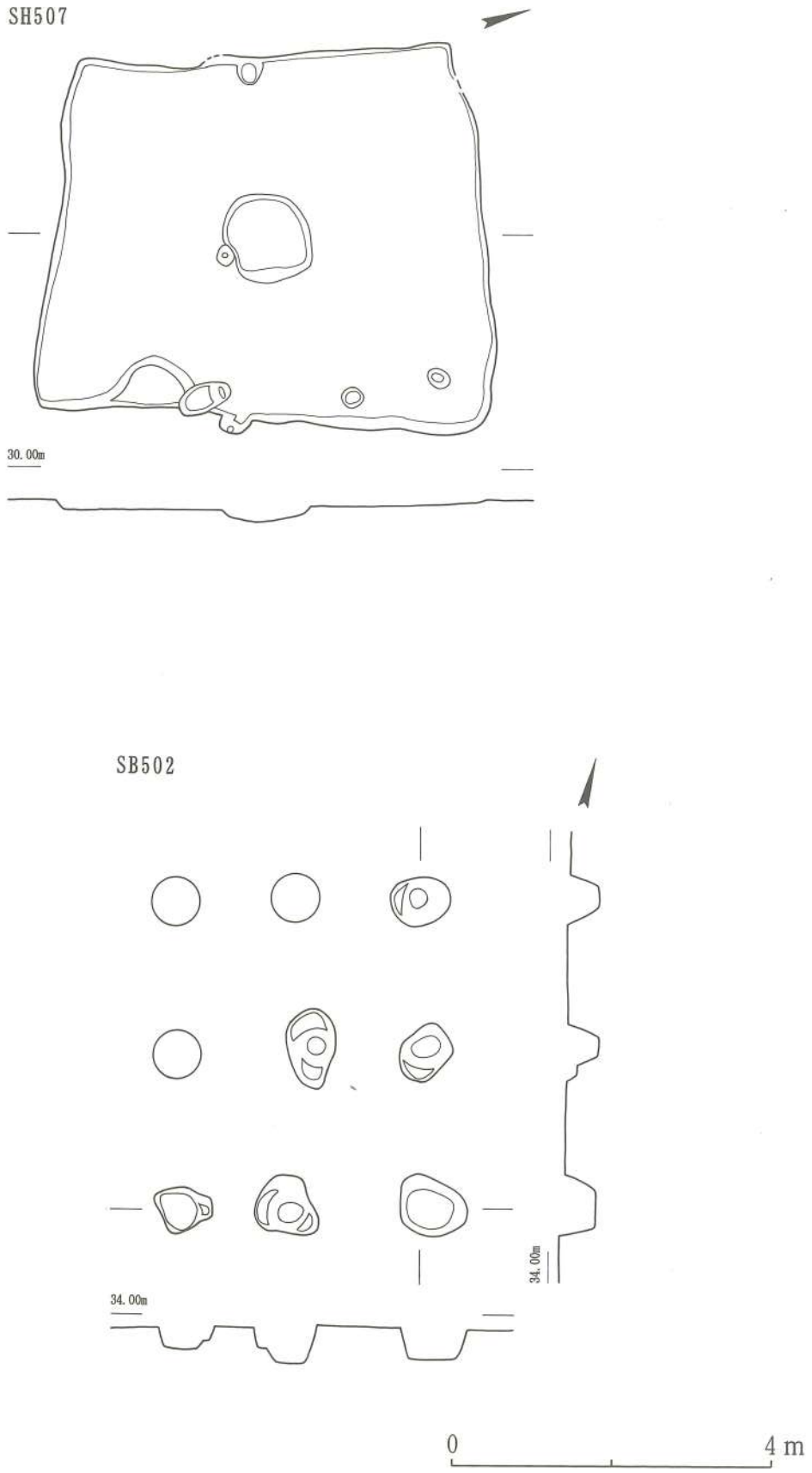


Fig. 8　竪穴式住居址実測図(2)・掘立柱建物址実測図(2)　SH-507・SB-502(1/80)

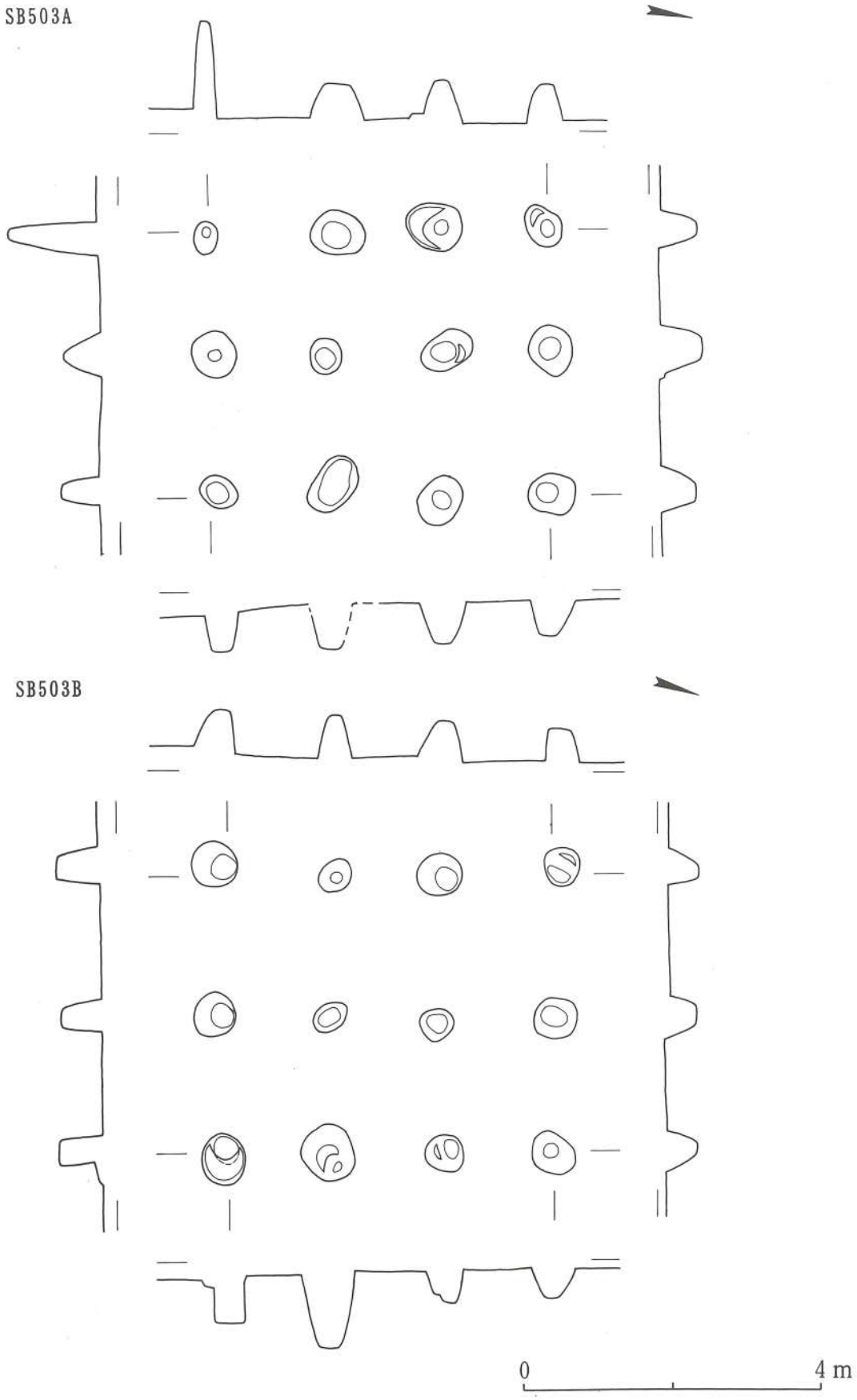


Fig. 9　掘立柱建物址実測図(3)　SB-503A・SB-503B(1/80)

3．土壙・貯蔵穴（Fig.10～22・PL.8～20・Tab.3）

今回の調査で検出された土壙は、130基であった。これらは、平面形態により、SK-401、SK-406、SK-407、SK-413、SK-416、SK-444、SK-446、SK-451、SK-465、SK-469、SK-470、SK-499、SK-203、SK-204など方形を基調としたプランのものと、SK-423、SK-437、SK-442、SK-445、SK-453、SK-457、SK-467、SK-477、SK-479、SK-494、SK-552、SK-556、SK-560、SK-207、SK-221、SK-247など円形を基調としたプランのものとに分類できる。さらに、この二者のほか、SK-421、SK-270、SK-430、SK-462、SK-463、SK-555、SX-201、SK-202、SK-209、SK-210、SK-212、SK-214、SK-217、SK-219、SK-220、SK-224、SK-226、SK-227、SK-229、SK-233など不整形のプランを呈し掘り方も不規則なものの一群が認められる。また、SK-407、SK-451、SK-452、SK-221などは、土壙の床面中央にピットをもち「落とし穴」的土壙と考えられる。今回の調査では、袋状土壙はSK-249の1基が検出されている。

これらの土壙のうち、石鏃・石匙などの石器類やチップ類を出土したものは縄文時代の土壙と考えられる。とくに、A－5・6 Gr.、B－5・6 Gr.で検出されたチップ類を主体とした遺物包含層の調査では、包含層を掘り下げた結果、土壙内に集中して遺物が分布していることが判明した（SK-552～SK-555）。また、遺物をもたない土壙についても、掘り方も不規則で不整形の土壙のほとんどは縄文期のものと考えられる。そのほか、出土遺物などより時期が特定できるものは、器台を出土したSK-457が弥生時代中期、土師器甕・須恵器坏などを出土しているSK-430、SK-442、SK-477、SK-557、SK-563などが奈良時代、土鍋などを出土しているSK-429、SK-441などが中世の所産と考えられる。

検出された各土壙の規模・深さ等の法量、及び出土遺物は下記一覧表にまとめた。

Tab.3　出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模（上段…上面、下段…底面、単位：m・m²）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-401	隅丸長方形	1.87 1.56	1.23 1.07	0.32	1.5			
SK-402	不整長方形	1.54 1.32	0.73 0.61	0.14	0.6			
SK-403	不整形	1.32 0.87	0.83 0.68	0.29	0.6			
SK-404	楕円形	※0.47 ※0.43	0.64 0.54	0.10	※0.4			
SK-405	楕円形	1.73 0.84	0.92 0.33	0.40	0.3			
SK-406	隅丸長方形	1.11 1.06	0.63 0.60	0.35	0.6			
SK-407	長方形	1.39 1.33	0.72 0.65	0.24	0.8	中央にピット		
SK-408	不整形	2.09 1.72	1.18 0.73	0.50	1.0			
SK-409	不整形	0.93 0.80	0.76 0.60	0.38	2.3			
SK-410	不整形	1.78 1.49	1.22 0.83	0.35	0.5			
SK-413	隅丸長方形	1.41 0.72	1.06 0.40	0.33	0.1			
SK-414	不整楕円形	2.05 1.80	1.03 0.69	0.17	1.0			
SK-415	不整形	3.36 2.09	1.53 1.03	0.64	1.3		チップ	
SK-416	不整形	2.47 1.46	1.61 1.05	0.51	1.5			
SK-417	不整形	2.06 1.78	1.02 0.89	0.24	1.1			

Tab. 3　出土土壙一覧表（続き）

遺構番号	平面形態	規模（上段…上面、下段…底面、単位：m・m²）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-418	不整形	1.15 0.87	0.90 0.67	0.25	0.4			
SK-419	不整長方形	1.22 1.03	0.83 0.67	0.16	0.6			
SK-420	不整長方形	1.54 1.28	0.97 0.85	0.29	0.9			
SK-421	不整形	2.79 1.83	1.63 0.50	0.47	1.1		石匙、チップ	
SK-422	不整形	1.58 1.41	0.61 0.55	1.80	0.4			
SK-423	不整円形	1.43 1.32	1.22 1.06	0.51	1.1		チップ	
SK-425	不整形	2.96 2.79	1.05 0.93	0.18	2.0			
SK-426	不整形	3.25 3.13	0.86 0.73	0.21	2.2			
SK-427	不整形	※2.98 ※2.90	2.00 1.90	0.11	※5.0		縄文式土器、石鏃、チップ	
SK-429	不整形	2.24 2.13	1.89 1.74	0.90	3.3		中世土器、志野、石鏃、チップ	
SK-430	不整形	※2.30 ※1.72	1.27 0.63	0.95	※1.1		須恵器坏、チップ	
SK-432	楕円形	2.00 1.61	0.93 0.57	0.49	0.7		チップ	
SK-437	不整形	1.77 0.92	1.63 1.14	0.33	0.7			
SK-441	楕円形	0.87 0.82	0.60 0.55	0.24	0.4		中世土器	
SK-442	不整形	1.38 1.03	1.25 0.75	0.87	0.7	中央にピット	土師器甕、坏須恵器壺、鉄滓、チップ	
SK-443	不整形	1.16 0.96	1.00 0.84	0.36	0.7		チップ	
SK-444	長方形	1.17 1.10	0.92 0.84	0.90	0.9		石剣、チップ	
SK-445	不整方形	1.18 0.93	1.01 0.70	0.48	0.6		石鏃、チップ	
SK-446	不整形	1.59 1.47	1.21 1.08	0.08	(1.3)		石斧、叩き石、石鏃、チップ	
SK-447	不整形	1.02 0.75	0.94 0.68	0.64	0.5		チップ	
SK-448	不整形	1.38 1.17	0.98 0.74	0.28	(0.7)			
SK-449	隅丸長方形	1.16 0.99	0.91 0.70	0.23	0.7			
SK-451	隅丸長方形	0.97 0.86	0.80 0.66	0.38	0.6	中央にピット		
SK-452	隅丸長方形	1.02 0.77	0.85 0.57	0.61	0.4	中央にピット	石匙	
SK-453	楕円形	1.36 1.21	0.73 0.54	0.16	0.5			
SK-454	楕円形	0.93 0.75	0.83 0.72	0.24	0.5			
SK-455	不整形	1.32 1.28	0.96 0.90	0.09	0.8			
SK-457	円形	2.53 2.29	2.38 2.17	0.43	4.1		弥生式土器器台、石斧、チップ	
SK-458	楕円形	1.48 1.37	0.88 0.75	0.23	1.0			
SK-459	不整形	2.53 2.32	1.56 1.48	0.19	2.6			

Tab. 3　出土土壙一覧表（続き）

遺構番号	平面形態	規模（上段…上面、下段…底面、単位：m・m²）長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積	柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
SK-460	楕円形	1.13 0.95	0.74 0.53	0.20	0.4	中央にピット		
SK-461	不整形	0.98 0.72	0.87 0.43	0.36	0.3			
SK-462	不整形	2.75 2.17	1.51 1.06	0.30	1.8			
SK-463	不整形	3.05 2.50	1.14 0.59	0.29	1.2			
SK-464	楕円形	2.63 2.42	0.97 0.82	0.23	1.4			
SK-465	隅丸方形	1.09 0.71	0.73 0.50	0.46	0.3			
SK-466	不整形	1.36 0.90	0.95 0.70	0.75	0.6	中央にピット		
SK-467	不整楕円形	1.28 1.13	0.92 0.72	0.41	0.6			
SK-469	長方形	6.20 5.65	1.37 0.43	0.34	3.1		自然礫	近世
SK-470	不整長方形	4.18 3.38	1.37 0.66	0.34	2.0		自然礫	近世
SK-475	楕円形	1.42 0.68	0.94 0.33	0.65	0.2			
SK-477	不整方形	1.88 1.50	1.68 1.27	0.30	1.6		自然礫、土師器坏	
SK-479	不整形	2.54 1.43	2.27 1.45	0.42	1.3			
SX-480	不整形	2.17 2.07	1.10 1.05	0.03	1.6		チップ	
SK-481	不整形	1.58 1.46	1.46 1.31	0.12	1.5			
SX-483	不整形	1.72 1.68	1.47 1.31	0.33	1.3		チップ	
SK-484	不整形	1.48 1.31	1.35 1.22	0.18	1.1			
SK-490	不整形	1.43 1.29	1.14 0.97	0.56	1.1			
SX-493	不整形	2.03 1.60	1.33 1.16	0.27	1.2		チップ	
SK-494	不整楕円形	1.74 1.04	1.51 1.05	0.22	0.9			
SX-497	不整形	1.80 1.60	※1.20 ※1.09	0.17	※1.0		チップ	
SX-498	不整形	3.26 3.13	2.72 2.57	0.04	5.6		チップ	
SK-499	隅丸方形	1.22 1.05	1.21 1.05	0.32	1.0			
SK-552	不整形	1.42 0.53	※1.29 0.96	0.58	0.5			
SK-553	不整形	2.18 1.28	1.21 0.72	0.23	0.7			
SK-554	不整楕円形	1.55 1.15	1.07 0.63	0.20	0.5			
SK-555	不整形	(2.9) 1.79	2.05 1.75	0.28	2.0			
SK-556	不整方形	1.46 1.29	1.25 1.06	0.17	4.0			
SK-557	楕円形	1.33 1.13	1.77 0.48	0.38	0.4		土師器坏	
SK-558	不整形	20.47 1.67	0.82 0.56	0.23	0.8		チップ	

Tab. 3　出土土壙一覧表（続き）

遺構番号	平面形態	規模（上段…上面、下段…底面、単位：m・m²）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-560	隅丸方形	0.91 0.63	0.84 0.56	0.33	0.3			
SK-561	方形	0.75 0.63	(0.7) (0.5)	0.08	(0.3)			
SK-562	不整形	(2.0) 1.18	1.46 1.02	0.26	1.3		須恵器坏、土師器甕	
SK-563	不整形	(2.2) (1.9)	1.37 1.25	0.15	(1.8)			
SK-564	不整楕円形	1.60 1.50	1.39 1.29	0.11	1.6			
SX-201	不整形	4.54 3.80	2.50 1.68	0.42	5.7		石鏃	
SK-202	不整形	2.40 1.48	1.64 1.43	0.44	2.1			
SK-203	隅丸長方形	(1.2) 0.96	0.70 0.52	0.37	0.4			
SK-204	隅丸長方形	0.82 0.75	0.60 0.49	0.32	0.4		縄文式土器	
SK-205	不整形	1.40 1.28	0.60 0.43	0.19	0.5			
SK-206	不整形	2.18 2.02	1.25 0.74	0.34	1.2			
SK-207	円形	0.97 0.52	0.80 0.44	0.60	0.2			
SK-208	不整形	1.26 1.04	0.96 0.70	0.64	0.6			
SK-209	不整形	3.14 2.98	2.10 1.02	0.50	2.7		石鎌	
SK-210	不整形	4.14 4.00	1.30 1.02	0.71	3.4			
SK-211	不整形	2.42 2.16	1.26 1.04	0.38	1.6			
SK-212	不整形	2.73 2.17	1.75 1.61	0.48	2.0			
SK-213	不整形	1.72 1.54	0.93 0.64	0.40	0.7			
SK-214	不整形	3.42 3.07	1.83 1.30	0.73	3.1			
SK-215	楕円形	1.60 0.80	0.98 0.50	0.69	0.3			
SK-216	隅丸長方形	※1.40 ※0.84	1.13 0.76	0.30	※0.6			
SK-217	不整形	(4.1) (3.8)	1.52 1.02	0.32	(2.9)			
SK-218	不整形	※2.78 ※2.48	1.95 1.24	0.37	※1.5			
SK-219	不整形	4.50 4.28	1.60 0.57	0.62	0.2			
SK-220	不整形	4.90 4.68	2.26 1.94	0.66	5.0		縄文式土器	
SK-221	楕円形	1.22 1.04	0.76 0.64	0.43	0.5	中央にピット		落とし穴
SK-222	不整形	1.92 1.82	0.90 0.65	0.16	1.0			
SK-223	不整形	1.20 0.99	0.90 0.75	0.14	0.6			
SK-224	不整形	4.34 3.92	1.52 0.52	0.54	0.8		石鏃	
SK-225	不整形	※1.99 1.78	0.84 0.52	0.25	1.9			

Tab. 3　出土土壙一覧表（続き）

遺構番号	平面形態	規模（上段…上面、下段…底面、単位：m・m²）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-226	不整形	3.43 (3.18)	2.42 1.70	0.30	(5.1)		石匙	
SK-227	不整形	3.41 2.20	1.72 0.77	0.78	1.5			
SK-228	不整形	2.58 2.50	1.40 0.85	0.29	1.5			
SK-229	不整形	4.14 3.08	2.38 1.84	0.47	3.7			
SK-230	不整形	1.27 0.75	0.81 0.62	0.32	0.4			
SK-231	不整形	2.50 2.42	1.47 1.21	0.33	2.2			
SK-232	不整形	2.52 1.94	1.20 0.72	0.44	1.1			
SK-233	不整形	3.80 3.54	2.06 1.88	0.63	4.6		石鏃	
SK-234	不整形	2.87 2.72	2.28 2.10	0.13	4.6			
SK-235	隅丸長方形	2.36 2.14	0.95 0.67	0.21	1.3			
SK-236	不整形	1.34 1.13	1.12 0.98	0.25	0.7			
SK-237	円形	(1.7) (1.6)	※1.28 ※1.06	0.36	(1.2)			
SK-241	不整形	2.86 2.44	1.40 0.86	0.30	1.6			
SK-242	不整円形	2.16 1.82	1.00 0.40	0.45	0.8			
SK-243	不整形	1.76 0.32	1.33 0.70	0.43	0.2			
SK-245	不整形	1.42 0.50	1.00 0.80	0.47	0.2			
SK-246	不整形	1.77 1.66	1.00 0.88	0.37	1.6			
SK-247	楕円形	1.36 1.14	1.09 0.84	0.17	0.7			
SK-249	不整形	1.09 0.78	0.92 0.72	0.95	0.5			袋状土壙
SK-250	楕円形	2.76 2.06	※2.25 ※1.16	0.81	※3.4			
SK-501	不整形	※0.78 ※0.70	※0.77 ※0.65	0.29	※0.4			
SK-504	不整楕円形	0.78 0.68	0.69 0.63	0.09	0.4			
SK-508	隅丸方形	※1.76 ※1.64	※1.35 ※1.24	0.11	※1.4		縄文式土器	
SK-509	不整形	2.84 2.68	1.50 1.29	0.14	3.2			
SK-510	不整形	2.30 2.15	1.47 1.23	0.41	2.2			

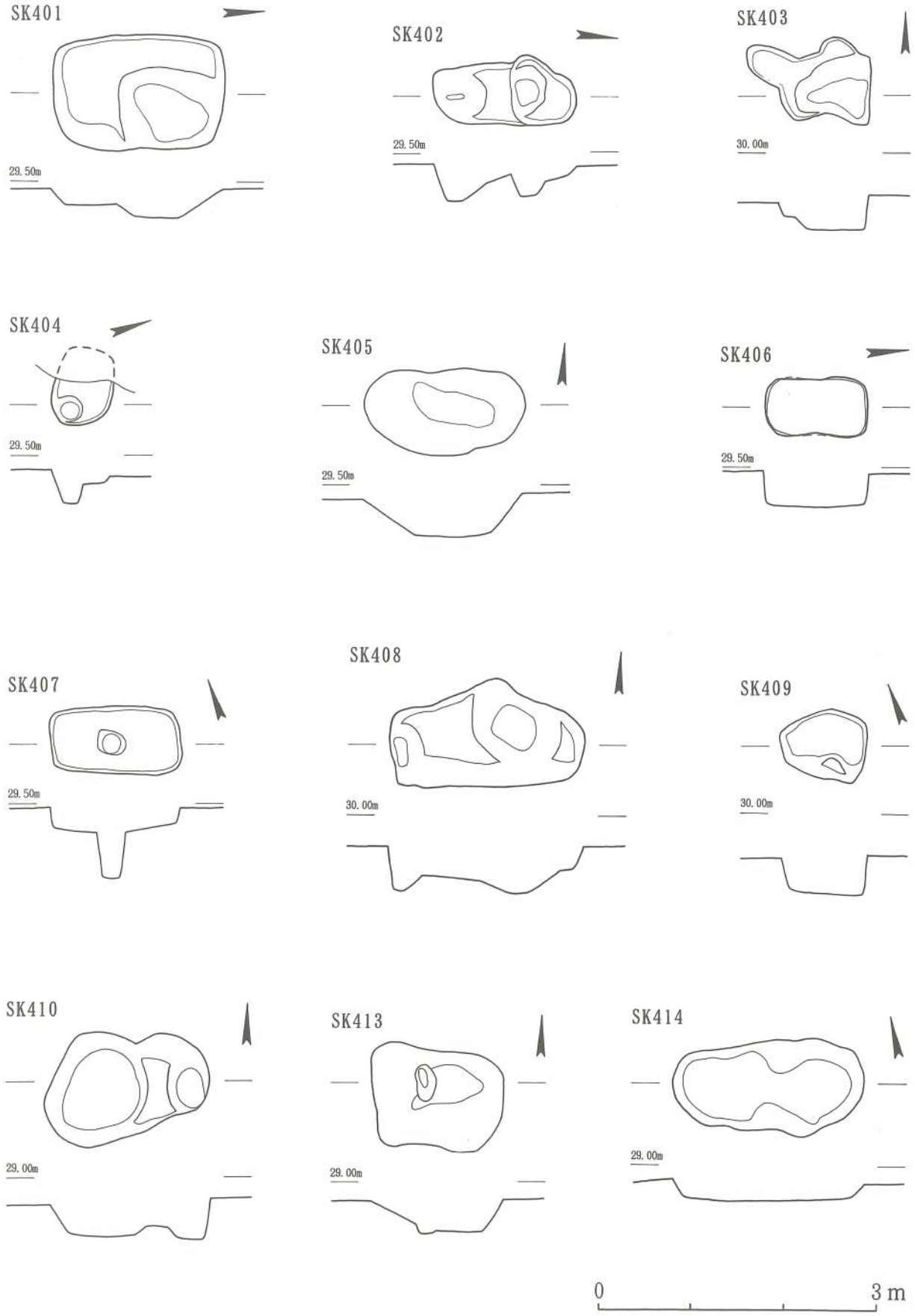


Fig.10　土壙実測図(1)　SK-401～SK-410・SK-413・SK-414（1/60）

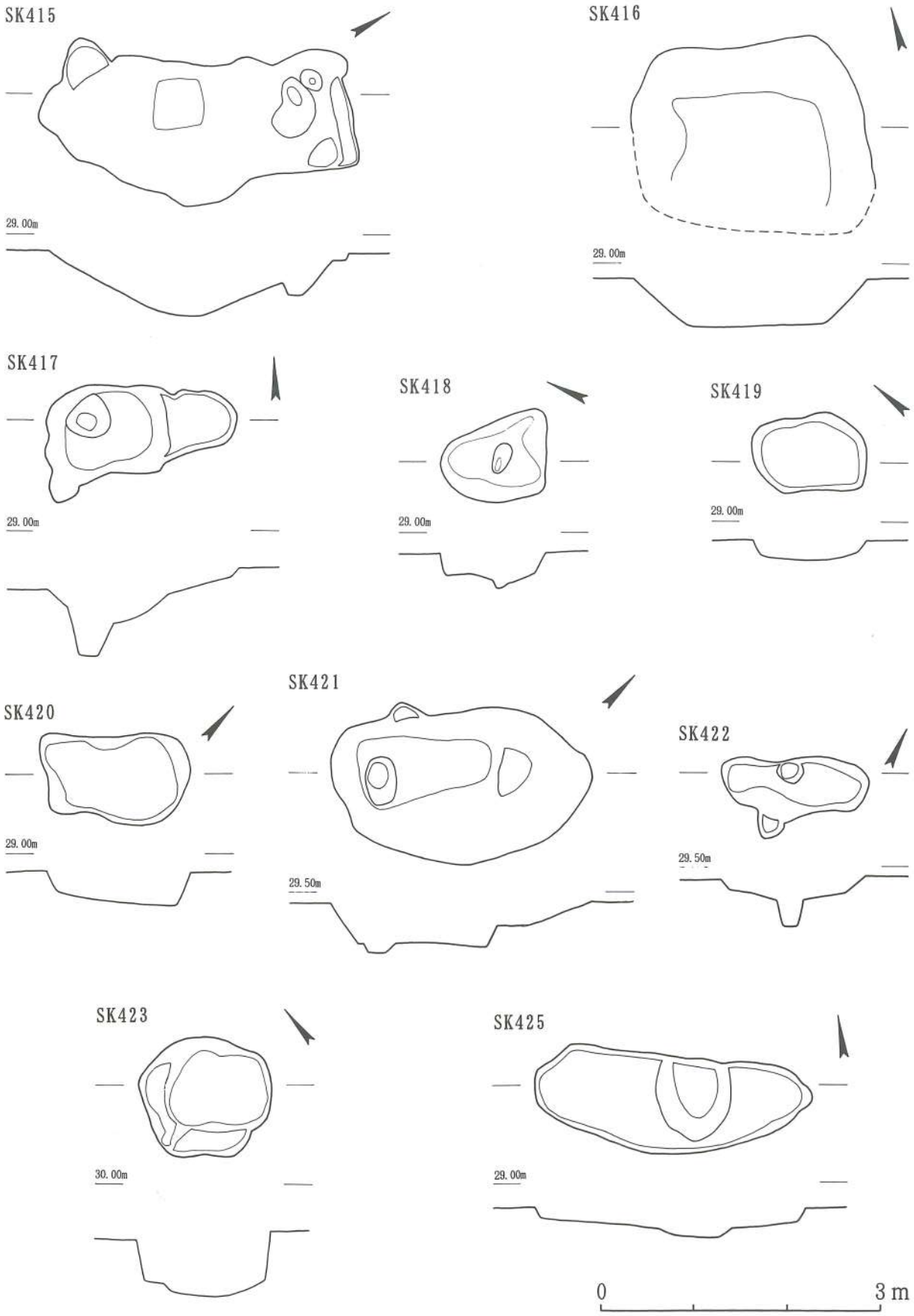


Fig.11　土壙実測図(2)　SK-415～SK-423・SK-425（1/60）

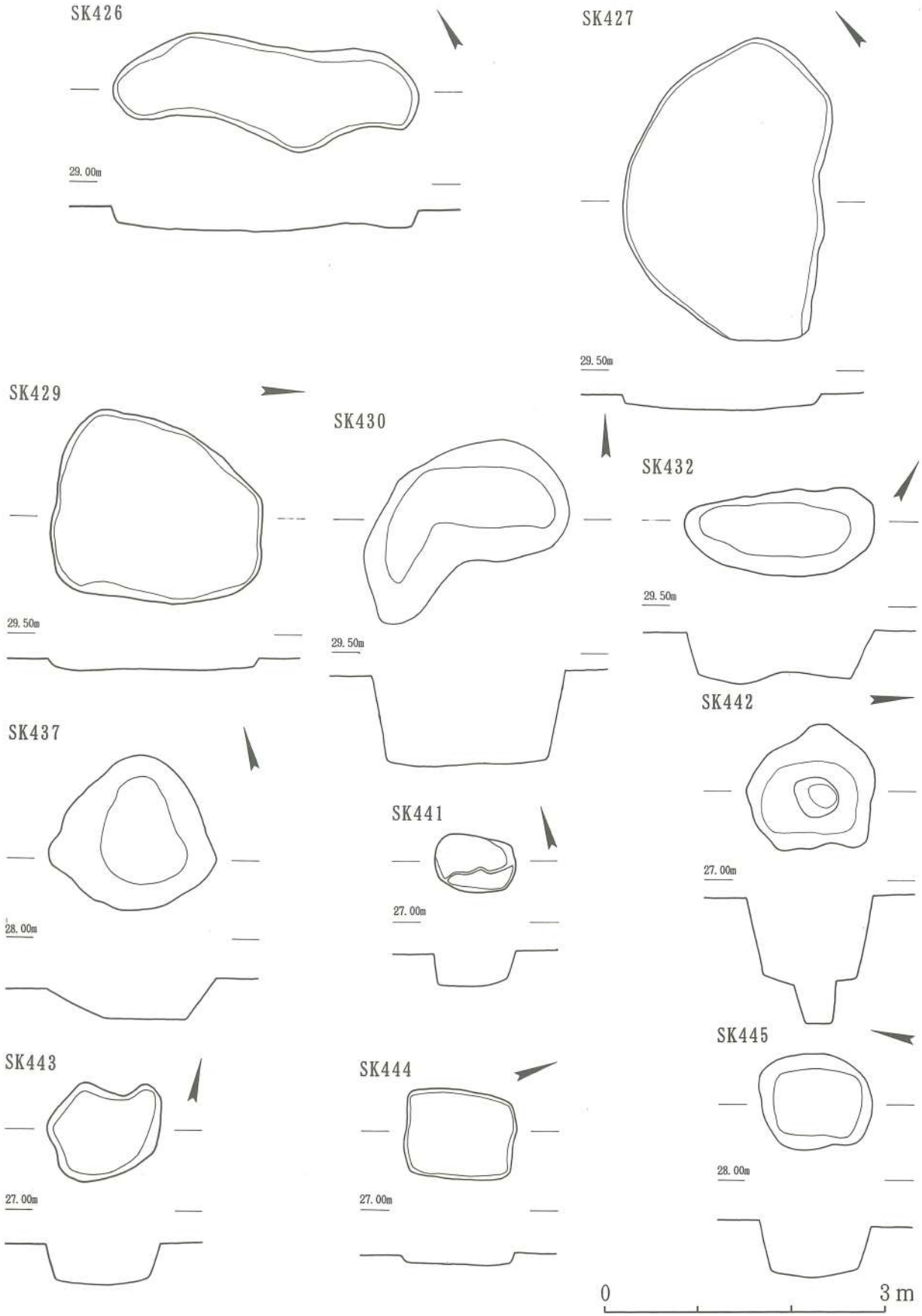


Fig.12　土壙実測図(3)　SK-426・SK-427・SK-429・SK-430・SK-432・SK-437・SK-441～SK-445（1/60）

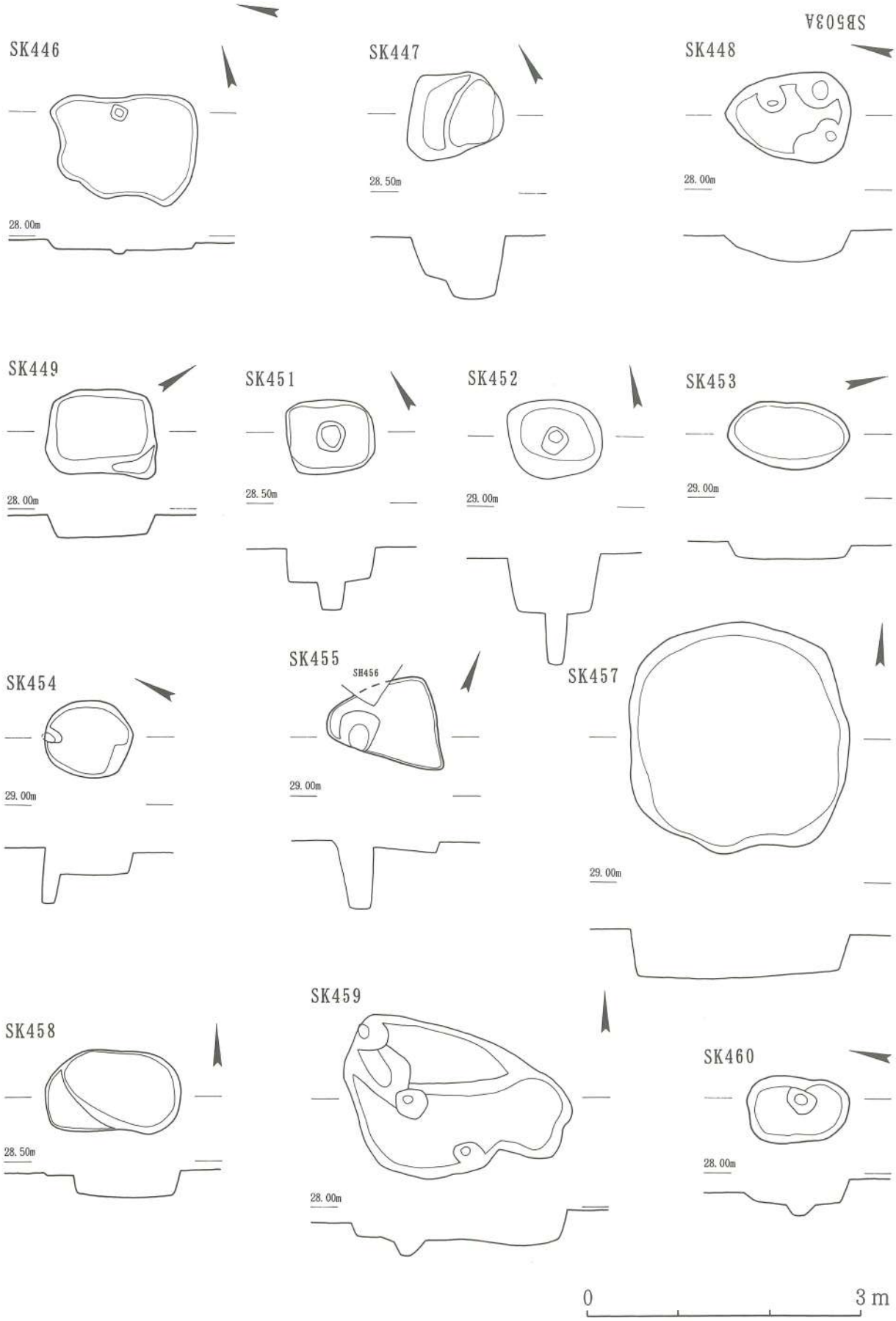


Fig.13　土壙実測図(4)　SK-446～SK-449・SK-451～SK-455・SK-457～SK-460（1/60）

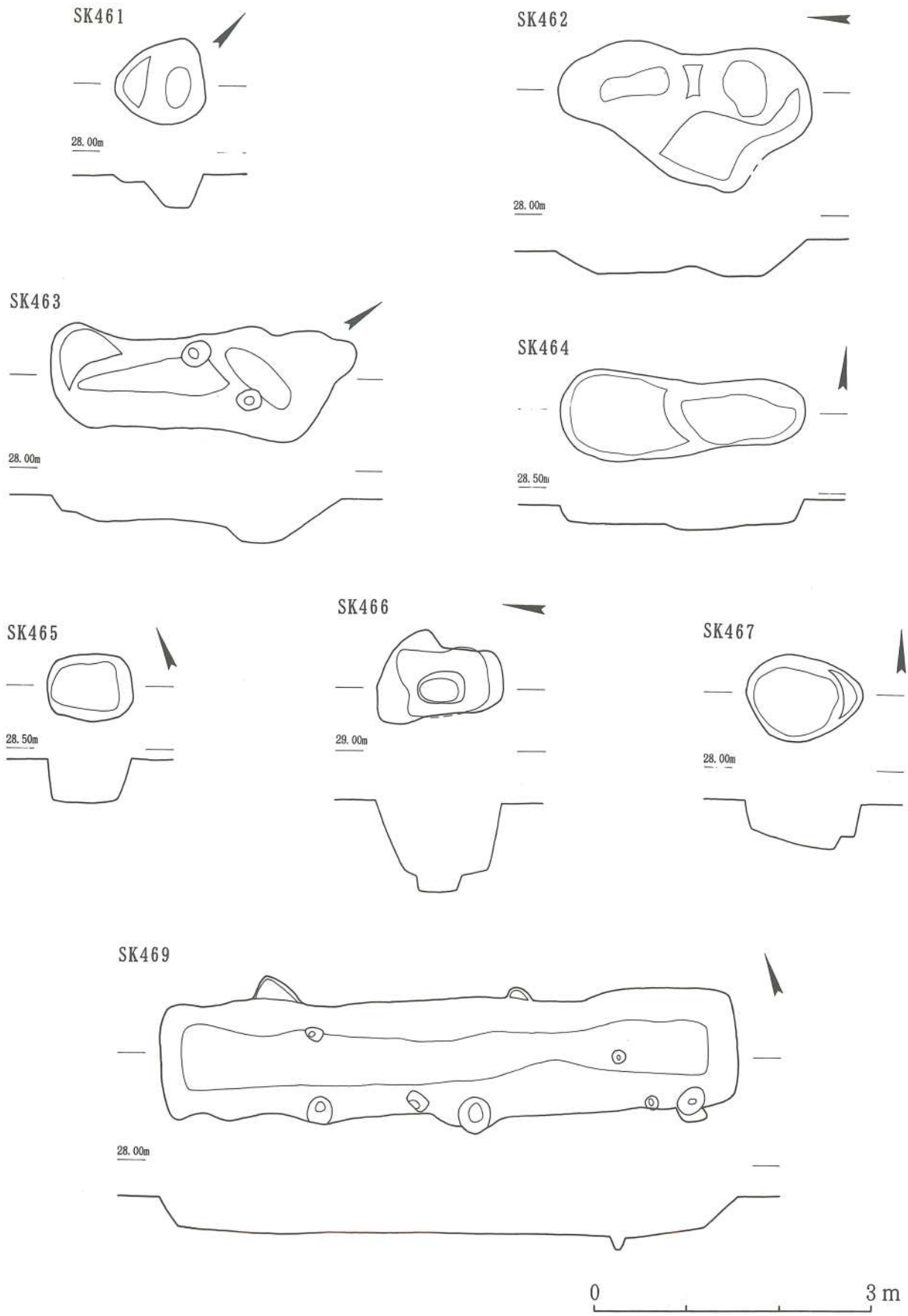


Fig.14　土壙実測図(5)　SK-461～SK-467・SK-469（1/60）

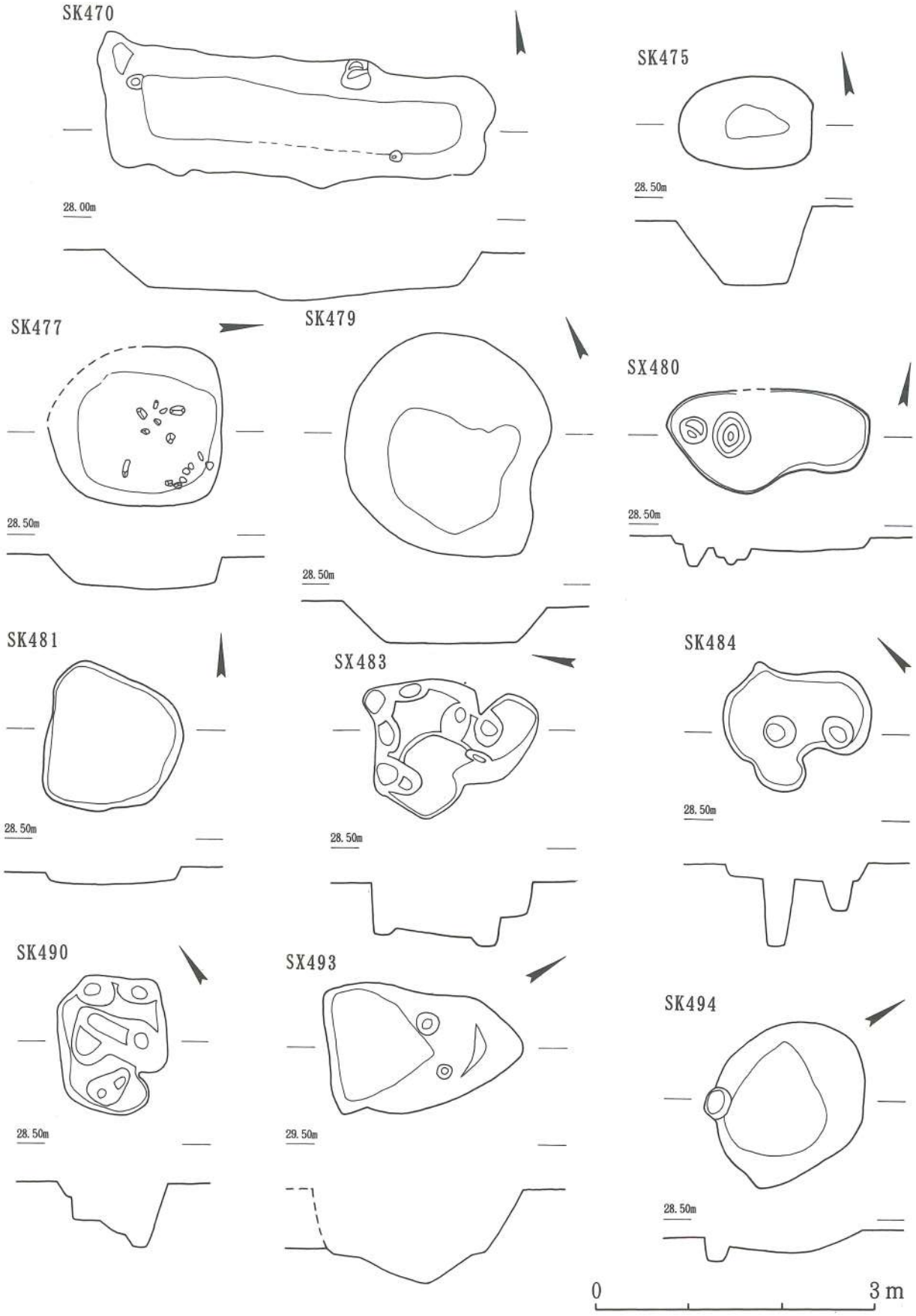


Fig.15　土壙実測図(6)　SK-470・SK-475・SK-477・SK-479～SK-481・SK-483・SK-484・SK-490・SX-493・SK-494 (1/60)

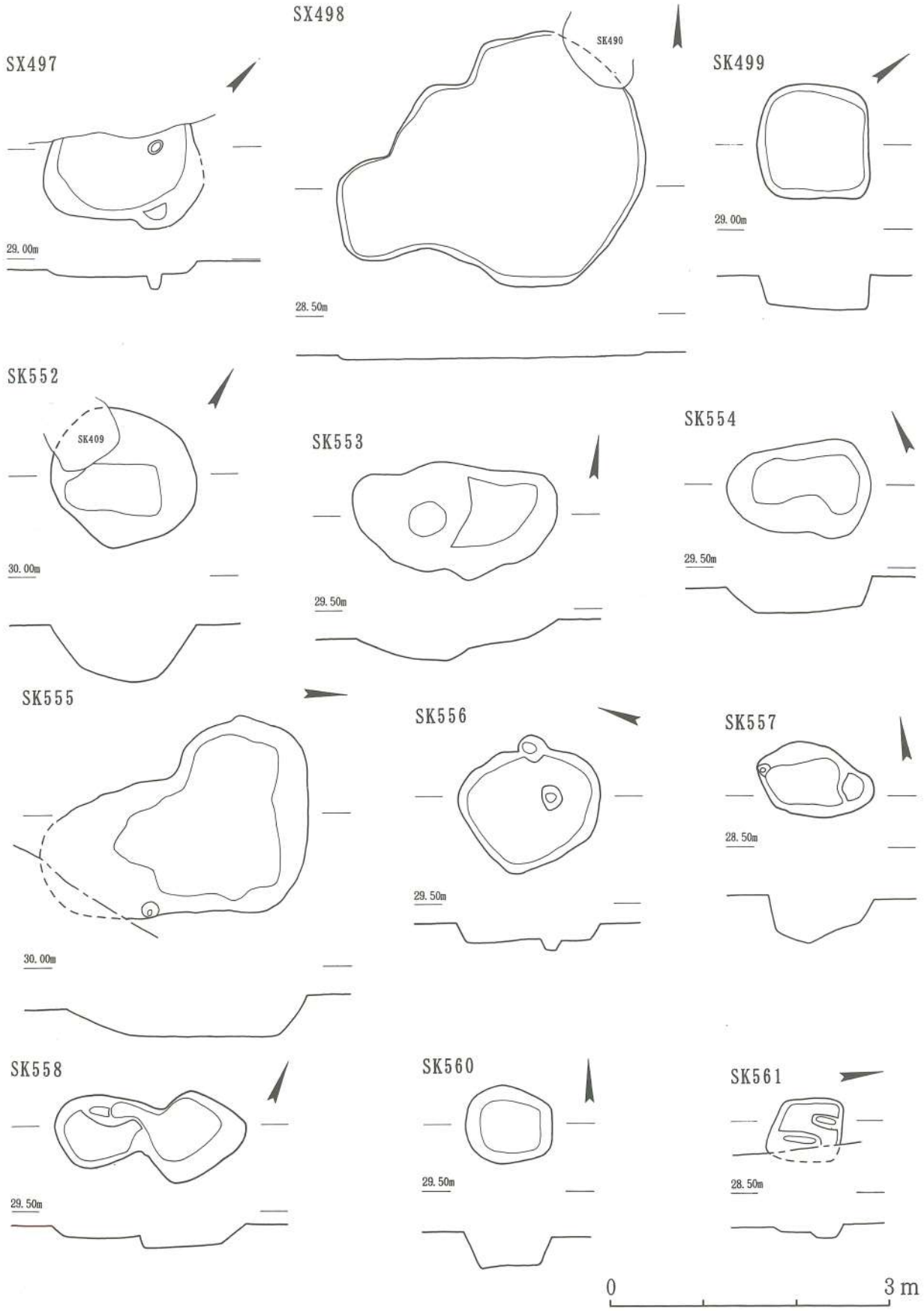


Fig.16　土壙実測図(7)　SX-497～SK-499・SK-552～SK-558・SK-560～SK-561（1/60）

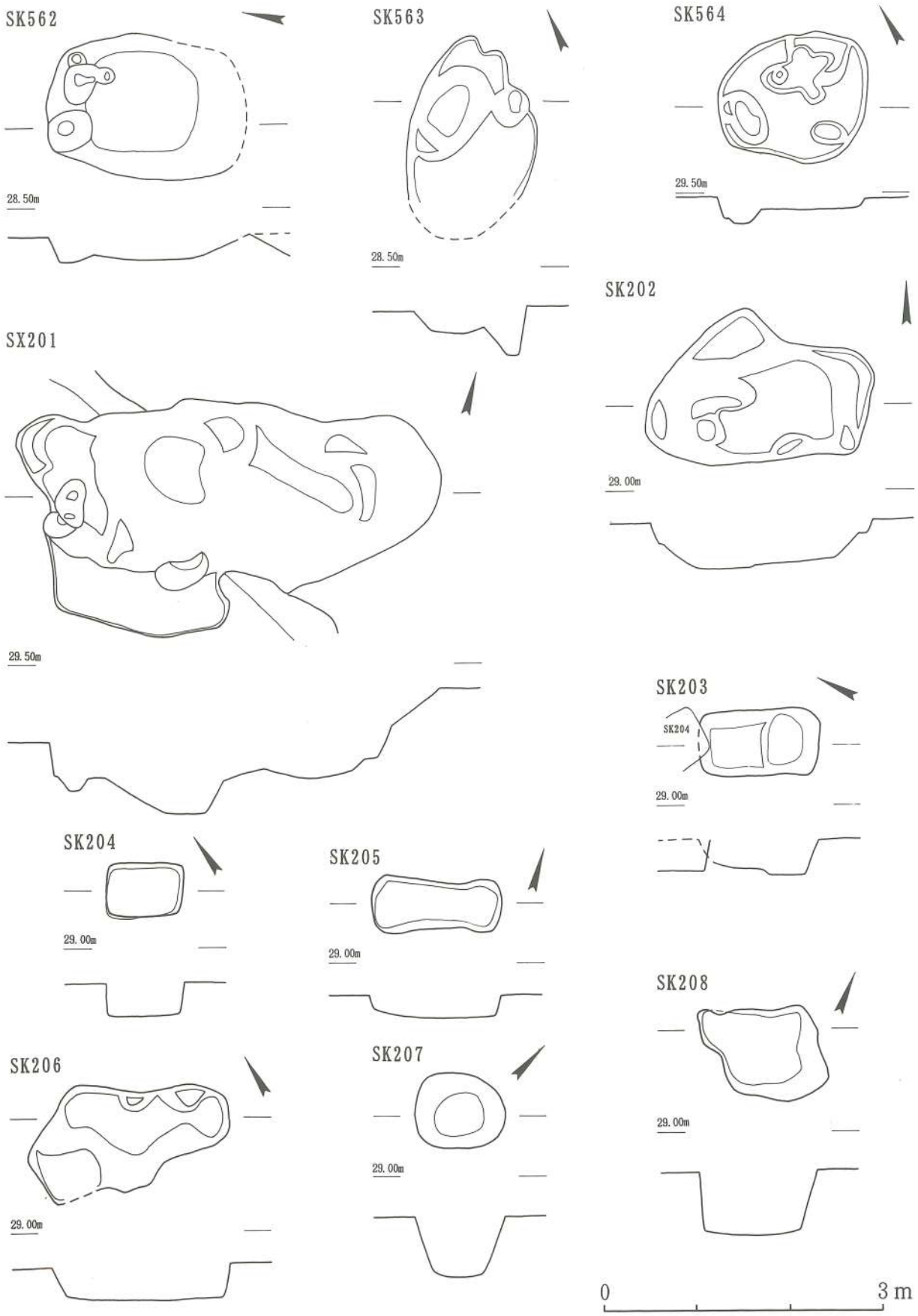


Fig.17　土壙実測図(8)　SK-562～SK-564・SX-201～SK-208（1/60）

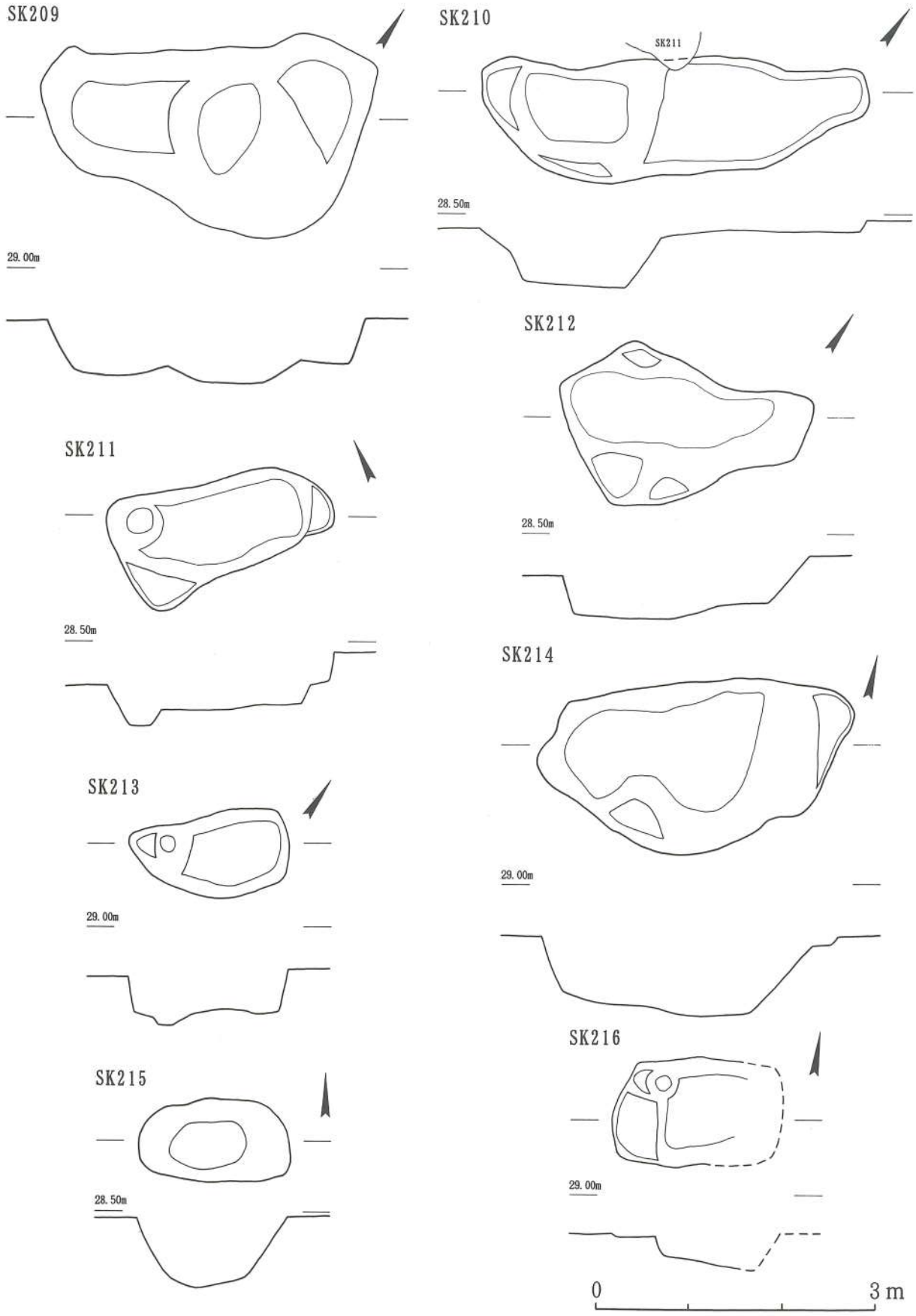


Fig.18　土壙実測図(9)　SK-209～SK-216（1/60）

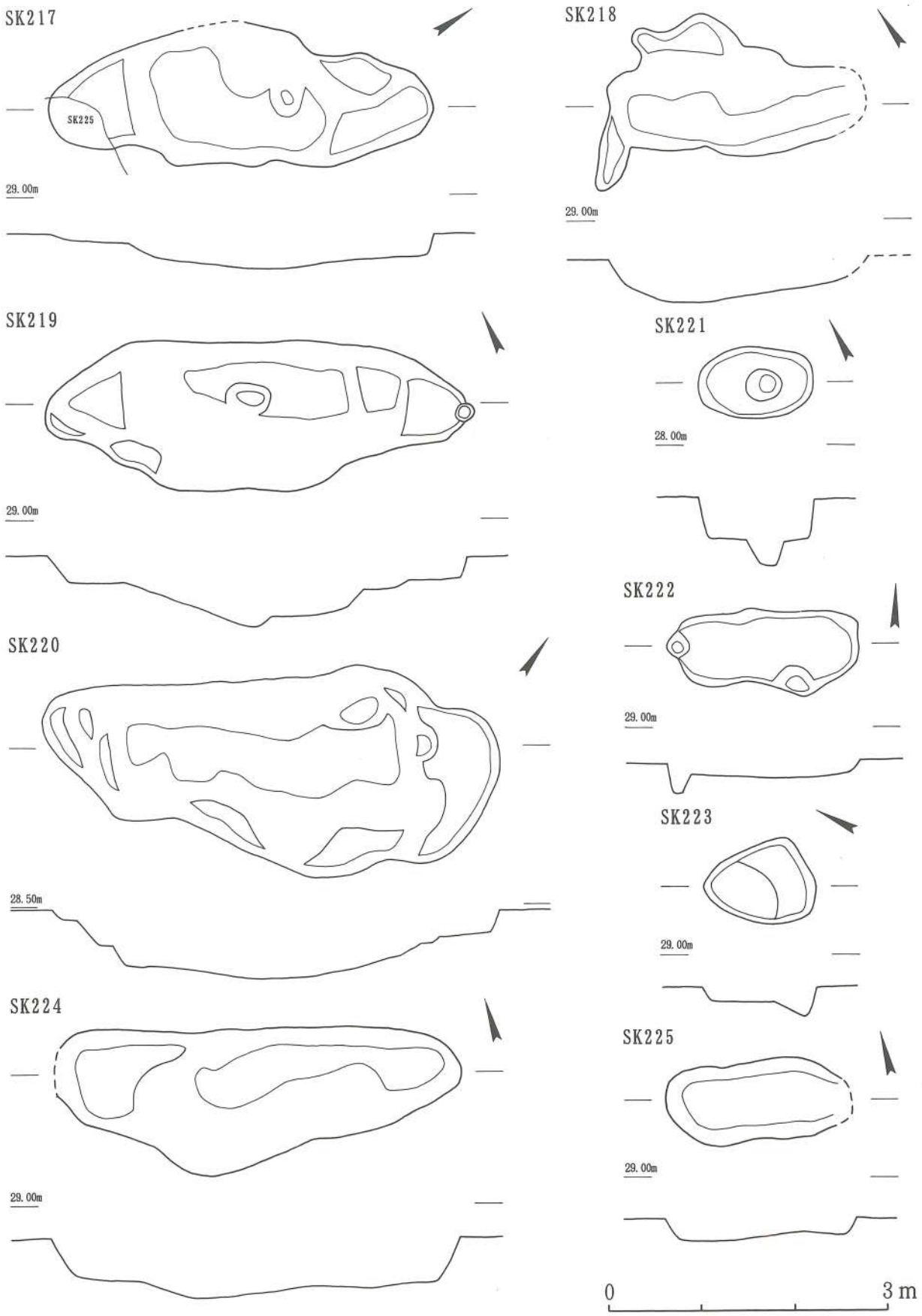


Fig.19　土壙実測図(10)　SK-217～SK-225（1/60）

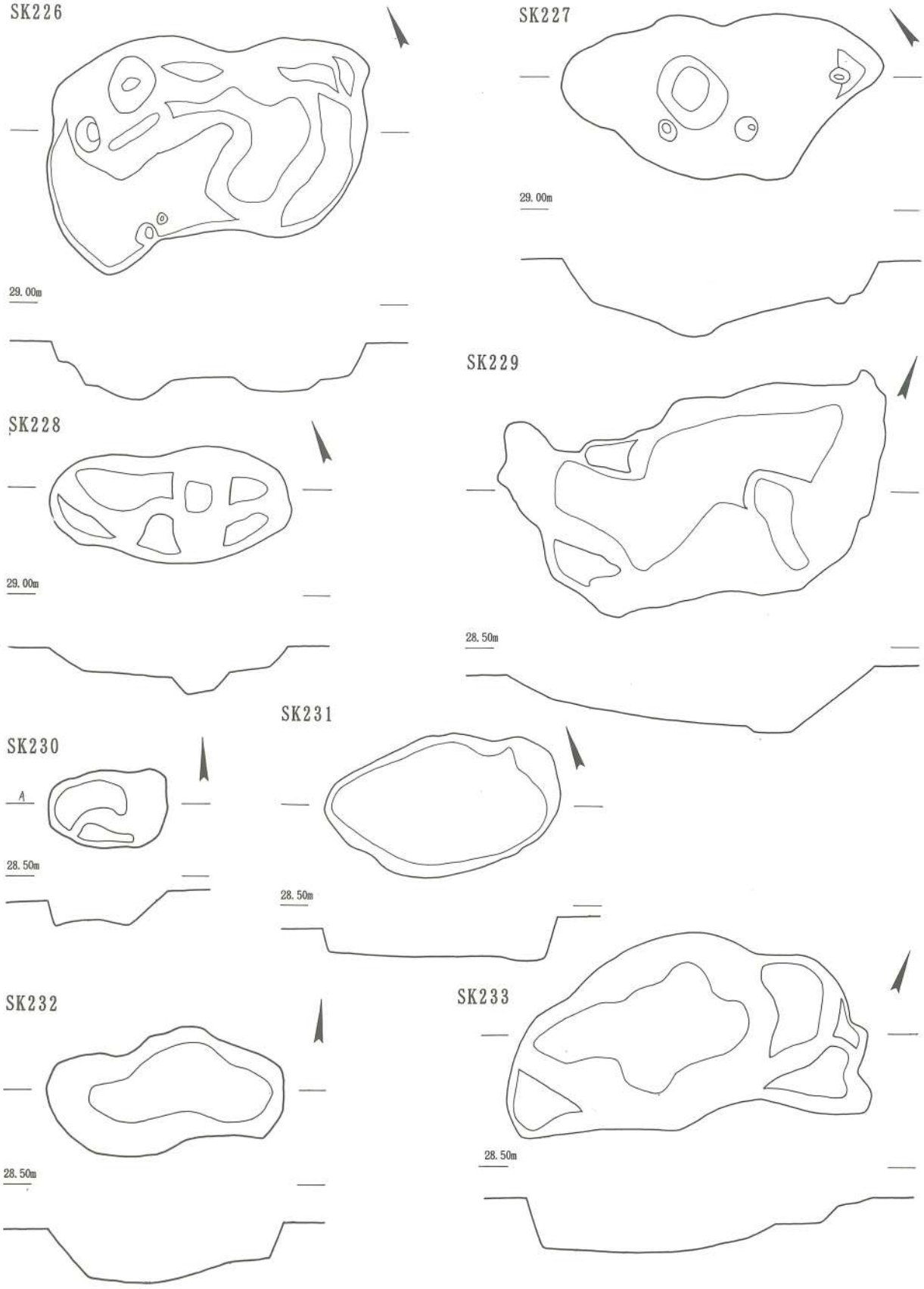


Fig.20　土壙実測図(11)　SK-226～SK-233（1/60）

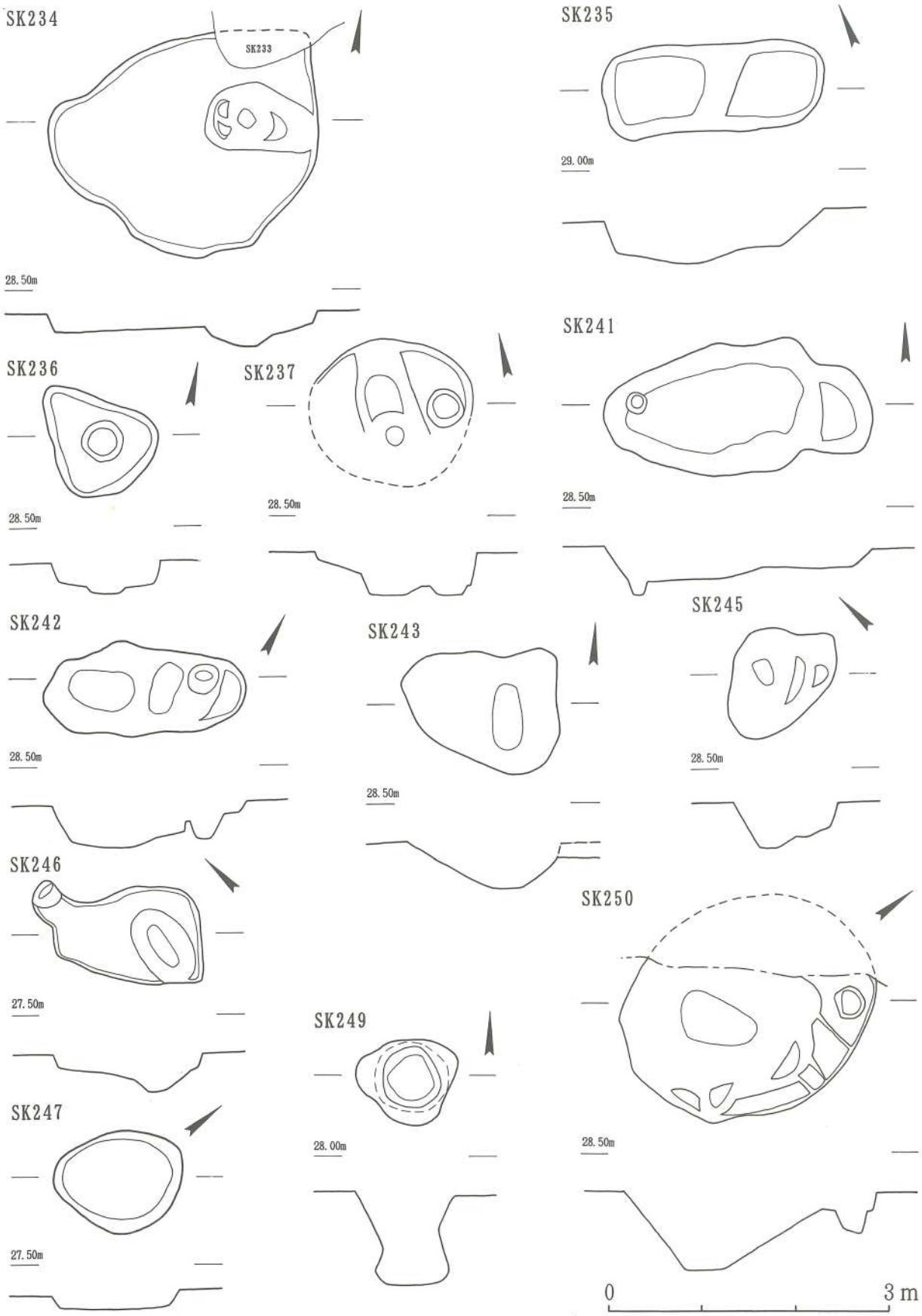


Fig.21　土壙実測図(12)　SK-234～SK-237・SK-241～SK-243・SK-245～SK-247・SK-249・SK-250（1/60）

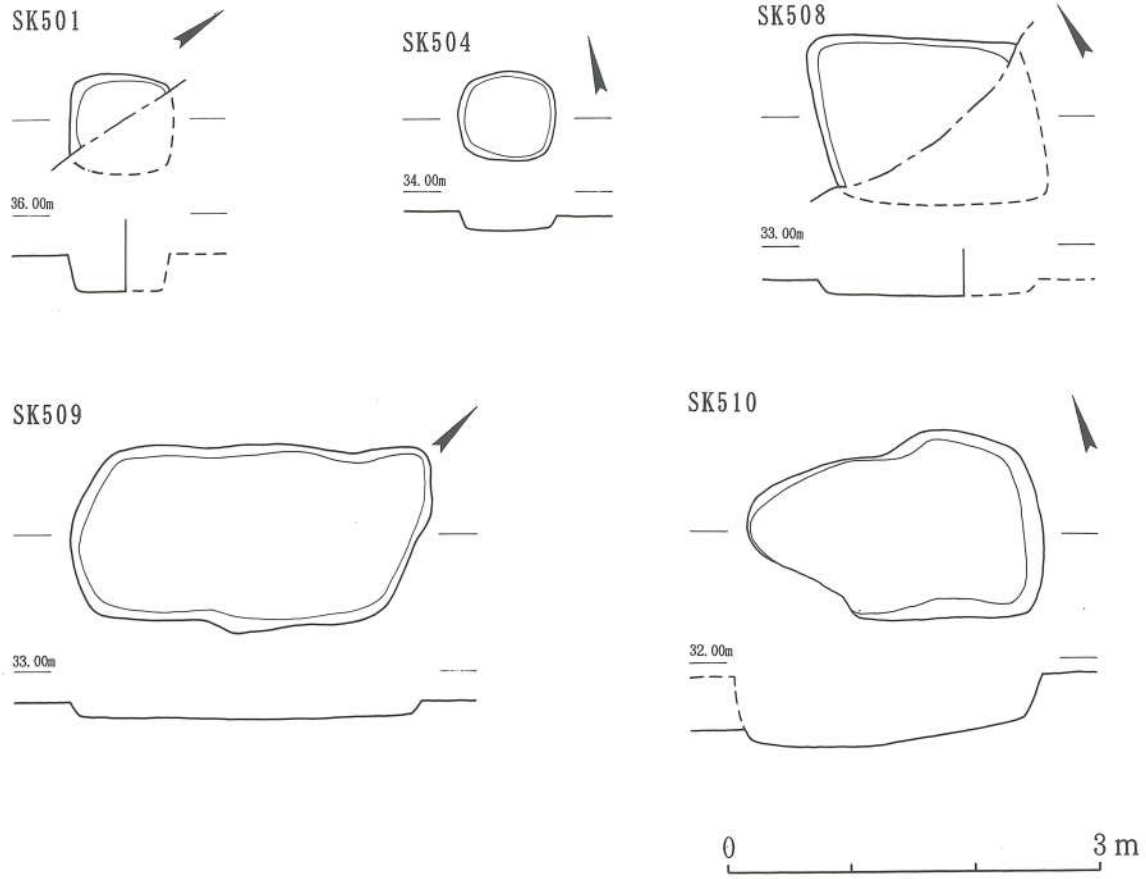


Fig.22　土壙実測図(13)　SK-501・SK-504・SK-508～SK-510（1/60）

4．溝　　跡（Fig.23、24・PL.1、7）

溝跡は、後世の耕作や植栽に伴うと考えられるものは多数検出されたが、覆土の様子などからある程度古い時期のものと考えられるものは、堤土塁東側土塁の東端部J－15Gr.から八藤遺跡4区の東部のA－11・12Gr.にかけて丘陵を横断する形で断続的に検出された道路側溝状遺構(SD-238、SD-239、SD-478、SD-488)とB－10Gr.付近で検出された区画溝と考えられるSD-429の2遺構のみである。

区画溝　SD-429（Fig.23・PL.7－3）

B－10Gr.付近で検出された区画溝と考えられるSD-429は、南西部分が畑の段によって失われており、東辺が約7m、北辺は途中が削平されているが約8mを計る。本来は、一辺9m程度の隅丸方形を呈すものと推定される。この溝跡は、建物の雨落ち溝とも考えられるが、区画内に建物の柱穴列と判断できる遺構は見られない。溝は、掘り方の幅約40cm、深さ約20cmのU字溝である。遺物は出土していない。

道路側溝状遺構　SD-238、SD-239、SD-478、SD-488（Fig.24・PL.1、7－2）

この遺構は、堤土塁東側土塁の東端部J－15Gr.から八藤遺跡4区の東部のA－11・12Gr.にかけて丘陵を横断する形で断続的に検出された。堤土塁跡2区部分で北側溝SD-238、南側溝SD-239、八藤遺跡4区部分で南側溝SD-478、北側溝SD-488として調査を行った。

約6mの間隔で平行に延びる南北2条の溝は、A－11・12Gr.からD-13Gr.まではN－63°－E、D－13より西ではN－70°－Eで約97mに及んでいる。南北の溝は、各々幅20cm～40cm、深さは深い部分で約30cm、平均では15cm程度の堀り込みが残るU字溝で、溝の中にはさらにピット状の落ち込みが見られるが、その間隔、規模などは様々で一定しておらず、その性格は不明である。南北の溝の間には、道路面と考えられるような硬化面や敷石などの施設は見られないことからも、後世の削平を受けているものと考えられる。

この溝跡からは、SD-238部分で、土師器の坏、甕などのほか、鉄滓も出土している。

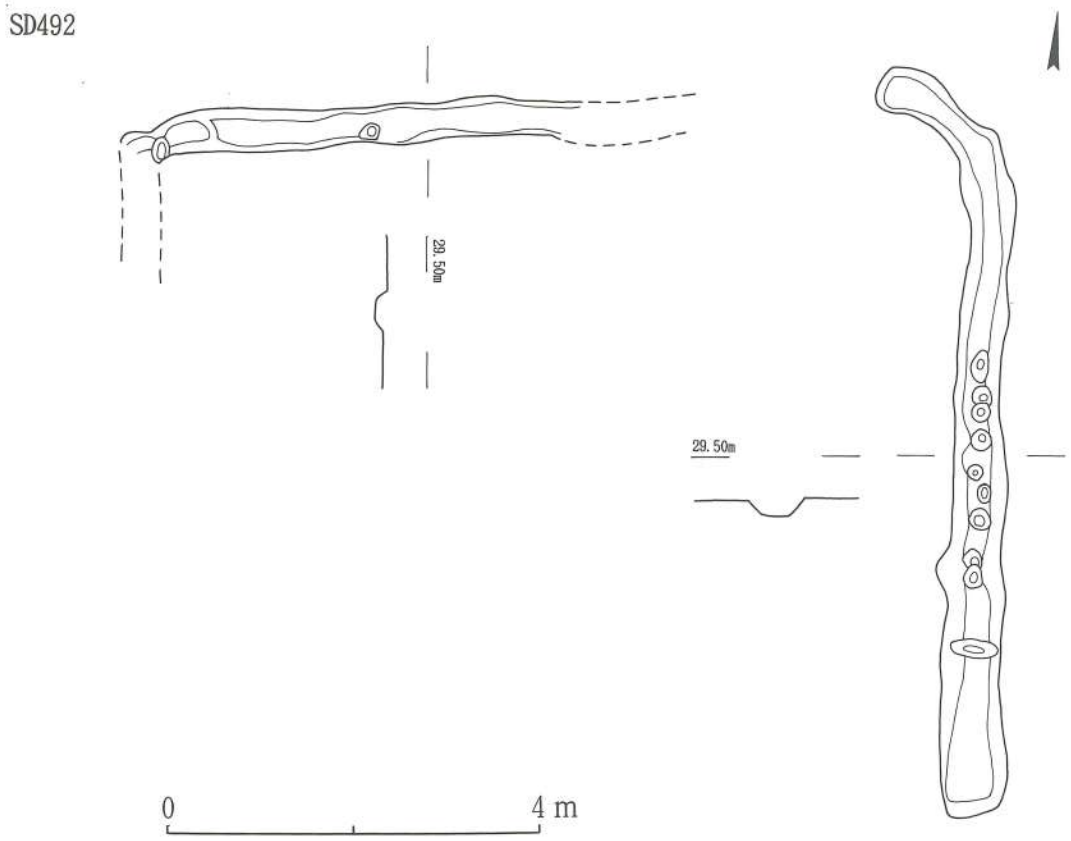


Fig.23　溝跡実測図(1)　SD-429（1/80）

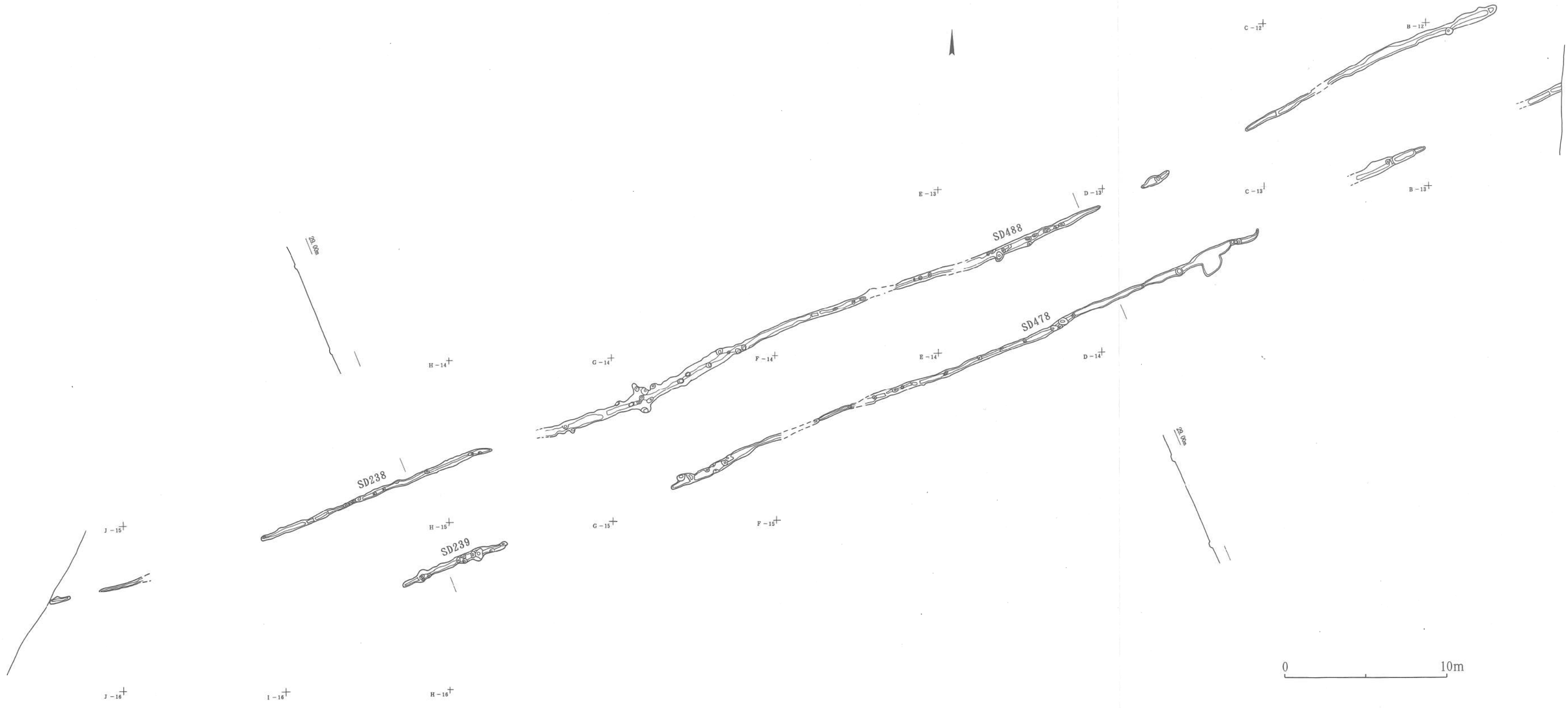


Fig.24　溝跡実測図(2)　SD-238・SD-239・SD-478・SD-488（1/200）

5．遺物包含層の調査（Fig.25～37・Tab. 4）

今回の調査では、八藤遺跡４区の北部、Ａ－５・６ Gr.、Ｂ－５・６ Gr. において、チップ類を主体とする遺物包含層が検出された。遺物包含層は、八藤丘陵の低位段丘面を構成する大曲層最上部に堆積するアジア大陸起源の黄砂（レス）を主体とする黄褐色風積土中（『佐賀平野の阿蘇４火砕流と埋没林』上峰町文化財調査報告書第11集　1994年　上峰町教育委員会）に見られた。ここでは、10m×10mのグリッドを２m×２mの小グリッドに分け、１～25の番号を付して調査を行った（Fig.25参照）。遺物は、一点ごとに位置・深さを記録して取り上げを行った。各小グリッドの遺物分布状況は、Fig.26～37にグリッド番号順にまとめて図示した。

遺物は、全体で4,125点出土している。小グリッド別の出土数は、Ａ－６ －21Gr. の692点が最も多く、Ａ－６ －14Gr. の657点、Ａ－６ －23Gr. の360点、Ｂ－６ －１ Gr. の 354点、Ｂ－６ －２ Gr. の346点となっている。各小グリッドごとの遺物数は下記 Tab. 4 を参照されたい。

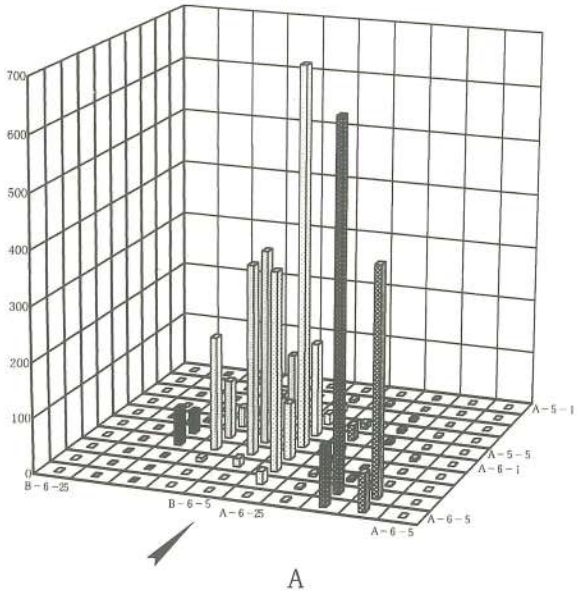
Fig.25のＡ～Ｄは、各小グリッドごとの遺物出土数を棒グラフで表したもので、それぞれ、Ａは南南東方向からの、Ｂは東北東方向からの、Ｃは北北西方向からの、Ｄは西南西方向からの視点で見たものとなっている。

また、遺物の分布を見ると、Ａ－６－９・10・14・15Gr. に一群、Ａ－６－21Gr.・Ｂ－６－１ Gr. を中心にとした一群、Ａ－６－22・23Gr. に一群、Ｂ－６－２・７ Gr. に一群の４群に分布が集中している。遺物の垂直分布は、各小グリッドを南から見たものを図示したが、Ａ－６－22・23Gr. の一群が幅約１m、深さ約 0.8mの明瞭な土壙状の落ち込みとして認識できるほかは、凸レンズ状に分布している。結果的にこれらの遺物の集中部は、Ａ－６－９・10・14・15Gr. の一群を SK-555、Ａ－６－21Gr.・Ｂ－６－１ Gr. を中心にとした一群を SK-553、Ａ－６－22・23Gr. の一群を SK-552、Ｂ－６－２・７ Gr. の一群を SK-554とした。

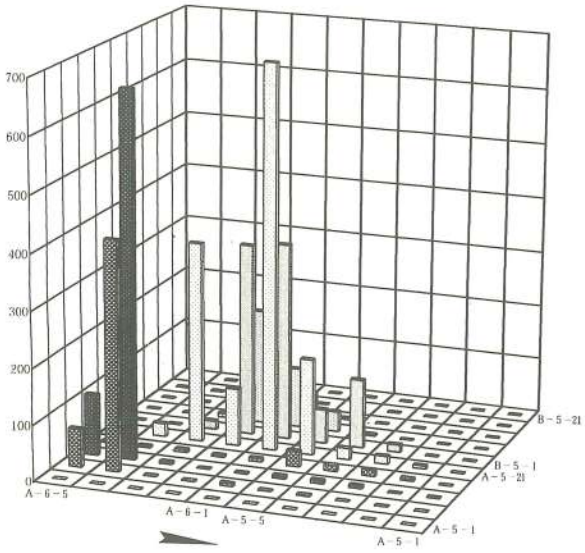
Tab. 4　遺物包含層調査区小グリッド別遺物出土数一覧表

B-5-21 ——	B-5-16 ——	B-5-11 ——	B-5- 6 ——	B-5- 1 0	A-5-21 0	A-5-16 0	A-5-11 1	A-5- 6 0	A-5- 1 ——
B-5-22 ——	B-5-17 ——	B-5-12 ——	B-5- 7 0	B-5- 2 0	A-5-22 5	A-5-17 4	A-5-12 0	A-5- 7 0	A-5- 2 ——
B-5-23 ——	B-5-18 ——	B-5-13 0	B-5- 8 0	B-5- 3 1	A-5-23 14	A-5-18 11	A-5-13 5	A-5- 8 0	A-5- 3 0
B-5-24 ——	B-5-19 0	B-5-14 0	B-5- 9 32	B-5- 4 123	A-5-24 20	A-5-19 11	A-5-14 6	A-5- 9 2	A-5- 4 0
B-5-25 ——	B-5-20 0	B-5-15 2	B-5-10 36	B-5- 5 61	A-5-25 172	A-5-20 28	A-5-15 5	A-5-10 1	A-5- 5 0
B-6-21 0	B-6-16 0	B-6-11 42	B-6- 6 107	B-6- 1 354	A-6-21 692	A-6-16 6	A-6-11 1	A-6- 6 5	A-6- 1 0
B-6-22 0	B-6-17 1	B-6-12 69	B-6- 7 207	B-6- 2 346	A-6-22 102	A-6-17 3	A-6-12 0	A-6- 7 1	A-6- 2 0
B-6-23 0	B-6-18 0	B-6-13 0	B-6- 8 7	B-6- 3 15	A-6-23 360	A-6-18 5	A-6-13 4	A-6- 8 1	A-6- 3 0
B-6-24 ——	B-6-19 ——	B-6-14 0	B-6- 9 0	B-6- 4 0	A-6-24 23	A-6-19 3	A-6-14 657	A-6- 9 411	A-6- 4 0
B-6-25 ——	B-6-20 ——	B-6-15 ——	B-6-10 ——	B-6- 5 0	A-6-25 0	A-6-20 2	A-6-15 109	A-6-10 69	A-6- 5 0

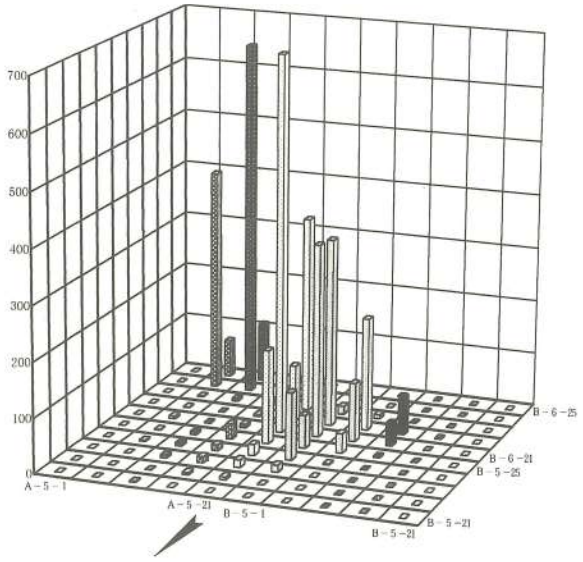
——は調査を行っていない。



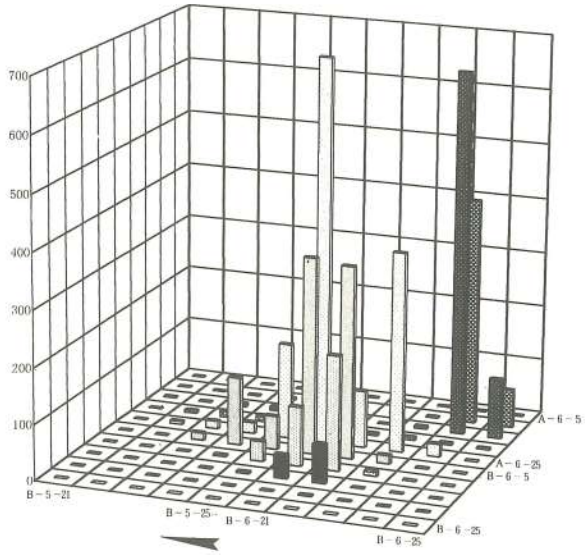
A



B



C



D

21	16	11	6	1
22	17	12	7	2
23	18	13	8	3
24	19	14	9	4
25	20	15	10	5

小グリッド配置見取図

Fig.25　遺物包含層遺物出土状況図

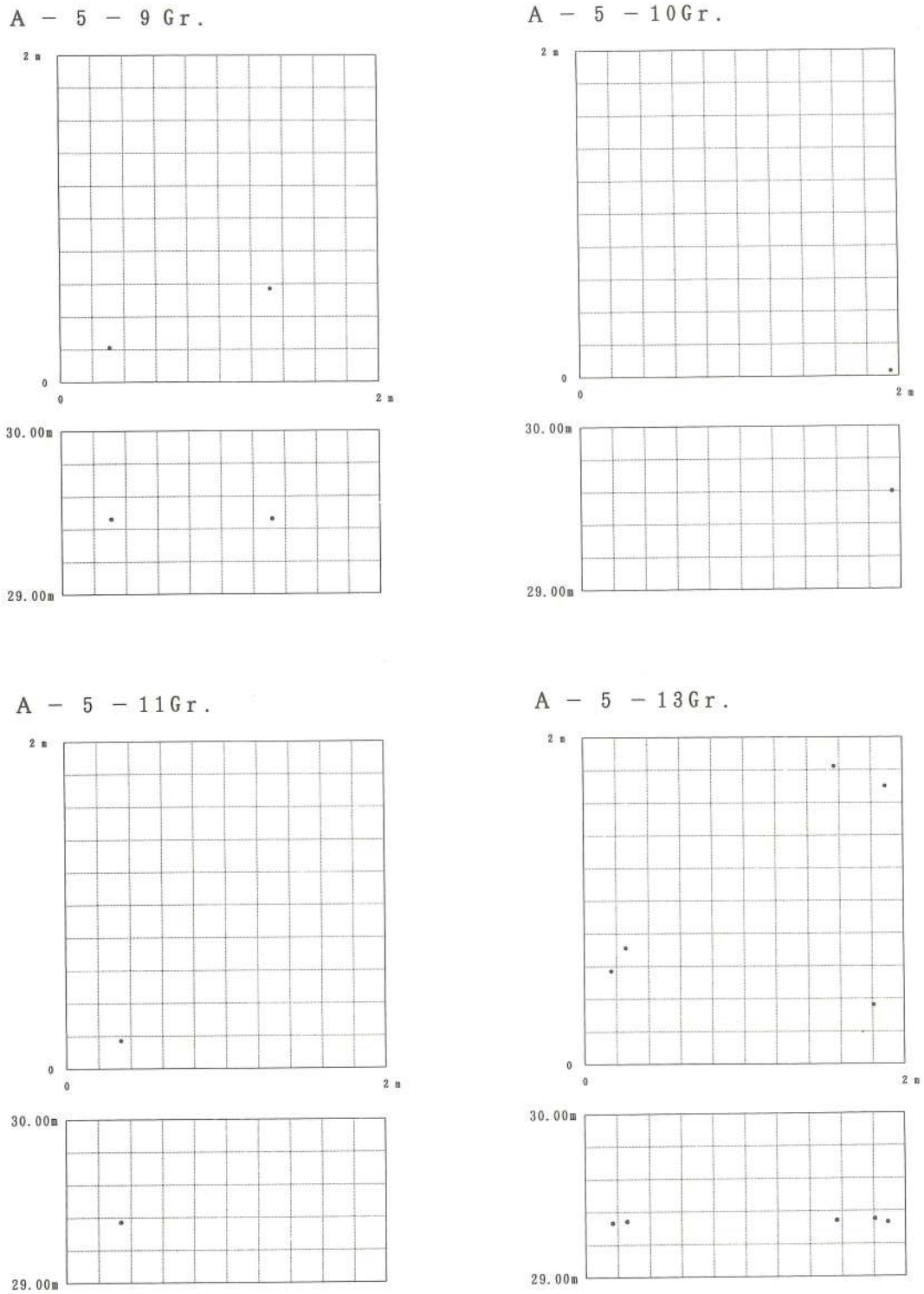
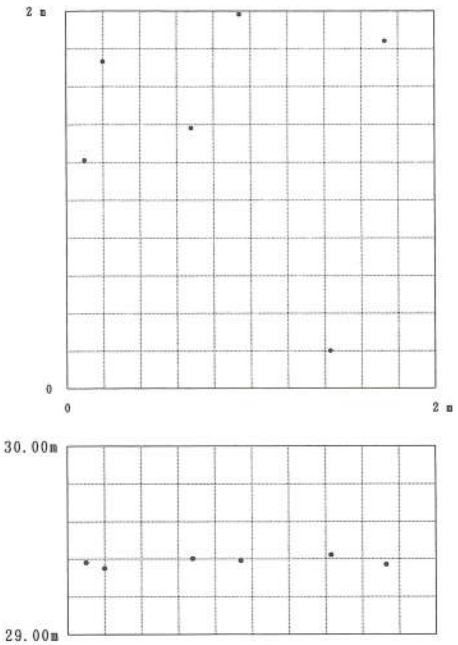
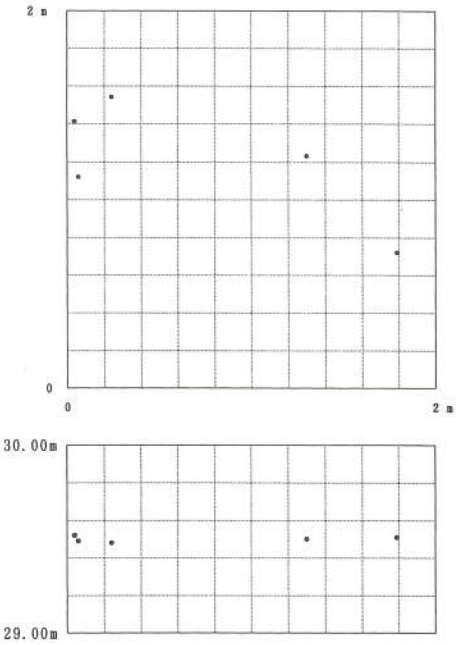


Fig.26　遺物包含層中遺物分布図(1)　A-5-9Gr.～A-5-11Gr.・A-5-13Gr.（1/40）

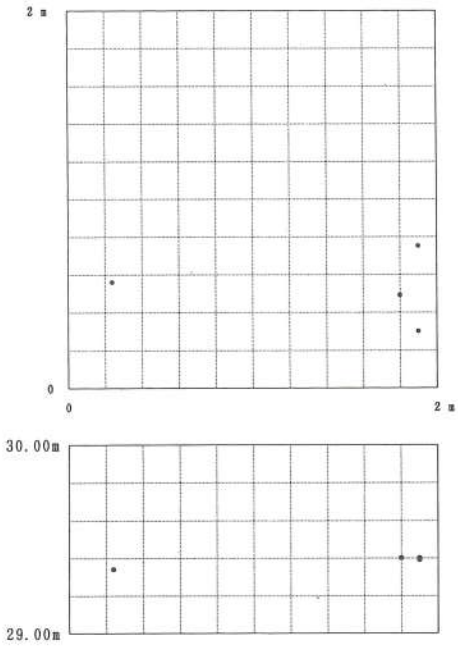
A － 5 － 14Gr.



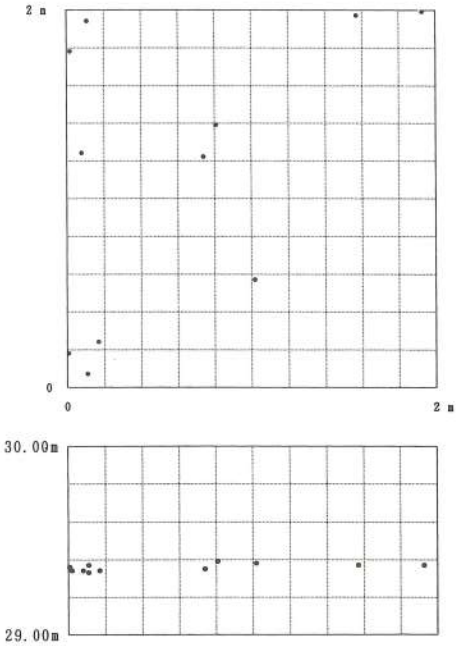
A － 5 － 15Gr.



A － 5 － 17Gr.



A － 5 － 18Gr.



● チップ類

△ 石 器 類

□ 土 器 類

Fig.27　遺物包含層中遺物分布図(2)　A-5-14Gr.・A-5-15Gr.・A-5-17Gr.・A-5-18Gr.（1/40）

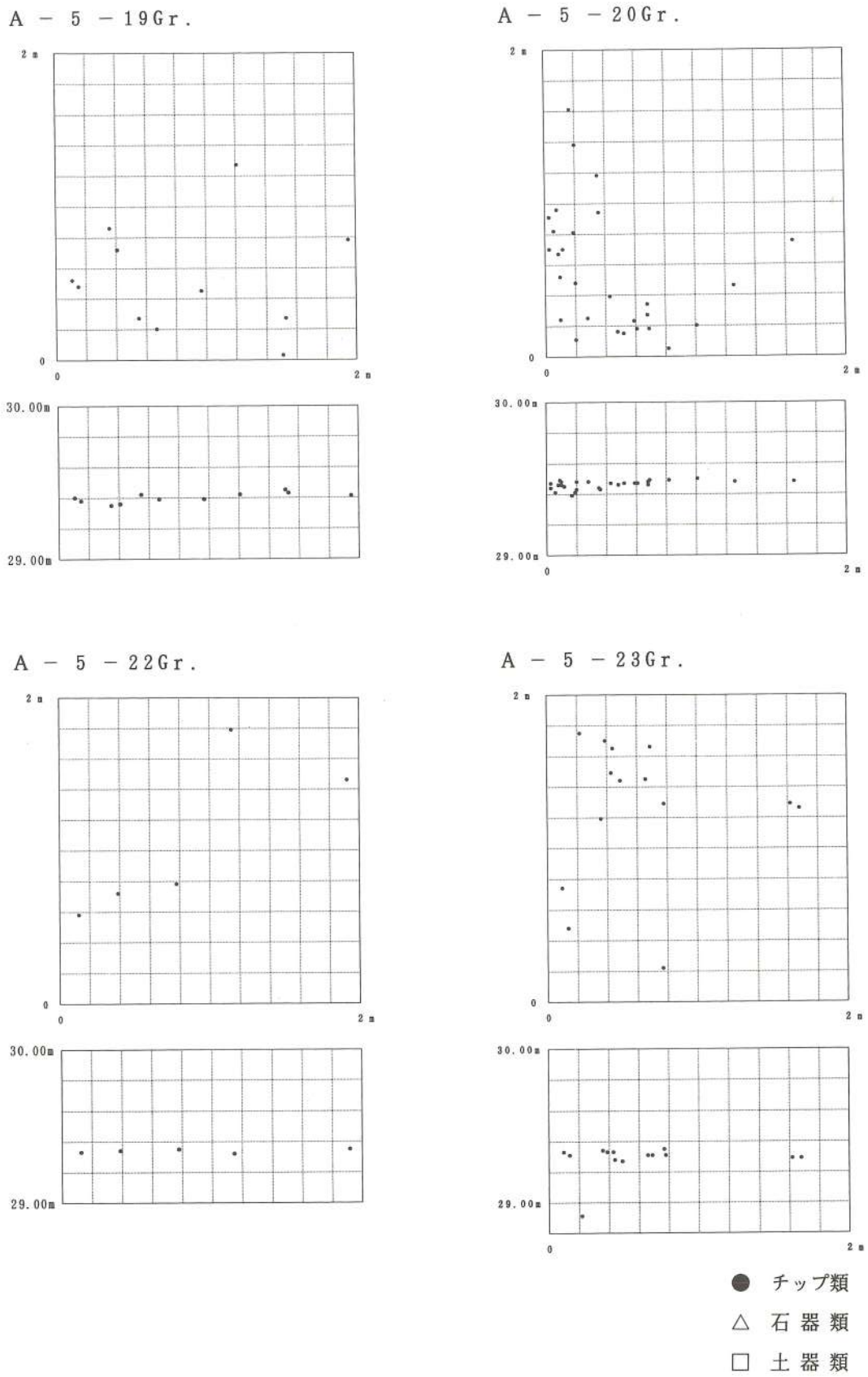
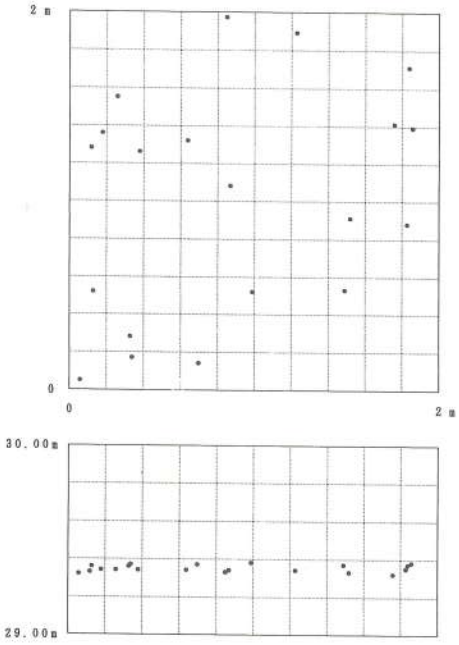
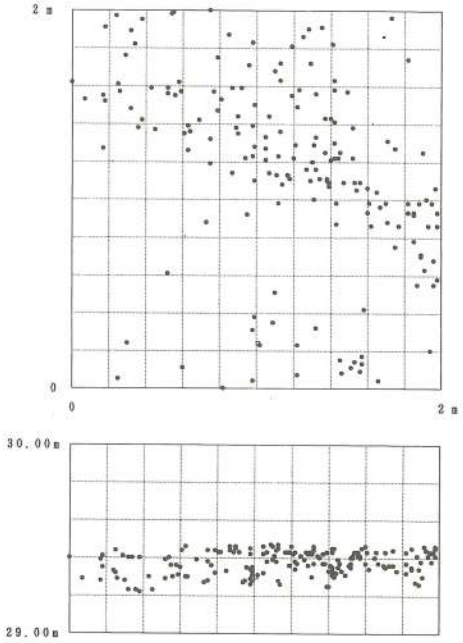


Fig.28　遺物包含層中遺物分布図(3)　A-5-19Gr.・A-5-20Gr.・A-5-22Gr.・A-5-23Gr.（1/40）

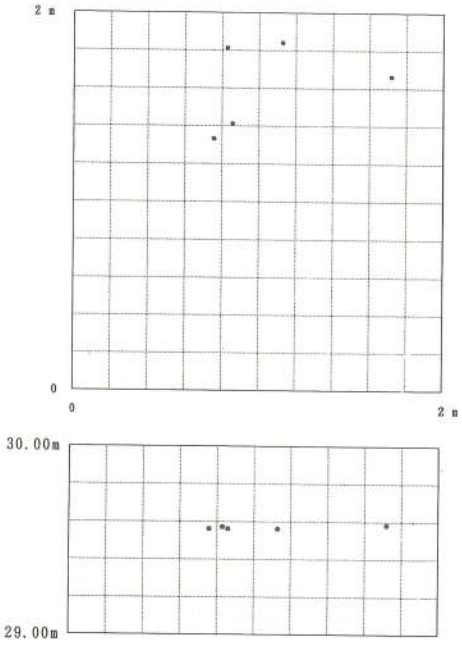
A － 5 － 24Gr.



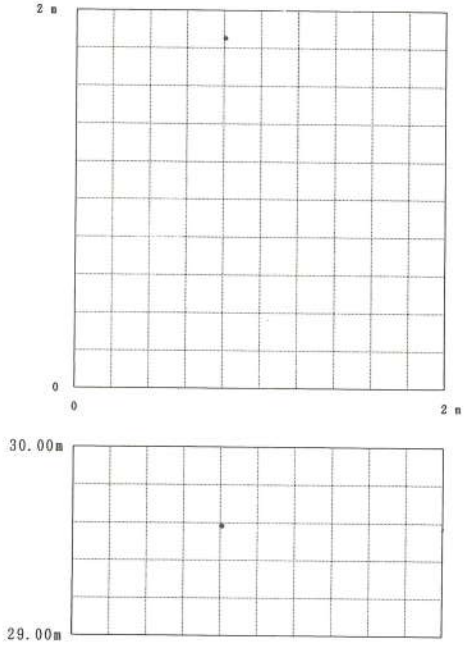
A － 5 － 25Gr.



A － 6 － 6 Gr.



A － 6 － 7 Gr.



● チップ類

△ 石 器 類

□ 土 器 類

Fig.29　遺物包含層中遺物分布図(4)　A-5-24Gr.・A-5-25Gr.・A-6-6Gr.・A-6-7Gr.（1/40）

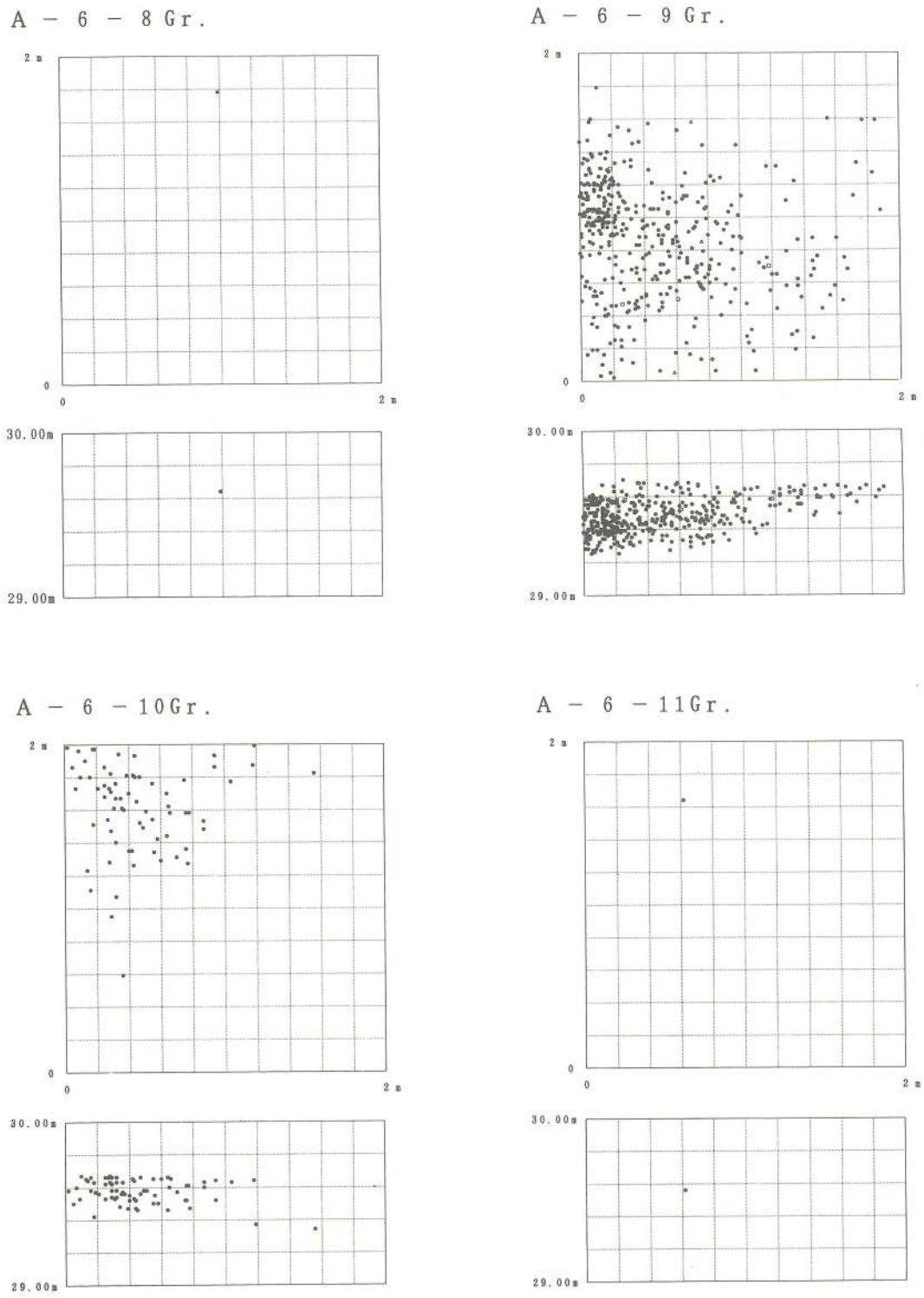


Fig.30　遺物包含層中遺物分布図(5)　A-6-8Gr.～A-6-11Gr.（1/40）

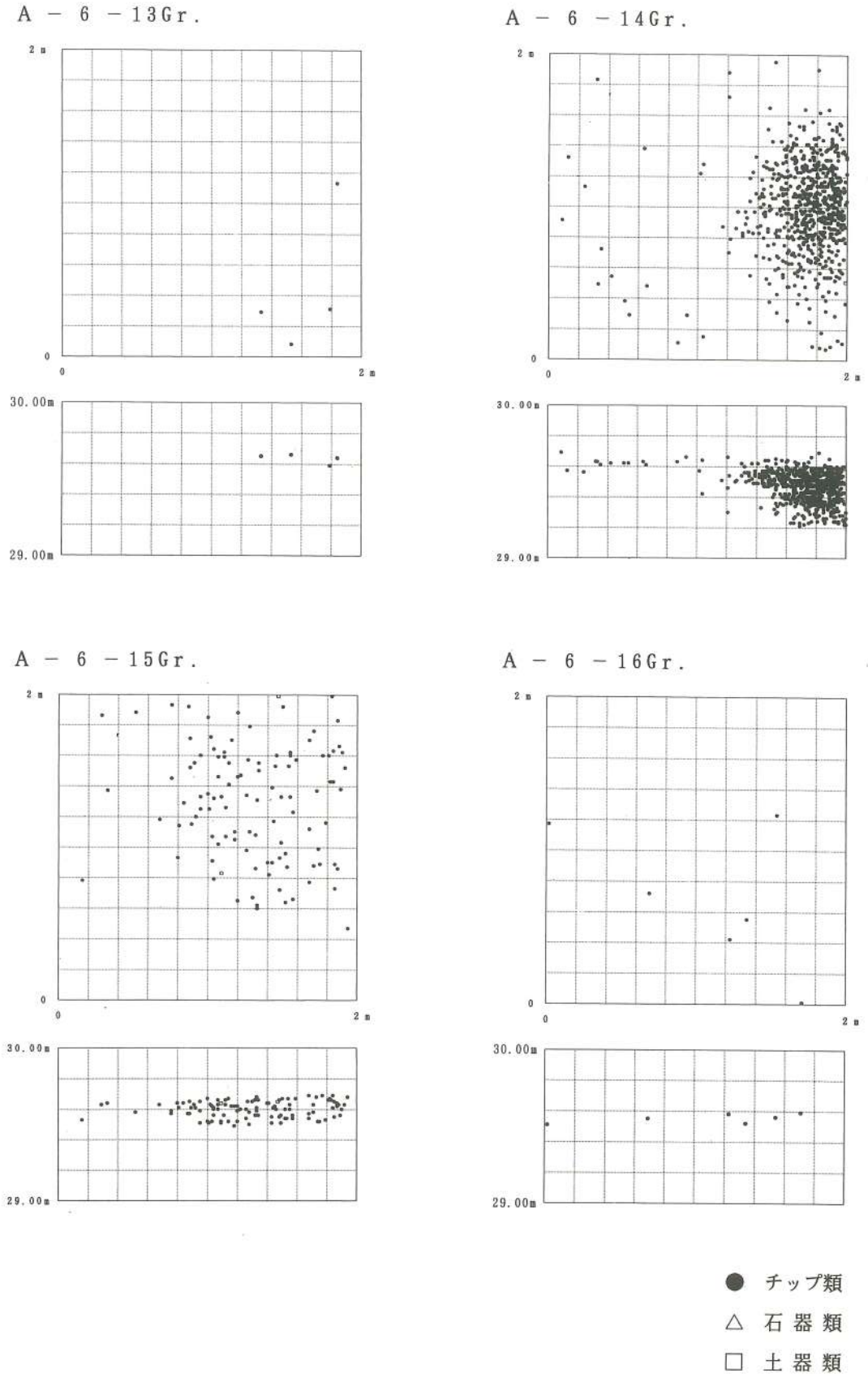
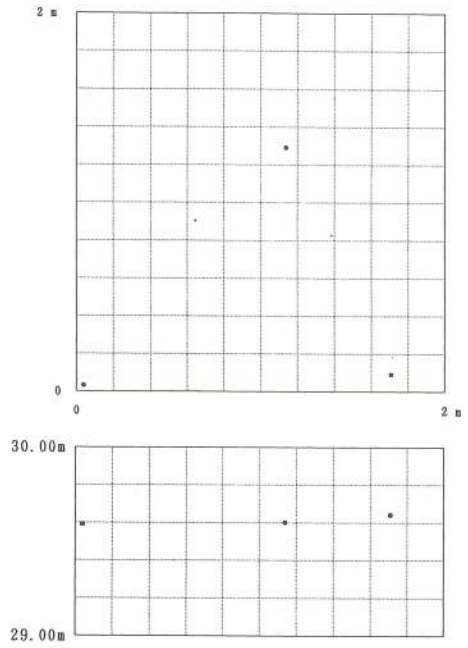
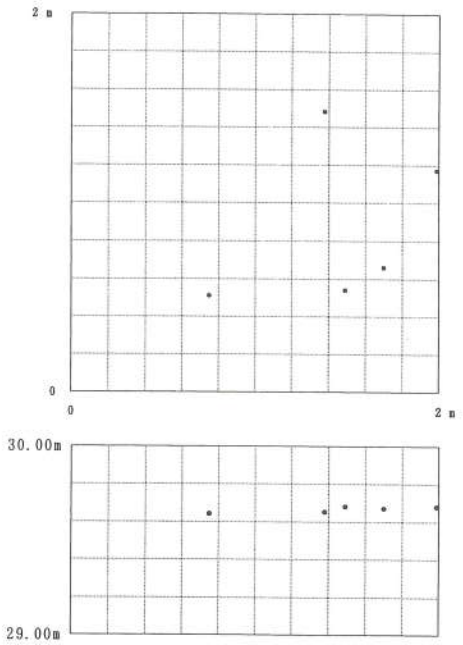


Fig.31　遺物包含層中遺物分布図(6)　A-6-13Gr.～A-6-16Gr.（1/40）

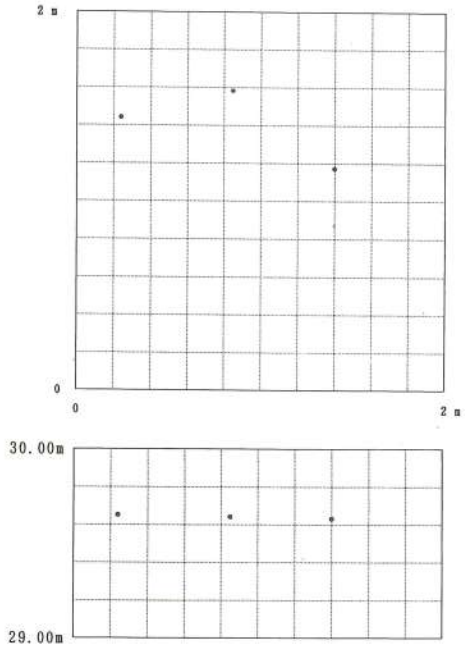
A － 6 － 17Gr.



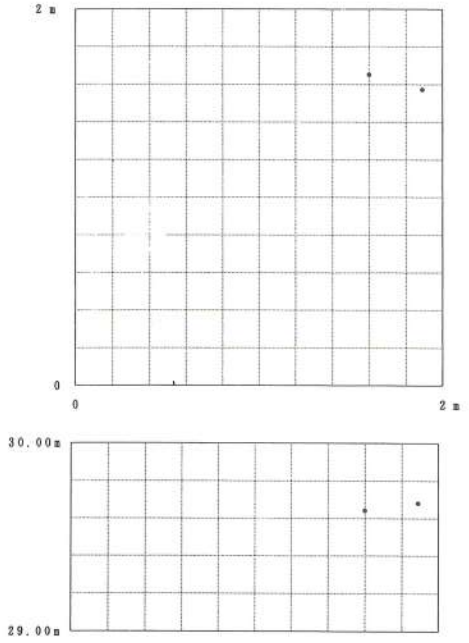
A － 6 － 18Gr.



A － 6 － 19Gr.



A － 6 － 20Gr.



● チップ類

△ 石器類

□ 土器類

Fig.32　遺物包含層中遺物分布図(7)　A-6-17Gr.～A-6-20Gr.（1/40）

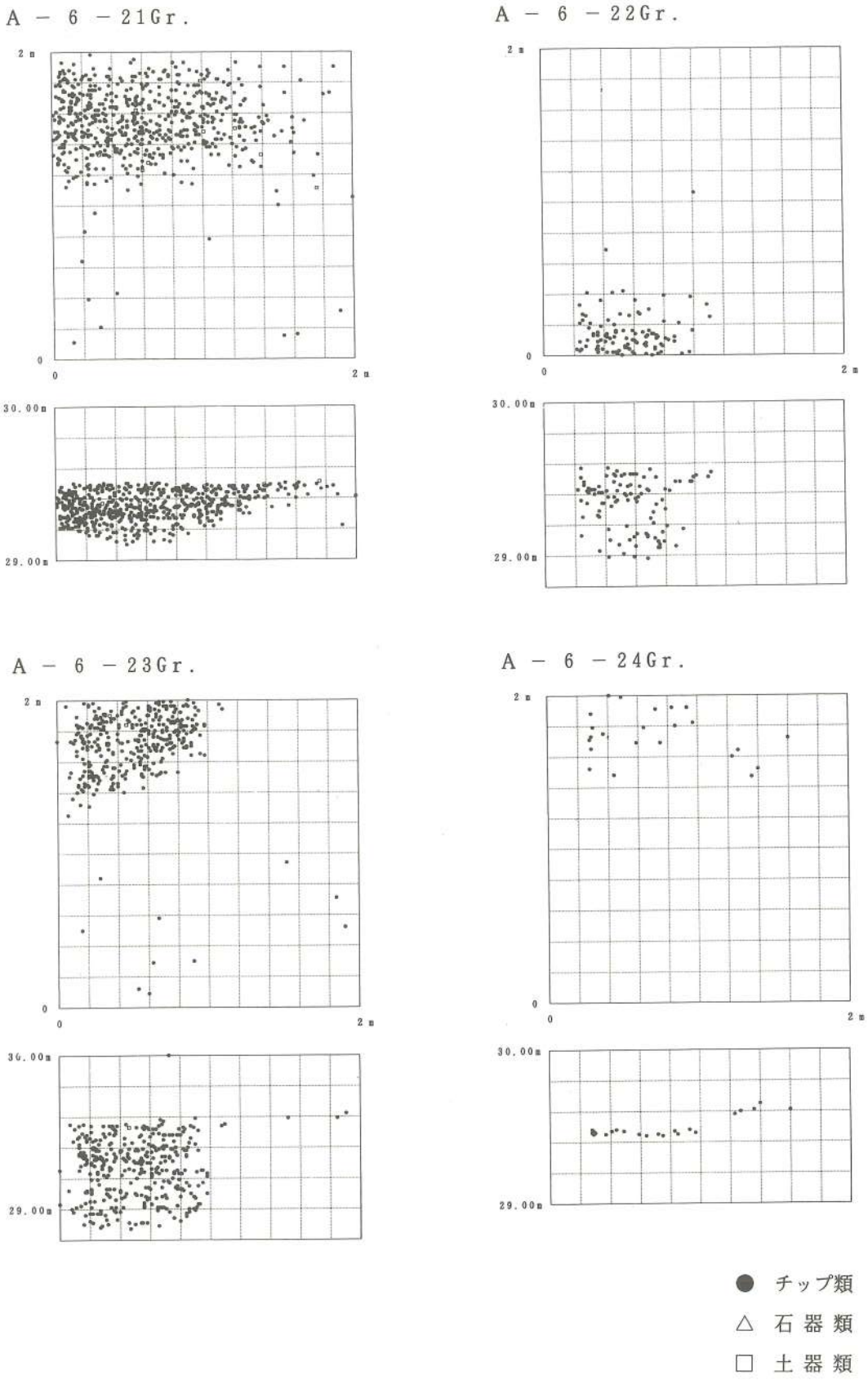


Fig.33　遺物包含層中遺物分布図(8)　A-6-21Gr.～A-6-24Gr.（1/40）

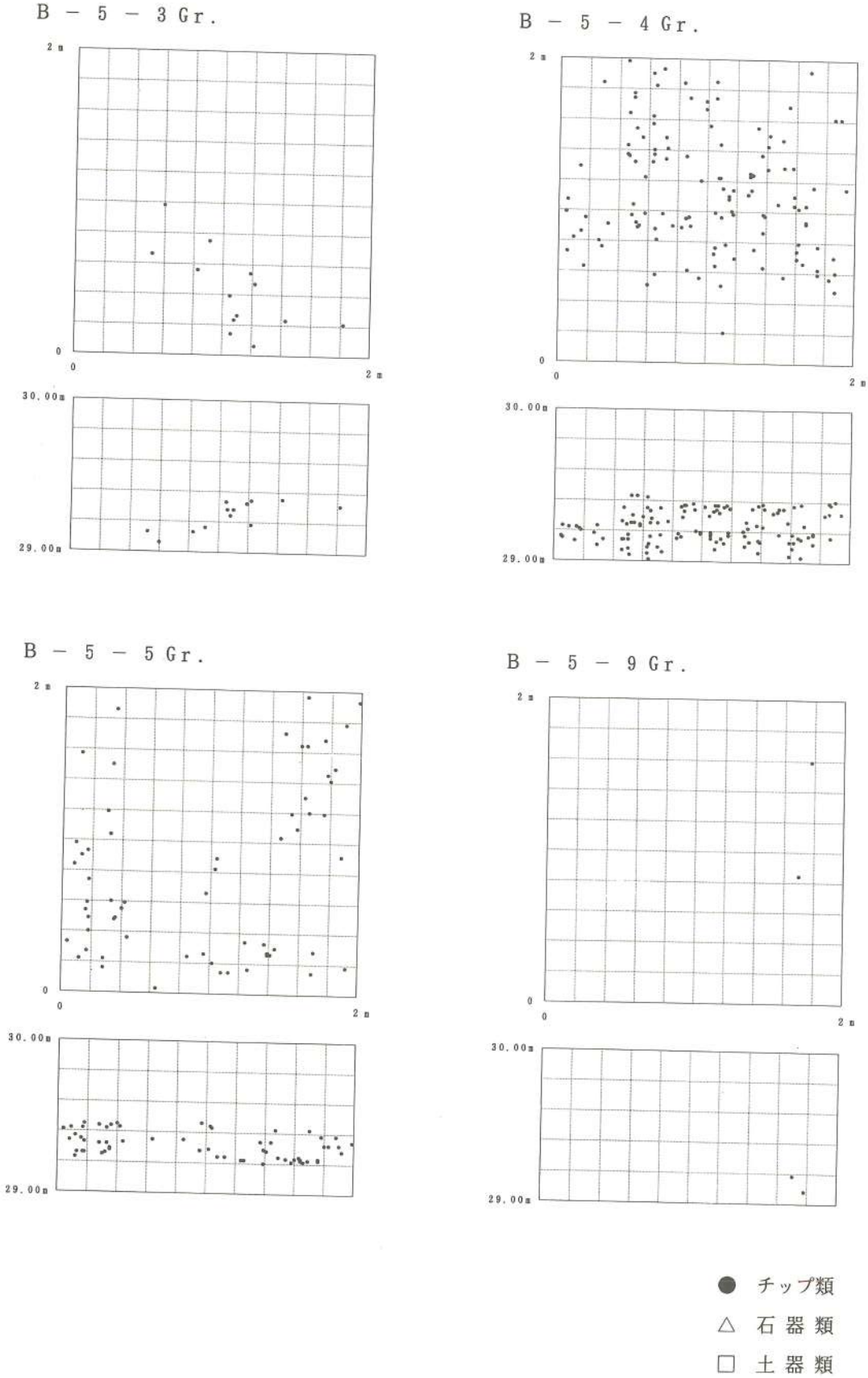


Fig.34　遺物包含層中遺物分布図(9)　B-5-3Gr.～B-5-5Gr.・B-5-9Gr.（1/40）

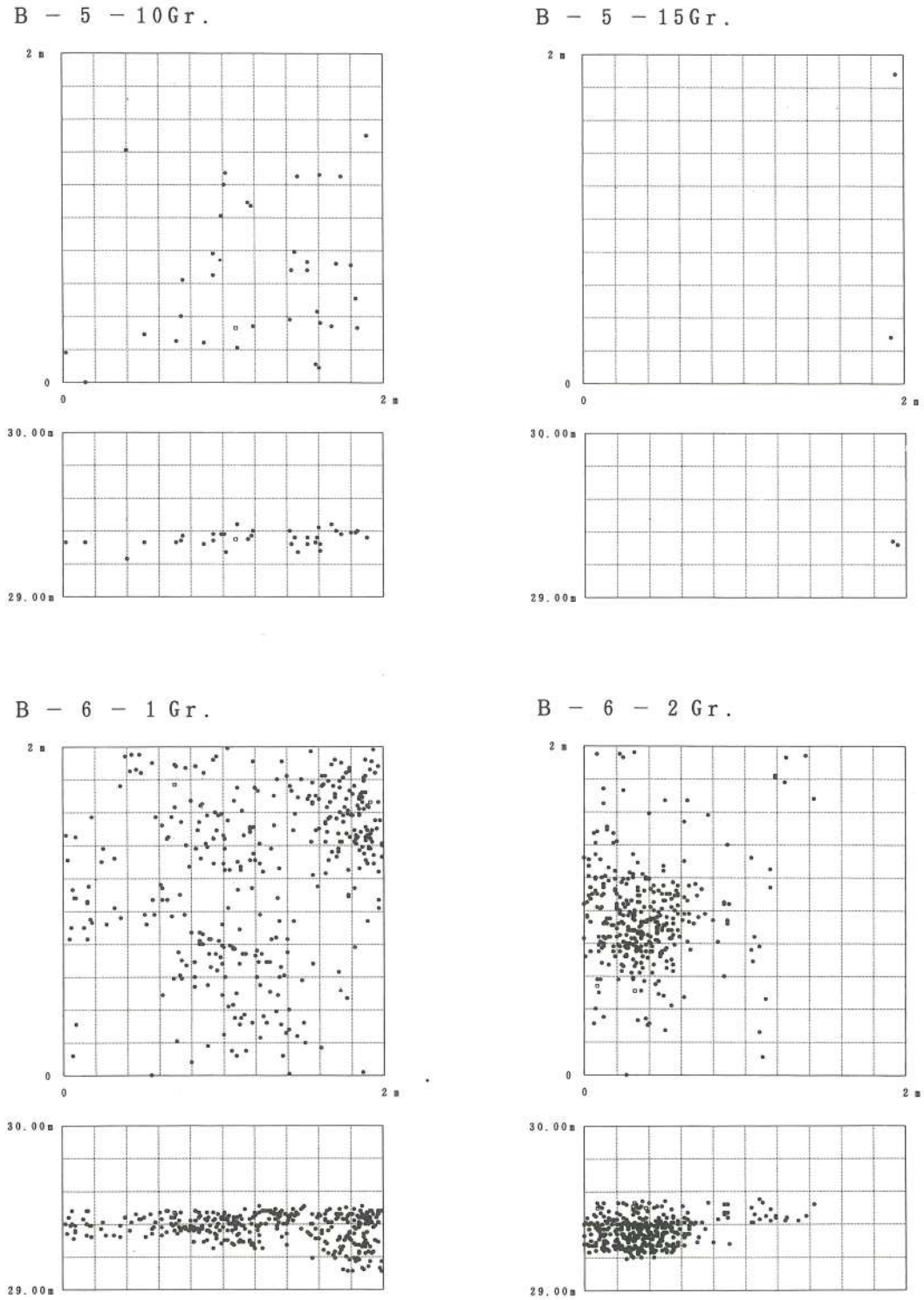


Fig.35　遺物包含層中遺物分布図(10)　B-5-10Gr.・B-5-15Gr.・B-6-1Gr.・B-6-2Gr.（1/40）

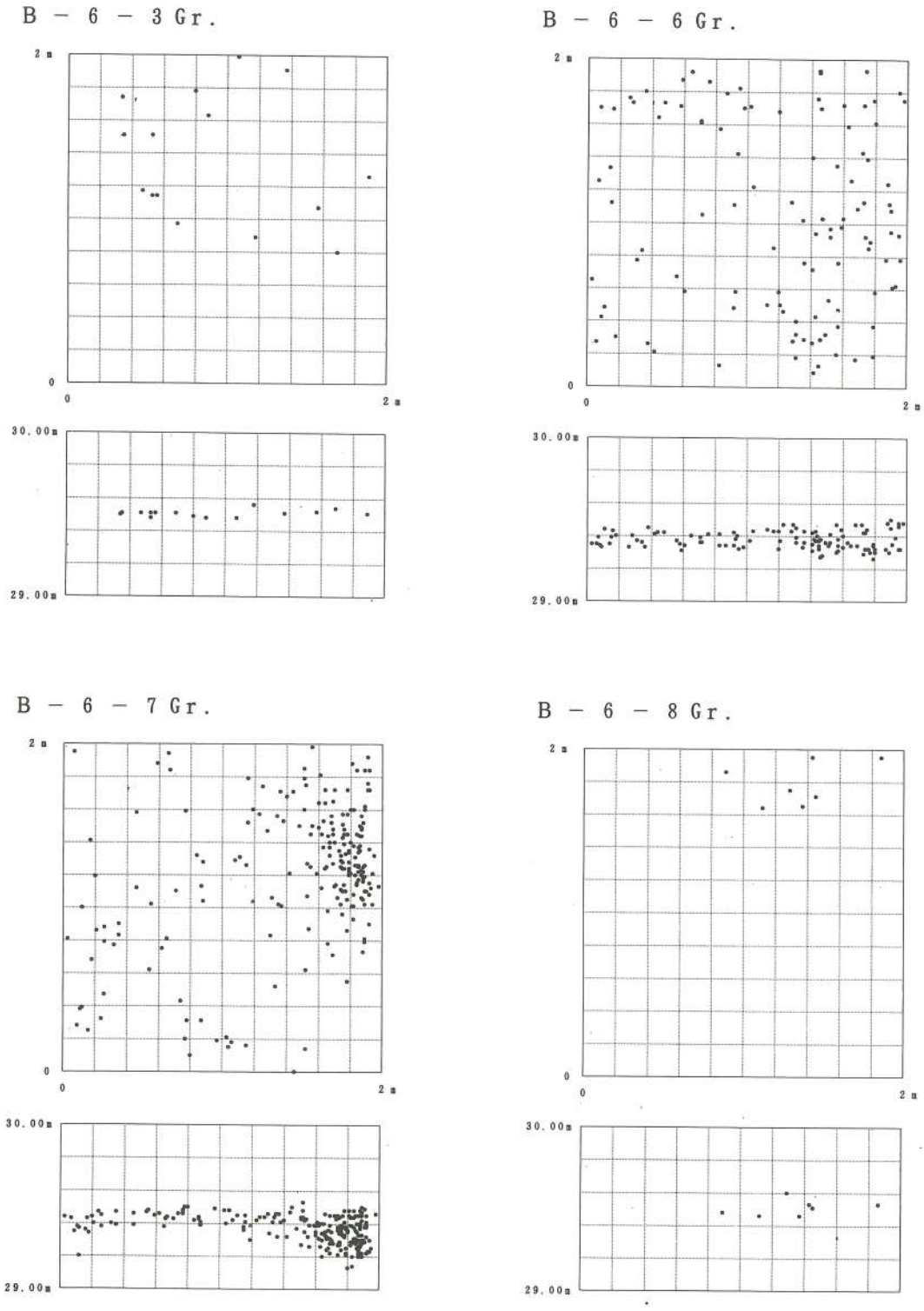
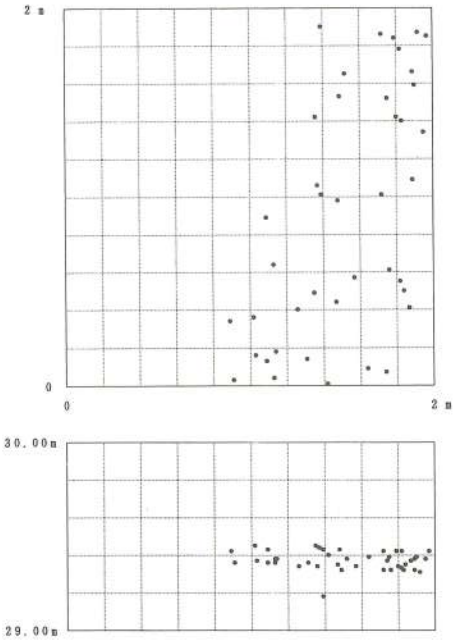
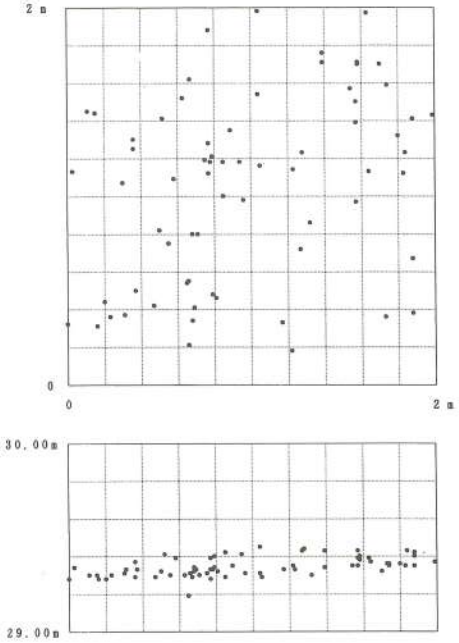


Fig.36　遺物包含層中遺物分布図(11)　B-6-3Gr.・B-6-6Gr.～B-6-8Gr.（1/40）

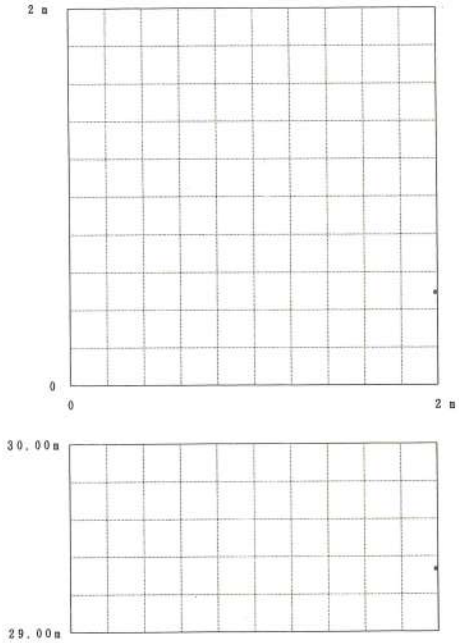
B － 6 － 11Gr.



B － 6 － 12Gr.



B － 6 － 17Gr.



● チップ類

△ 石 器 類

□ 土 器 類

Fig.37　遺物包含層中遺物分布図(12)　B-6-11Gr.・B-6-12Gr.・B-6-17Gr.（1/40）

V．遺　　物

今回の調査では、各遺構などから出土した縄文時代、弥生時代、奈良時代及び中世の各時代の土器や石器などの遺物が出土している。なお、近世以降の遺物も少なからず出土しているが、紙面の都合で割愛した。

出土遺物の量は、遺構数からすると決して多くなく、むしろ少ないと言えよう。ここでは、土器の代表的なものを遺構ごとに、石器類は機種ごとに報告する。

なお、実測図の土器拓影、断面の縮尺は、「1/3」であり、遺物番号のあとに縮尺を表記した。特記のないものはすべて縮尺1/4である。また、実測図、写真図版に付した遺物番号は一致する。

1．土　　器（Fig.38～40・PL.21～24）

SH-424出土土器（Fig.38・PL.21－1、2）

SH-424からは弥生中期の土器がまとまって出土している。1～6は甕。1～3は口縁部が内湾しながら開くもの。4～6は口縁部がやや外反しながら開くもの。いずれも口縁部は横ナデ、胴部外面は器面が荒れており調整不明、内面はナデ。7は小さく外反する口縁が付く広口壺、内外面ともにナデ、外面は赤色塗彩。8は分厚い碗で、口縁端部は面をもつ。器面が荒れており調整不明。9は内湾する体部の鉢で、口縁部横ナデ、体部は内外面ともにナデ、内面は赤色塗彩。10は蓋。つまみ部分のみが遺存している。11～14は壺の底部、15、16は甕の底部。

SK-428出土土器（Fig.38・PL.21－3、4）

15～17はいずれも縄文時代後期の土器である。15は粗製の深鉢の底部。16は体部が直線的に開く鉢で、口縁内面に1条の細い沈線がめぐっている。内外面ともにていねいなナデ。17は浅い体部の浅鉢で、口縁部は外反しながら立ち上がる口縁部との境界に明瞭な稜をもつ。口縁外面には2条の沈線がめぐっている。また遺存部の形状からゆるやかな波状口縁を呈すものと推定される。

SK-429出土土器（Fig.38、39・PL.21－3～8、PL.22－1～4）

SK-429からは中世の土器群が出土している。20～22、26～29はいずれも土師質の土鍋の口縁部。20～22、26など口縁部かやや肥厚するもの。27は口縁内面に面取りが見られるもの。29は口縁外面に断面半円形の突帯をめぐらし玉縁状としたもの。内面には刷毛目を残し、外面には煤が付着しているものが多い。26は他に比べると口径が広く体部が浅い形態のもの。23～25は羽釜。体部中位につばがめぐり、つば以下の底部外面には煤が付着している。23は把手が付いていたと思われる耳を持ち、肩部上面に三重角枠の連続押圧文が施文されている。30、31は縄文式土器。30は口縁部がくの字形に屈折し内湾しながら立ち上がる深鉢で、口縁外面に3状の鈍い沈線がめぐる。31は深鉢の底部。32は灰釉陶器皿で口縁が4ヶ所つままれており、高台畳付部分を除き施釉されている、胎土は乳白色、志野系の製品か。

SK-430出土土器（Fig.39・PL.22－5）

33は、須恵器坏、口縁端部が小さく外反する、口縁部横ナデ。

SK-432出土土器（Fig.39・PL.22－6）

34は、弥生式土器の器台、黄赤褐色を呈し、口縁部、裾端部横ナデ、体部は内外面共たて方向のナデ。

SK-441出土土器（Fig.39）

35は玉縁状の口縁に浅い体部の土師質の器で、近世の焙烙に似た形態を呈す。

SK-442出土土器（Fig.39・PL.22－8、PL. 23－1～3）

36は須恵器坏。口縁部内面が肥厚し小さく外反する。口縁部横ナデ、底面には回転ヘラ切り痕を残す。37～40は土師器の坏。37は内湾する体部の坏で、やや時期が下るもの、底面は回転ヘラ切りの後荒いナデ。38は口縁がやや外反する。ロクロ目を明瞭に残し、口縁部横ナデ、底面は回転ヘラ切りの後荒いナデ。40は浅い体部の盤。41～44は土師器甕、43、44は外面に刷毛目を残す。45は須恵器壺、長頸壺の肩部。外面横方向のナデ、内面は水引のまま。46は円筒状の器で器種は不明、内面には同心円、外面には格子目の叩きの後荒いナデ。

SH-450出土土器（Fig.39）

47は弥生中期後半の甕、口縁はやや外反しながらくの字形に開く。器面が荒れているため調整不明。

SK-477出土土器（Fig.40・PL.22－7）

48は土師器坏。体部は直線的に開き口縁部に至る。口縁部横ナデ、底面は回転ヘラ切りの後荒いナデ。

SB-482出土土器（Fig.40・PL.23－4）

49、51は土師器坏。いずれも体部は浅く、口縁部横ナデ、底面ナデ。51は口縁部が小さく外反する。50は土師器甕。外反しながら開く口縁端部は玉縁状に丸みを帯びる。

SK-557出土土器（Fig.40・PL.23－5）

52は、土師器高台坏。高台は付け高台で底部のみ遺存。高台部横ナデ。

SK-562出土土器（Fig.40・PL.23－6、7）

53、54は、須恵器坏。53は浅い体部で玉縁状の口縁をもつ。55～57は土師器甕。いずれも外反し開く口縁をもち、外面刷毛目、内面ナデ調整。

八藤遺跡4区表採土器（Fig.40・PL.23－8、PL.24－1）

58は土師器の丸底甕、内外面共にナデ。59は須恵器坏、体部は外反しながら開き口縁に至る。底面は回転ヘラ切りの後荒いナデ。60は土師器高台坏。61は土師器甕の口縁。

SK-204出土土器（Fig.40・PL.24－2、3）

62は、縄文式土器片で表にはミミズ腫れ状の隆線が2条、内面は横位の条痕を残す。茶褐色を呈す。

SK-220出土土器（Fig.40・PL.24－2、3）

63は、縄文式土器片で深鉢の胴部と考えられる、外面には縦方向の条痕、内面ナデ、茶褐色を呈す。

SD-238出土土器（Fig.40）

64は土師器の蓋。65は土師器甕。66土師器坏。

堤土墨跡2区表採土器（Fig.40）

66は、縄文式土器片で深鉢の底部、茶褐色を呈す。

SB-503出土土器（Fig.40・PL.24－2、3）

掘立柱建物址の柱穴から縄文式土器片が1点出土している。粗製の深鉢で外面は粗い条痕、内面ナデ、黄赤褐色を呈す。

SD-506出土土器（Fig.40・PL.24－4）

SD-506は近世以降の耕作溝で、新しい遺物に混じり、69、70の土師器甕が出土している。70は把手部分。

SH-507出土土器（Fig.40・PL.24－5・6）

住居址は弥生中期の所産であるが、縄文式土器片が1点出土している。71は粗製の深鉢で内外面共に粗い条痕を施す、黄赤褐色を呈す。

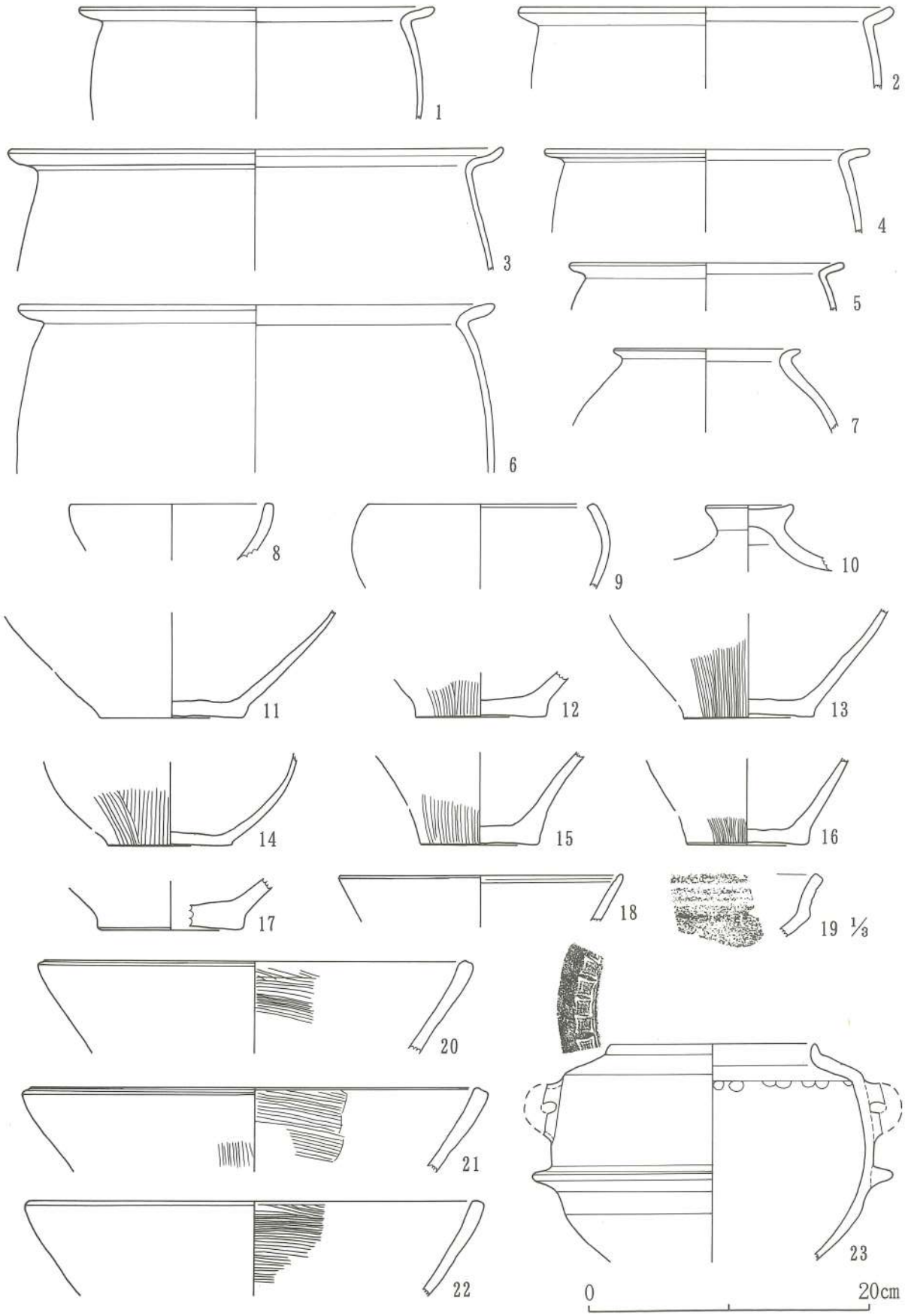


Fig.38　出土遺物実測図(1)　(1/4)

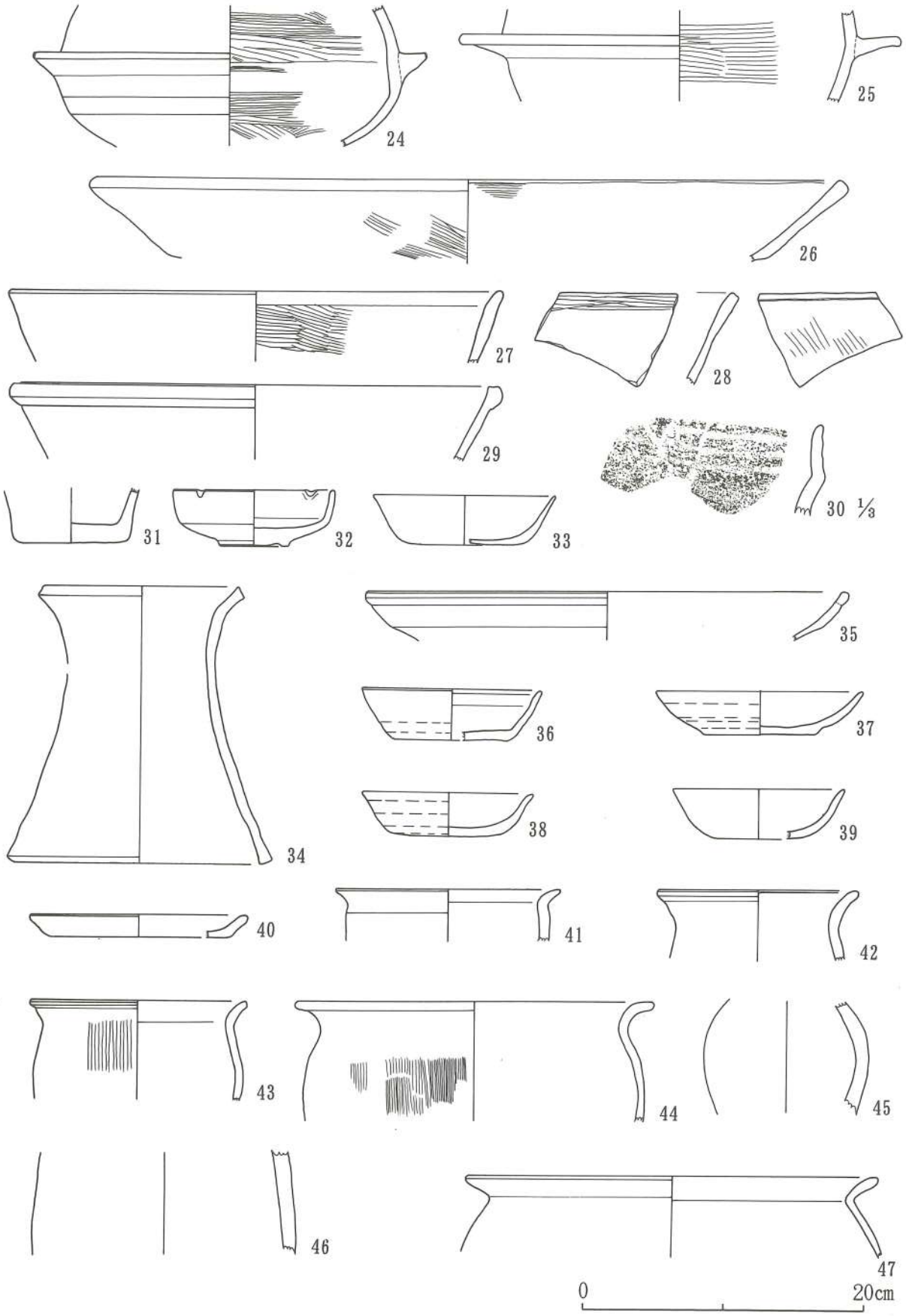


Fig.39　出土遺物実測図(2)　(1/4)

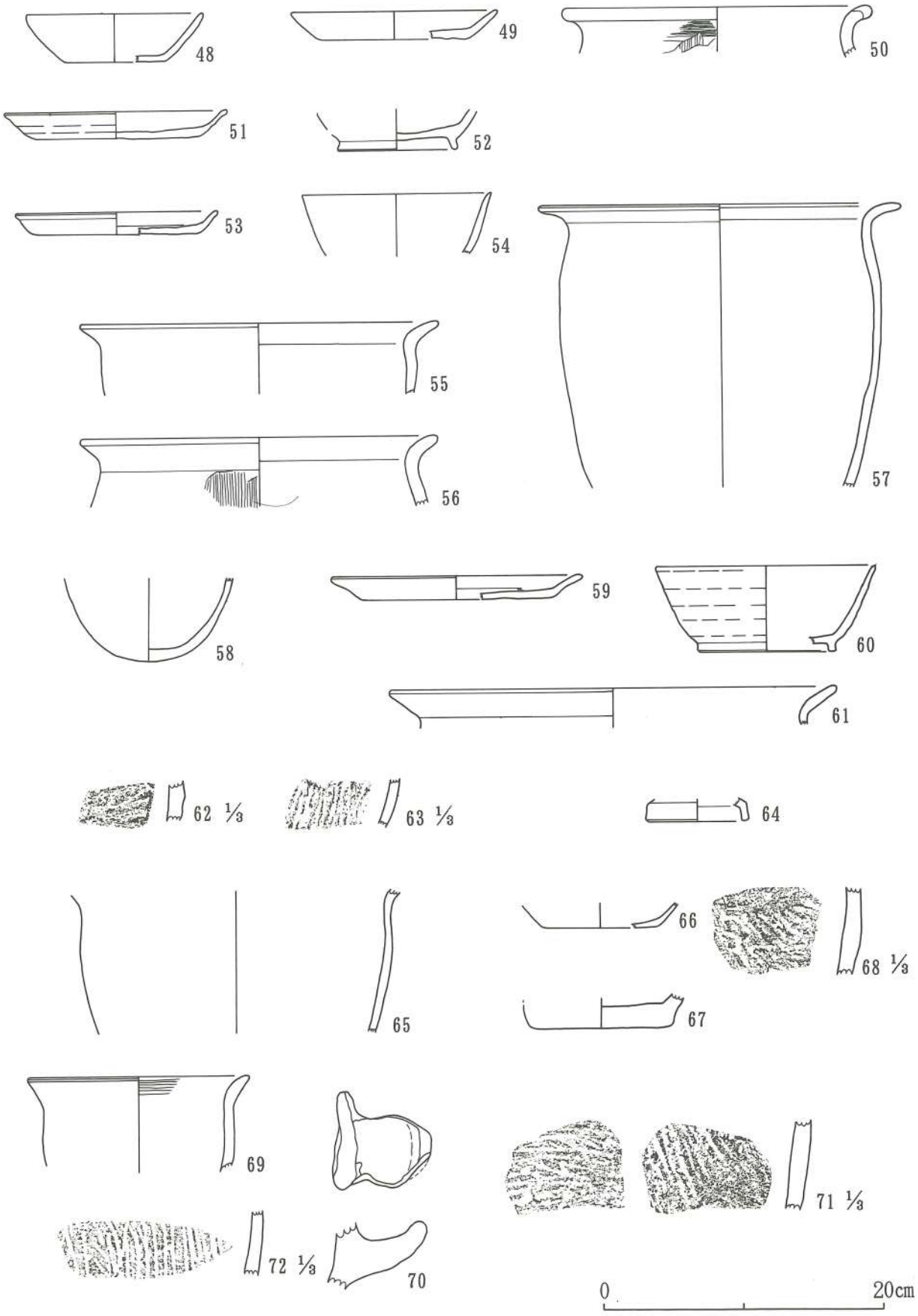


Fig.40　出土遺物実測図(3)　(1/4)

SK-508出土土器（Fig.40・PL.24－5・6）

72は縄文式土器片で、胎土に滑石粉を含み外面に櫛目文が施されている。赤褐色を呈す。

2．石器・その他（PL.25～27・Tab.5）

今回の調査では土器のほかに剝片や遺物包含層から出土したチップなどが出土しているが、ここでは典型的な石器類と鉄滓について器種ごとに報告したい。なお、個々の遺物の出土地点、法量などは、Tab.5にまとめたのでそちらを参照されたい。

石　鏃（PL.25）

石鏃は、八藤遺跡4区から20点、堤土塁跡2区から9点の合計29点が出土しており、すべてが打製石鏃である。形態から見ると凹基式がもっとも多く27点、平基式のもの2点（5、8）であり、柳葉形のものは出土していない。もっとも多く出土した凹基式のもは、バラエティに富んでいる。長さと幅の比が2：1以上の1、3など細長いもの、2、4、7、11～13、17、18、22、23、25～27など1.6：1程度の二等辺三角形のもの、6、10、14、15、19～21、28など1.2：1以下の正三角形に近いものがある。また、7、15、17など基部の抉りが小さく肉厚で比較的大型のもの、6、14、20～22、28など側縁が直線的なもの、2、4、7、18、19、23など側縁が湾曲するもの、26、27のように逆に側縁が内湾するもの、12、13、16など抉りが大きく長い脚部をもつものなどがある。また3のように側縁に鋸歯状の細かい刃を作りだしたものも見られる。使用されている石材別にみると、黒曜石製が8点、サヌカイト製が20点となっている。

石　匙（PL.26－1）

石匙は、八藤遺跡4区から3点、堤土塁跡2区から5点の合計8点が出土している。使用されている石材はすべてサヌカイトである。30～33のやや細身のものと34～37のやや幅広のものがある。さらに後者は刃部が直線的な34と湾曲した刃部をもつ35～37に分けられる。またつまみの位置も、30、35、36などほぼ中央に付くものと、31～34、37など一方に偏った位置に付くものがある。

石　剣（PL.26－2）

38は、縦長の剝片を利用した石剣の切先部分と考えられるもので、表面は剝離により稜線を作りだし、両側辺に細かな調整を加え刃部としている。断面は偏平な三角形を呈し、裏面は主剝離面を残している。サヌカイト製。SK-444出土。

石　錘（PL.26－2）

39は、つまみ部分以下に両辺より調整を加え刃部を作りだしている。錐の先端部は折れて失われている。サヌカイト製。堤土塁跡G－11Gr.のピットより出土している。

石　鎌（PL.26－2）

40は、縦長の剝片の一辺と先端部（写真右側）に調整を加え刃部を作りだしている。基部は折れて失われているが鎌のような形状の石器であると推定される。刃物の峰にあたる一辺は自然面を残している。サヌカイト製。SK-209出土。

石　斧（PL.27－1）

41は、砂岩質の石材を用いた磨製石斧。断面は偏平な楕円形を呈す。SK-446出土。42は、太型蛤刃石斧の体部で刃部と基部を失っている。断面は厚みのある楕円形を呈す。玄武岩製。SK-457出土。

叩き石（PL.27－2）

43は、凝灰岩質の石材を用いた叩き石と考えられる石器で断面は偏平な円形を呈す。

鉄　　滓（PL.27－２）

44～46は、SK-442出土。47はSD-238出土。

Tab. 5　出土石器等一覧表

（数値は、全て遺存部の値）

遺物番号	種　類	出土遺構	法　量（cm・g）				石　材	備　考
			長さ	幅	厚さ	重量		
1	石　鏃	SK-247	3.3	1.4	0.4	1.6	サヌカイト	
2	〃	SK-247	2.2	1.5	0.3	0.8	サヌカイト	
3	〃	SK-429	2.7	1.0	0.2	0.6	黒曜石	
4	〃	SK-429	1.9	1.2	0.4	1.0	黒曜石	
5	〃	SX-445	1.5	1.4	0.3	0.6	サヌカイト	
6	〃	SX-445	1.6	1.5	0.3	0.4	黒曜石	
7	〃	SK-445	2.9	1.6	0.5	2.1	チャート？	
8	〃	SK-446	2.8	2.3	0.5	3.3	サヌカイト	
9	〃	SK-446	1.7	1.8	0.3	0.9	サヌカイト	
10	〃	A-6- 9	2.0	1.7	0.4	0.8	サヌカイト	遺物包含層調査
11	〃	A-6- 9	1.9	1.3	0.4	0.7	サヌカイト	〃
12	〃	A-6- 9	2.3	1.4	0.4	0.8	黒曜石	〃
13	〃	A-6- 9	1.7	1.0	0.2	0.3	黒曜石	〃
14	〃	A-6-14	1.6	1.6	0.3	0.5	サヌカイト	〃
15	〃	B-6- 7	2.9	2.4	0.6	3.0	サヌカイト	〃
16	〃	A-10	2.3	1.2	0.3	0.7	黒曜石	ピット内
17	〃	B-14	3.0	1.9	0.7	2.7	黒曜石	〃
18	〃	——	2.5	1.7	0.3	1.0	サヌカイト	八藤遺跡４区表採
19	〃	——	1.9	1.7	0.3	0.6	サヌカイト	〃
20	〃	——	1.9	1.7	0.3	0.6	サヌカイト	〃
21	〃	SX-201	1.5	1.1	0.2	0.3	サヌカイト	
22	〃	SK-233	1.9	1.4	0.2	0.4	サヌカイト	

遺物番号	種類	出土遺構	法量 (cm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
23	石鏃	SK-224	1.9	1.5	0.3	0.8	サヌカイト	
24	〃	G-11	2.2	1.5	0.3	0.9	サヌカイト	ピット内
25	〃	E-11	1.9	1.4	0.3	0.9	サヌカイト	〃
26	〃	——	2.3	1.9	1.0	1.1	サヌカイト	堤土塁跡2区表採
27	〃	——	2.7	1.7	0.4	1.3	サヌカイト	〃
28	〃	——	1.6	1.4	0.3	0.5	黒曜石	〃
29	〃	——	3.5	2.2	0.8	4.6	サヌカイト	〃
30	石匙	SK-452	6.8	2.5	0.8	7.4	サヌカイト	
31	〃	SK-226	8.1	2.7	0.6	6.7	サヌカイト	
32	〃	——	5.8	3.2	0.8	13.3	サヌカイト	堤土塁跡2区表採
33	〃	——	7.8	2.5	0.6	12.3	サヌカイト	〃
34	〃	SK-421	5.8	4.2	0.6	16.7	サヌカイト	
35	〃	——	6.1	4.2	0.8	23.0	サヌカイト	堤土塁跡2区表採
36	〃	——	7.0	4.9	0.6	17.0	サヌカイト	〃
37	〃	N-4	8.3	3.8	0.6	15.9	サヌカイト	ピット内
38	石剣	SK-444	4.9	3.3	0.6	10.9	サヌカイト	
39	石錘	G-11	3.0	2.2	0.4	2.1	サヌカイト	ピット内
40	石鎌	SK-209	6.2	2.7	0.8	18.2	サヌカイト	
41	石斧	SK-442	10.1	6.5	3.6	332.5	砂岩	
42	〃	SK-457	8.2	6.7	4.6	419.1	玄武岩	
43	叩き石	SK-446	8.3	5.8	4.7	363.2	凝灰岩	
44	鉄滓	SK-442	8.8	6.8	2.1	194.0	——	
45	〃	SK-442	8.0	5.1	3.1	153.5	——	
46	〃	SK-442	7.7	4.6	2.6	132.0	——	
47	〃	SD-238	6.4	5.0	1.9	87.7	——	道路側溝状遺構

Ⅵ. ま と め

佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う八藤丘陵上の埋蔵文化財発掘調査も今回で２次目となった。今回の調査区域は八藤丘陵のほぼ中央部西斜面にあたり、そして調査区域の西端から派生する１支丘が堤土塁の東側土塁として利用されていることは前述のとおりである。14,000m²に及ぶ調査区域は、八藤遺跡４区・堤土塁跡２区と八藤遺跡５区の２遺跡、２地区にまたがっており、八藤遺跡４区・堤土塁跡２区は連続した遺跡として捉えることが妥当である。

今回の調査では、縄文時代から弥生時代、奈良時代から中世に及ぶ遺構、遺物が検出された。その内訳は、弥生時代中期の竪穴式住居址５軒、奈良時代の掘立柱建物址４棟、縄文時代から中世に及ぶ土壙など130基、奈良時代の所産と考えられる溝跡２遺構であった。特に縄文時代の土壙群や大量のチップ類の出土、奈良時代の道路側溝状遺構の存在は、今回の調査の成果と言えよう。以下、各時代ごとの所見を簡単に列記し、まとめとしたい。

縄文時代の遺構・遺物について

縄文時代の遺構としては、土壙群があげられる。調査した 130基の土壙のうち大半が、この時期のものと考えられる。土器を伴ったものが少なく時期が特定できるものが少ないが、SK-428が後期。また、SK-508からは曽畑式土器と思われる破片が出土している。

遺物では、A・B－５・６ Gr. で検出された包含層出土のチップ類が注目される。チップ類が全体で4,125点が検出されているが、これらは４つの群にまとまりを示して分布していた。調査の結果それぞれは、土壙状の落ち込みを呈した。これはこの付近で産出されたチップなどが凹地に堆積したものと考えられるが、いずれにせよ、このように大量のチップ類が検出されたことは、ここである時に石器の製作が行われたこと示唆するものと言える。

弥生時代の遺構・遺物について

今回の調査で弥生時代のものと考えられる遺構は、竪穴式住居址５軒と SK-432である。いずれも中期の所産である。これらの遺構を、平成元年度の農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡２区の調査で検出された甕棺墓を営んだ集団が残した集落とすることは早急であろうか。また八藤遺跡の周辺には、二塚山遺跡、船石遺跡など著名な弥生時代遺跡が分布しているが、同じ集落遺跡として、前期末から後期にかけて100単位の住居址を残した船石遺跡のあり方と対比すると八藤遺跡の弥生集落は住居の分布密度など対照的である。

奈良時代以降の遺構・遺物について

この時期の遺構として注目されるのは、八藤遺跡４区・堤土塁跡２区で調査区を横断する形で検出された道路側溝状遺構である。堤土塁の東側土塁が八藤丘陵に取りつく部分に始まり、約６ｍの間隔で断続的に延びる延長100m弱の２条の溝は、あたかも道路の側溝を想起させる。路面などと考えられるものは検出されていないが、これを道路遺構とすると、堤土塁の性格解明に一石を投じるものと言える。

さらに説を進め、この道路状遺構が東西に延びると仮定すると、東は鳥栖市立石地区南を通り、養父郡の郡衙の存在が推定されている蔵上地区方面に達する。また西は、日隈山の南側で官道推定線と合流する。

Fig.41　堤土塁跡全体図（1/2,000）

堤土塁跡について (Fig.41)

堤土塁跡は、二塚山丘陵から延びる切通川より西側部分については人工の土塁であることが確認されていた。しかし、八藤丘陵から延びる土手状の部分は、西側の人工土塁との関連は指摘されていたが、今回の調査に先立つ文化財確認調査が行われるまでは、自然の丘陵であろうと考えられていた。この現在東側土塁と呼称する部分が、平成2年度の農業基盤整備事業事業地区に組み込まれ、削平を受けることになり、周辺を含めた一帯の文化財確認調査が実施された。

調査の結果、東側土塁が自然の丘陵を成形し、その上部に版築工法による人工土塁をもつことが判明し、西側土塁と一体のものと考えられるに至った。以下、確認調査の所見を列記する。

・八藤丘陵と二塚山丘陵が最も接近する部分に築かれた全長300m、基部の幅40m、南側田面との比高は9mで、現在は中央部分約80m間に土塁はみえず、東西それぞれ長さ110mの分立した土塁となっている。

・中央部分約80m間の土塁がみえない部分は、試掘の結果、水性堆積物である砂層が検出されるだけで、この間隙が本来のものか、土塁が流失したものかは確認できなかった。

・東側土塁は、自然丘陵を成形し、その上部に高さ約2m人工土塁が積まれている。人工土塁の北側には、犬走り状の幅約 7mの平坦面をもつ、二段築成となっている。西側土塁は、現在この犬走り以下の北側斜面が遺存しているものと考えられる。

・東側土塁の人工土塁の上面の幅は、北側は確認できたが、南側は数カ所設定した試掘溝すべてが近世以来の墓壙によって撹乱を受けており南限は確認できなかった。しかし、東側土塁は南を流れる切通川に一部を侵蝕されており、その露頭に見えるかぎりでは、人工土塁の幅は、10m以上になるものと推測される。

・東側土塁の八藤丘陵との取り付け部に、「野越し」と呼ばれる溝状の施設が存在している。これは溜池に必要以上の水がたまった場合に余分な水を自然にオーバーフローさせる施設に似ている。溝の底面の標高は、24.5mであった。

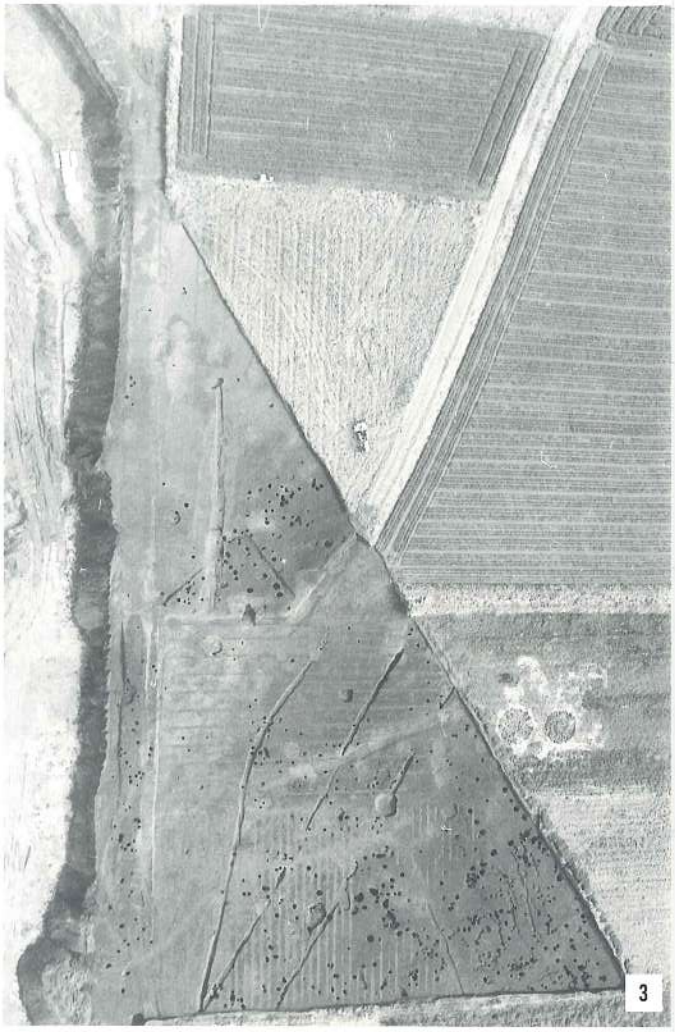
・堤集落と屋形原集落の間の土塁北側一帯の文化財確認調査では、新たに堤六本谷遺跡とした文化財包蔵地が検出されたが、その範囲が標高24.5mの等高線をほぼ境とし、これより低い部分では遺構は検出されなかった。

・東西土塁の方向は、既成の地図上では、概ねN－65°－Eを計り、道路側溝状遺構の方向とほぼ一致している。

以上、土塁に関する所見を列記したが、その後、東側土塁は測量調査を実施し、関係機関の協力によって、保存されることとなった。Fig.41はその測量成果を、既成の地図上に昭和53年調査分と合成した全体図であることをお断りしておく。

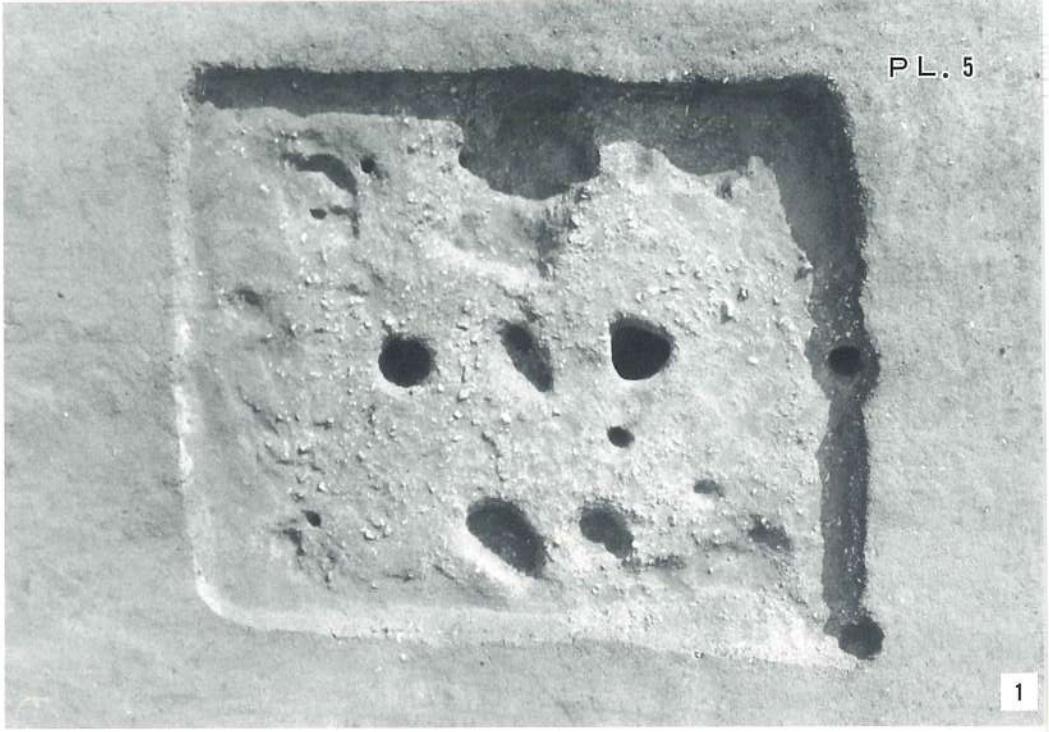
今回の調査では、縄文時代の遺構・遺物がまとまって検出された。このことは、この地域の縄文集落のあり方を考える上で貴重な資料と言えよう。また、堤土塁の東に続く道路側溝状遺構は、平成3年度の農業基盤整備事業に伴う調査予定範囲に続くものと予想され、その性格付け、ひいては堤土塁の築造目的解明は、今後の調査に期待したい。

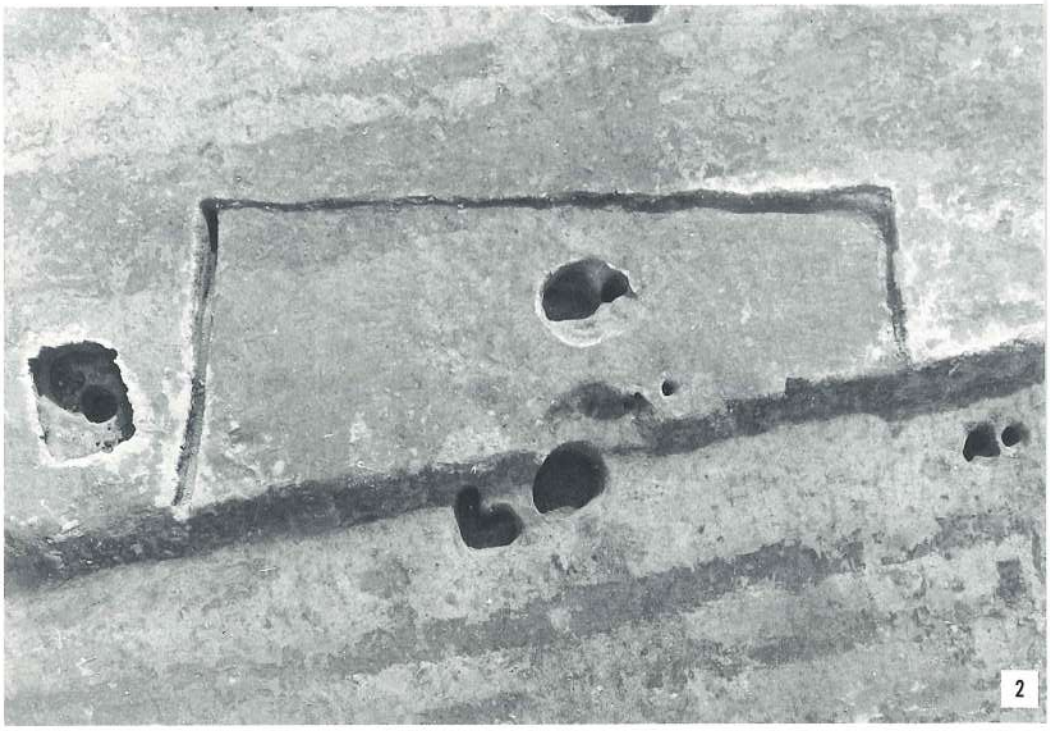
図　　版

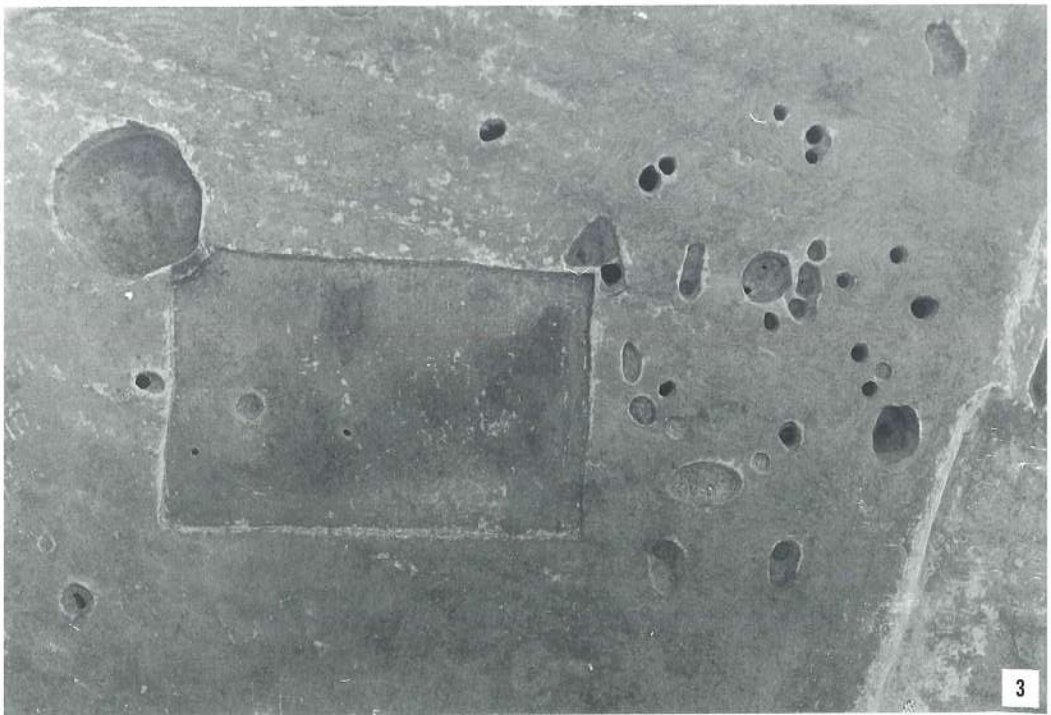


1．・3．・4．八藤遺跡4区　　2．堤土塁跡2区全景

八藤遺跡5区全景　―写真上方が北―



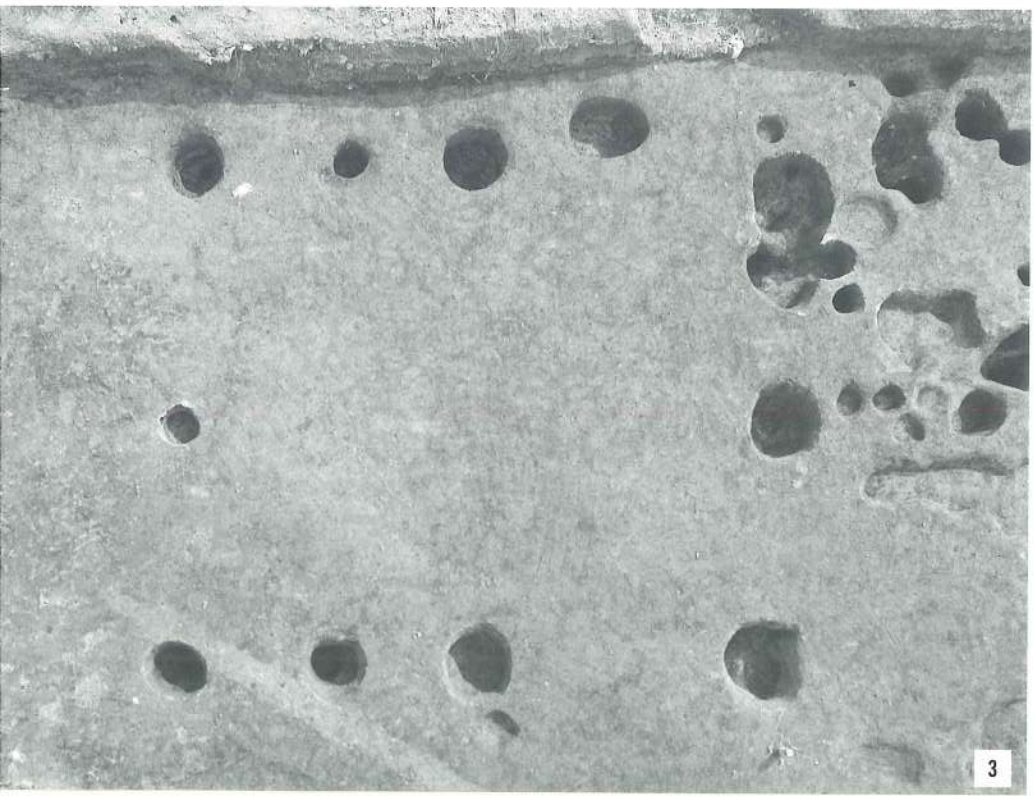




1. SH-424
—写真上方が東南東—

2. SH-450
—写真上方が南東—

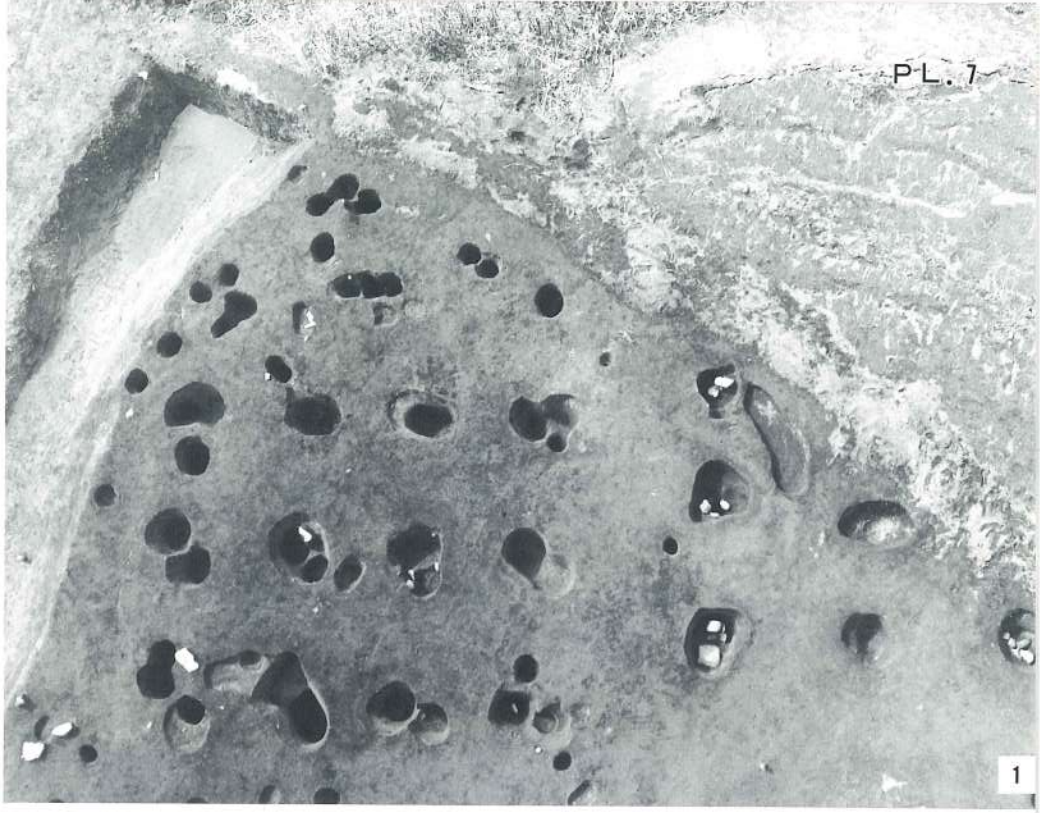
3. SH-456
—写真上方が東南東—

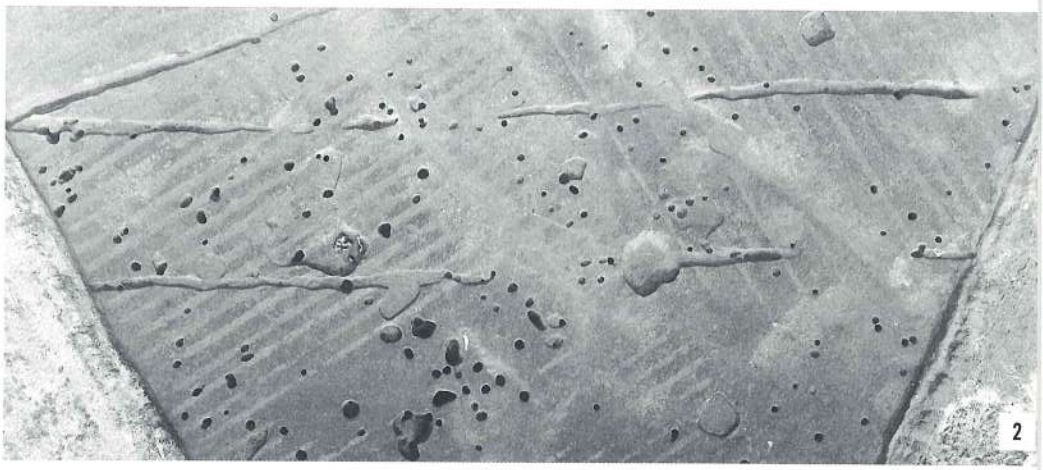


1. SH-507
—写真上方が西—

2. SB-428
—写真上方が東南東—

3. SB-482
—写真上方が東—

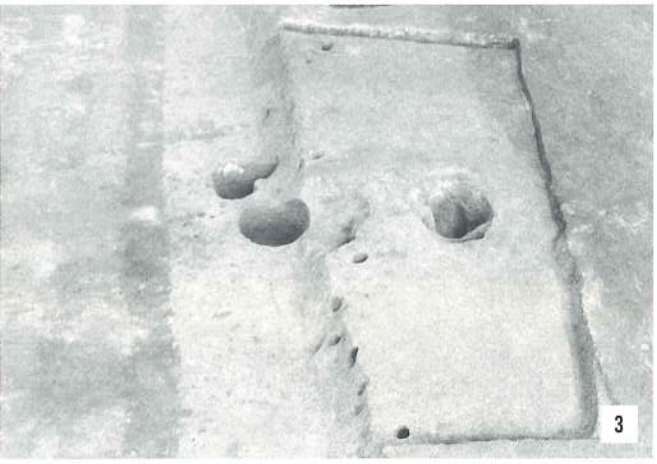


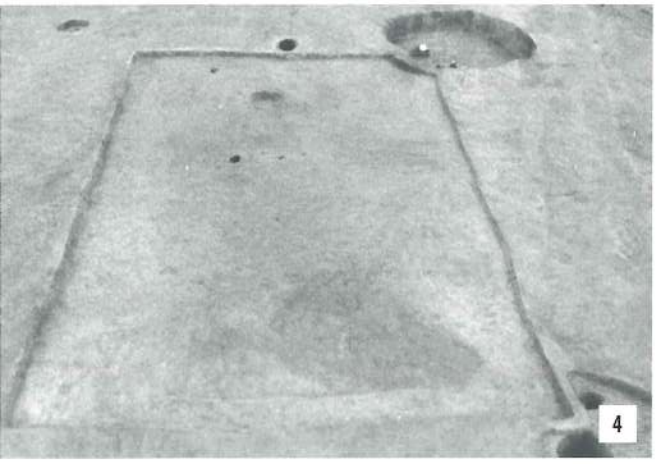


1．SB-502(右)・SB-503A, B
—写真上方が西—

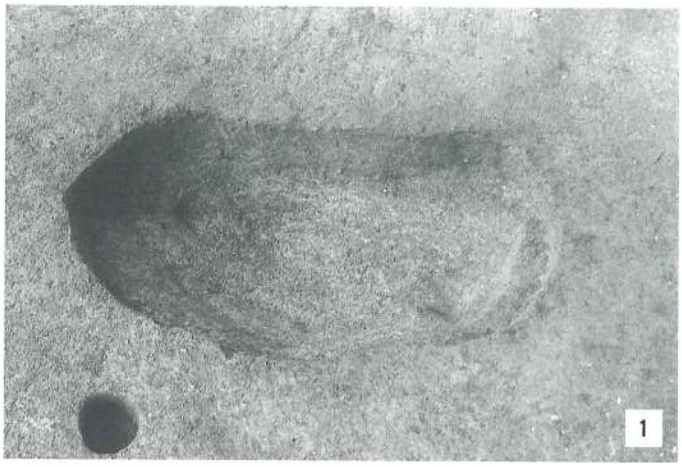
2．道路側溝状遺構
SD-478(上)・SD-488
—写真上方が北北西—

3．SD-492
—写真上方が北北西—





1．SH-424　―南西より―
2．SH-424　遺物出土状況　―南西より―
3．SH-450　―南西より―
4．SH-456　―南西より―
5．SK-401　―西より―
6．SK-402　―東より―
7．SK-403　―南より―
8．SK-404　―南東より―



1．SK-405　―南より―

2．SK-406　―西より―

3．SK-407　―南西より―

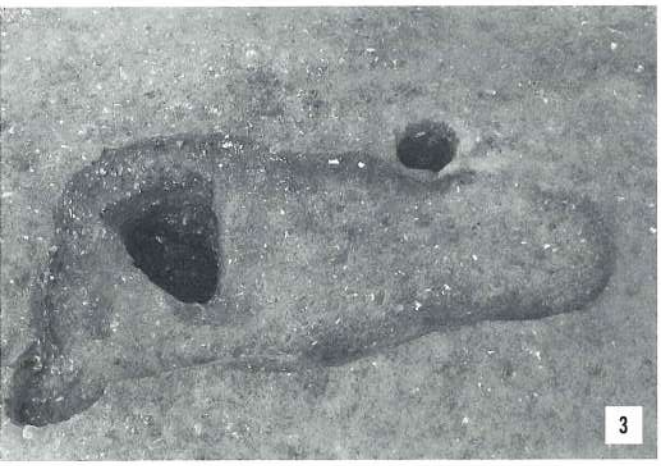
4．SK-408　―南より―

5．SK-409　―南西より―

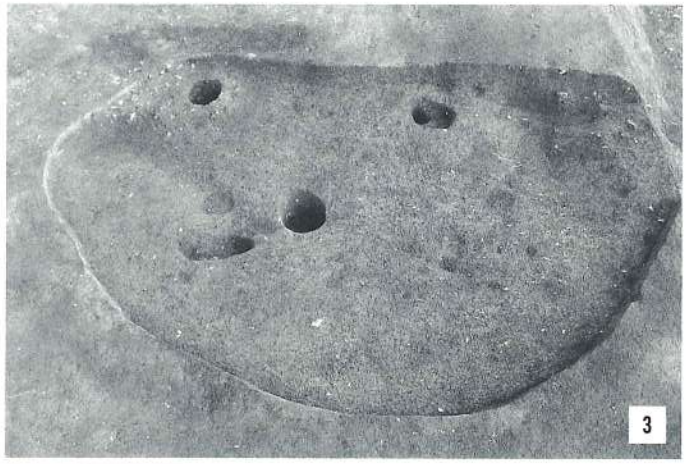
6．SK-410　―南より―

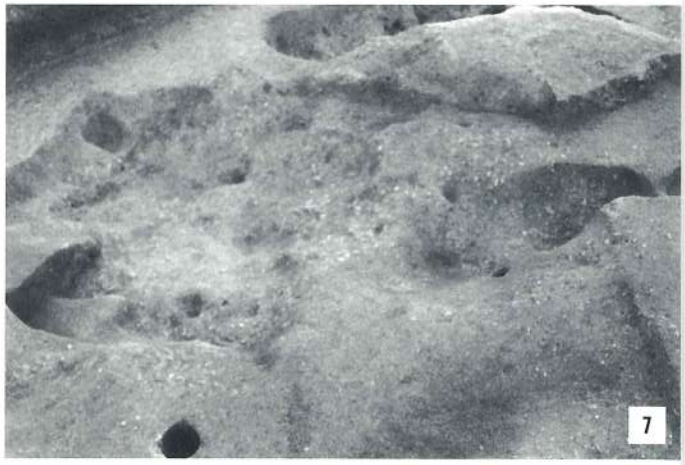
7．SK-413　―南より―

8．SK-414　―北東より―



1．SK-415　―北東より―
2．SK-416　―東より―
3．SK-417　―南より―
4．SK-418　―南西より―
5．SK-419　―南西より―
6．SK-420　―南西より―
7．SK-421　―南東より―
8．SK-422　―北より―





1．SK-425　―南より―

2．SK-426　―南西より―

3．SK-427　―北西より―

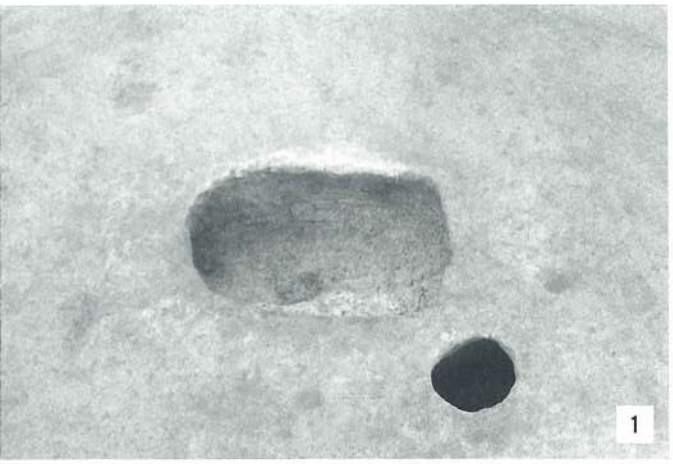
4．SK-429　―西より―

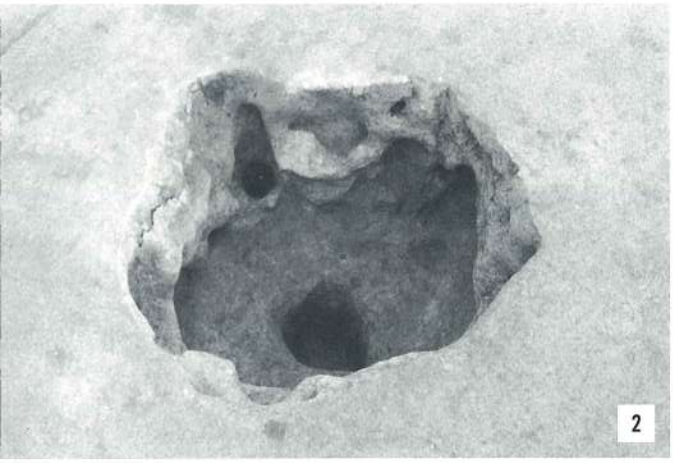
5．SK-429　―北より―

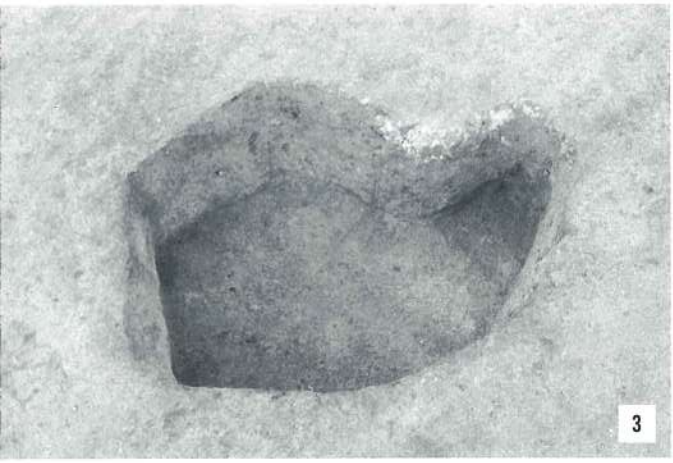
6．SK-430　―南より―

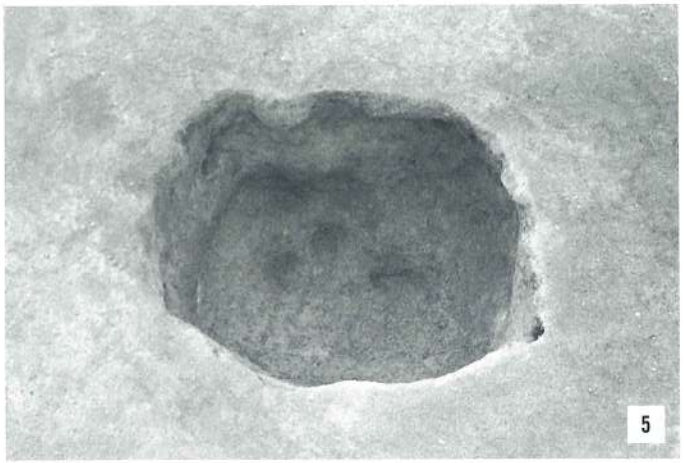
7．SK-432　―南より―

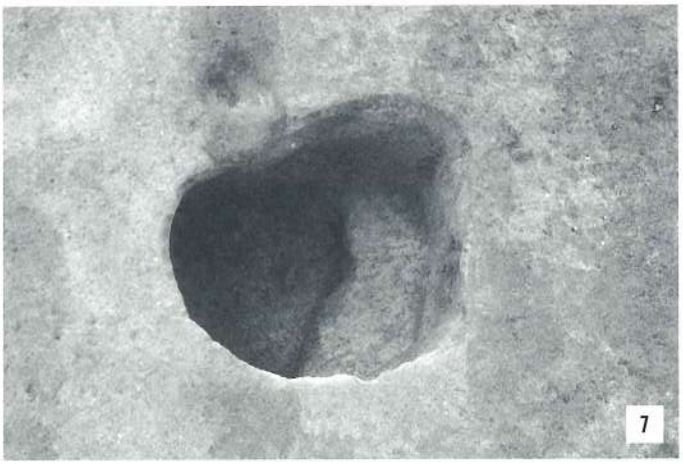
8．SK-437　―南東より―



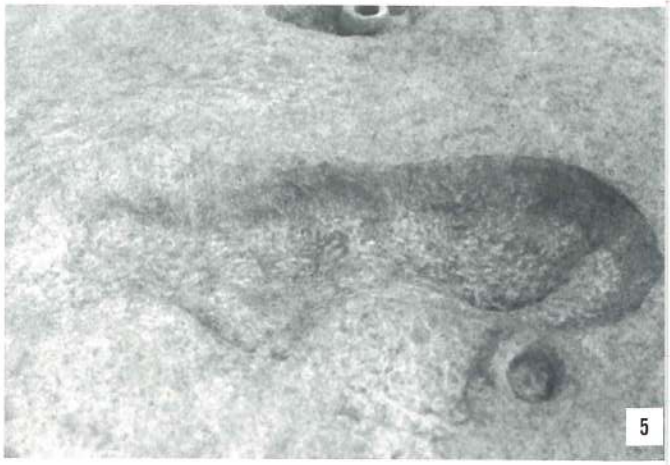


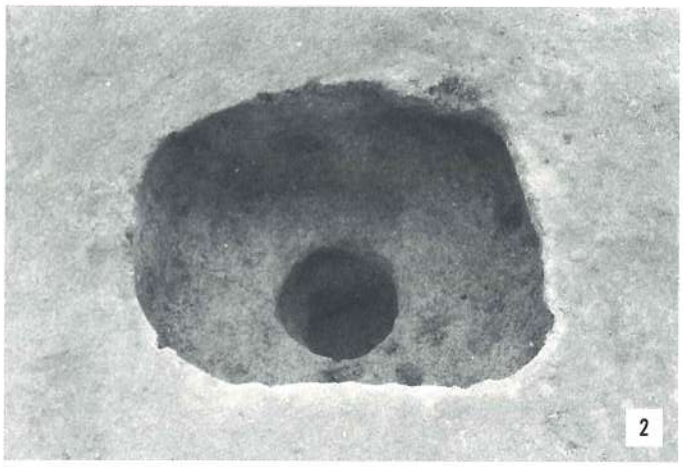


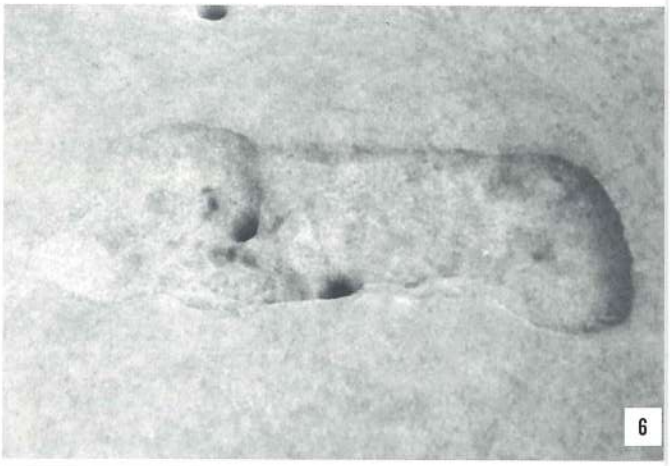


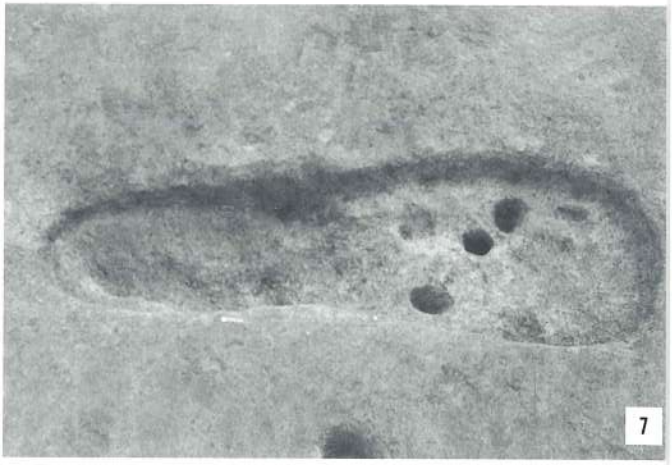


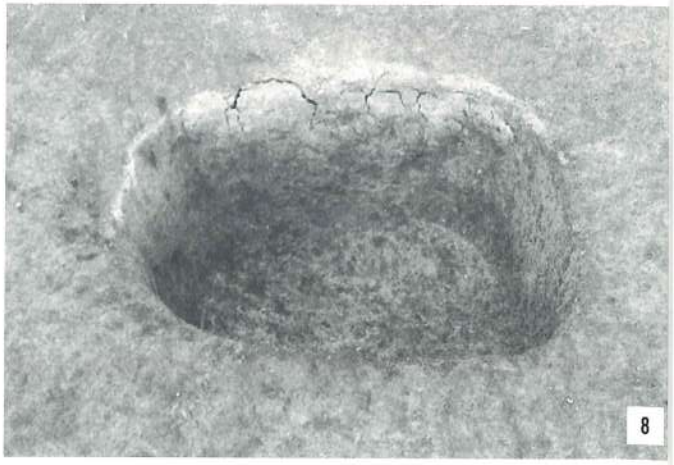
1．SK-441　―南西より―
2．SK-442　―北西より―
3．SK-443　―南より―
4．SK-444　―南西より―
5．SK-445　―北東より―
6．SK-446　―南西より―
7．SK-447　―北東より―
8．SK-448　―南より―











1．SK-449　―南東より―

2．SK-451　―北東より―

3．SK-457　―北より―

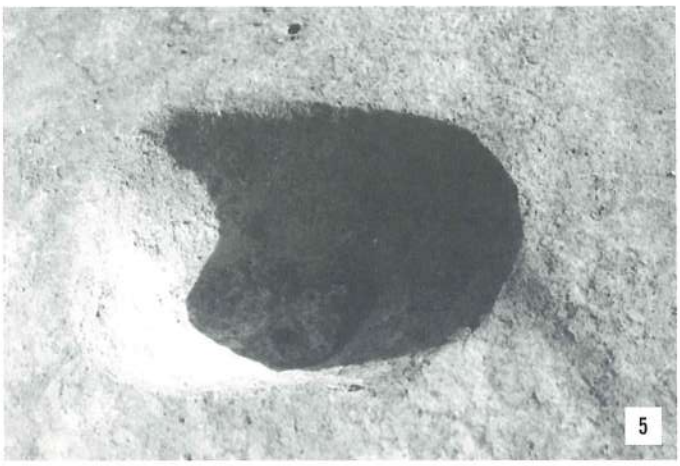
4．SK-459(右)・SK-460　―西より―

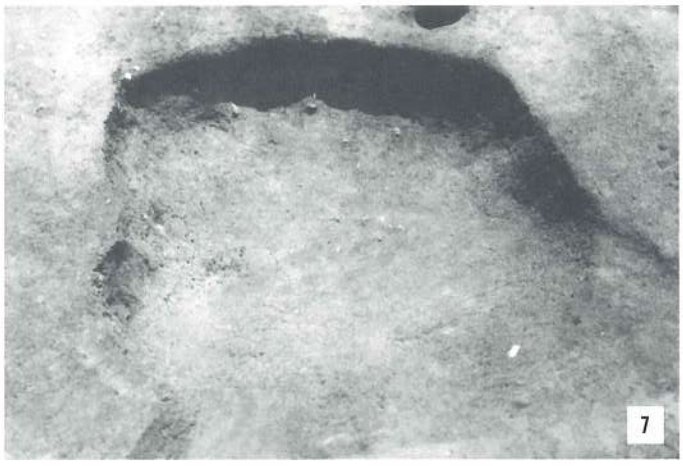
5．SK-462　―南より―

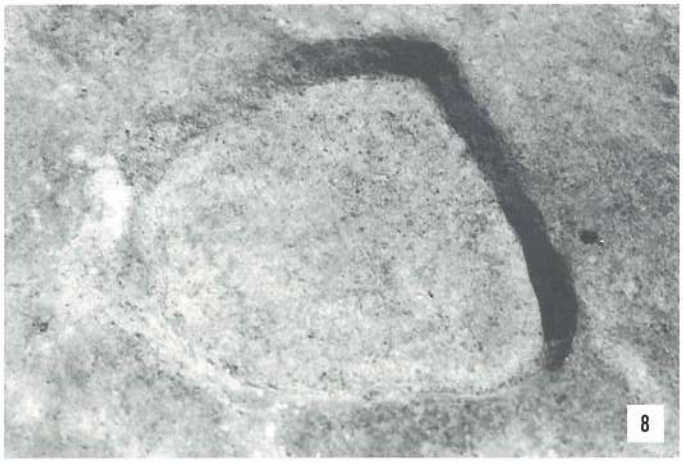
6．SK-463　―北西より―

7．SK-464　―北より―

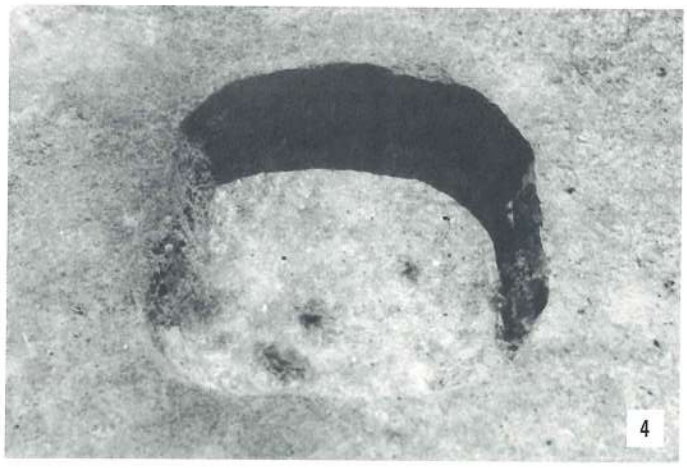
8．SK-465　―南西より―







1．SK-466　―東より―
2．SK-467　―北より―
3．SK-469　―南西より―
4．SK-470　―南西より―
5．SK-475　―北より―
6．SK-477　―北より―
7．SK-479　―南東より―
8．SK-481　―北より―



1．SK-484　―北東より―

2．SX-493　―北東より―

3．SK-494　―東より―

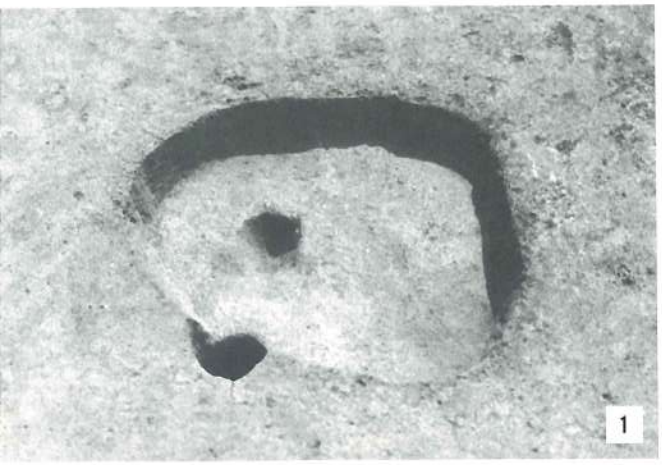
4．SK-499　―北東より―

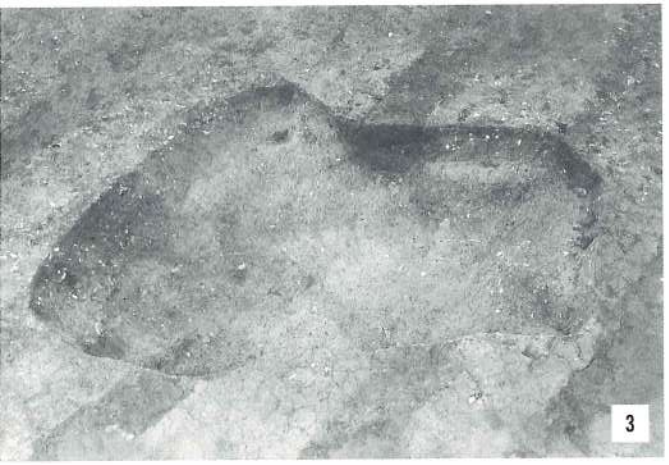
5．SK-552　―北より―

6．SK-553　―北より―

7．SK-554　―南西より―

8．SK-555　―北より―





1．SK-556　―北東より―

2．SX-201　―北東より―

3．SK-202　―東より―

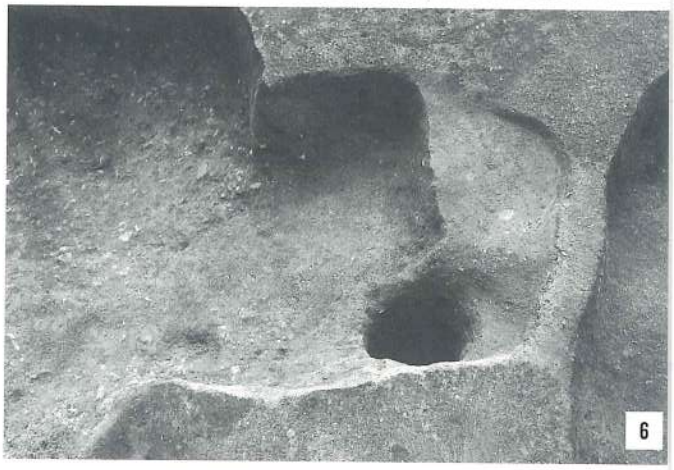
4．SK-203(右)・SK-204　―南西より―

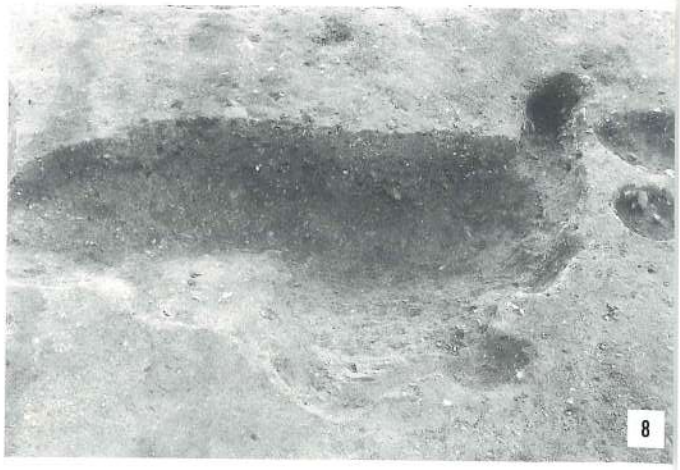
5．SK-206　―北より―

6．SK-207　―南東より―

7．SK-208　―北西より―

8．SK-209　―南より―





1．SK-210(前)・SK-211　―南東より―

2．SK-212　―北西より―

3．SK-213　―北西より―

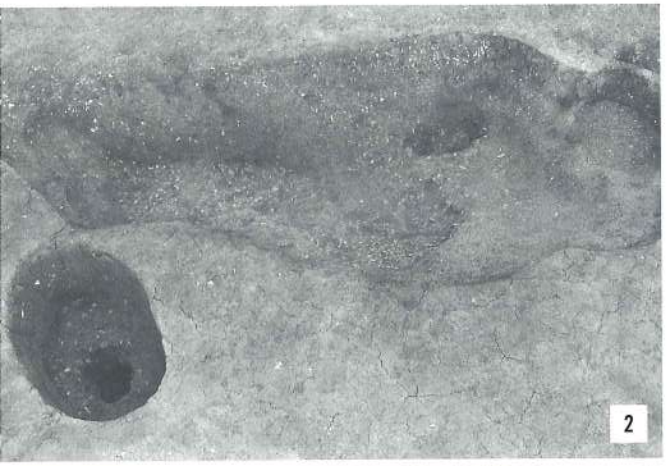
4．SK-214　―南東より―

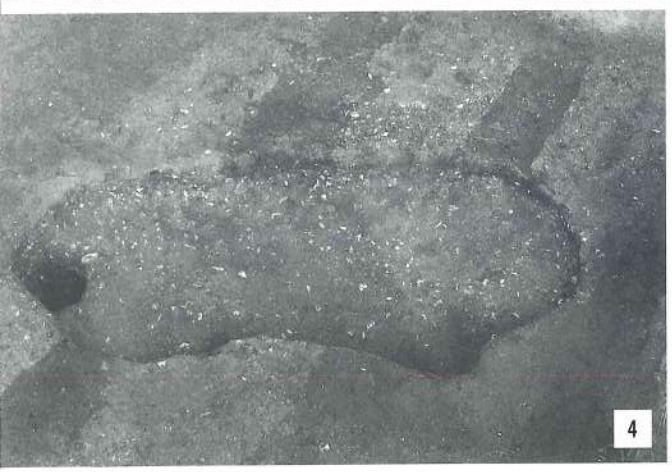
5．SK-215　―北より―

6．SK-216　―北より―

7．SK-217　―北西より―

8．SK-218　―北東より―





1．SK-219　―南西より―

2．SK-220(奥)・SK-221　―南西より―

3．SK-221　―南西より―

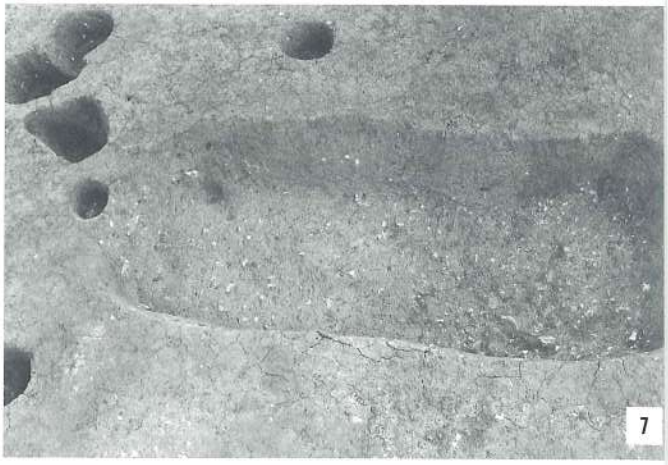
4．SK-222　―南より―

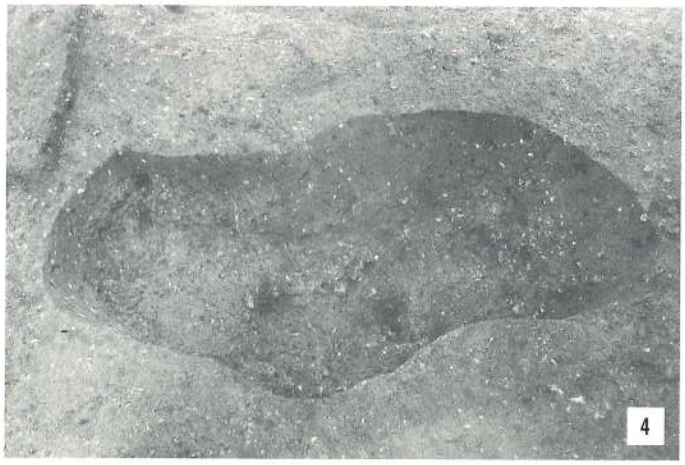
5．SK-224　―南西より―

6．SK-225　―南より―

7．SK-226　―北西より―

8．SK-227　―北東より―





1．SK-228　―南西より―

2．SK-230　―北より―

3．SK-231　―北より―

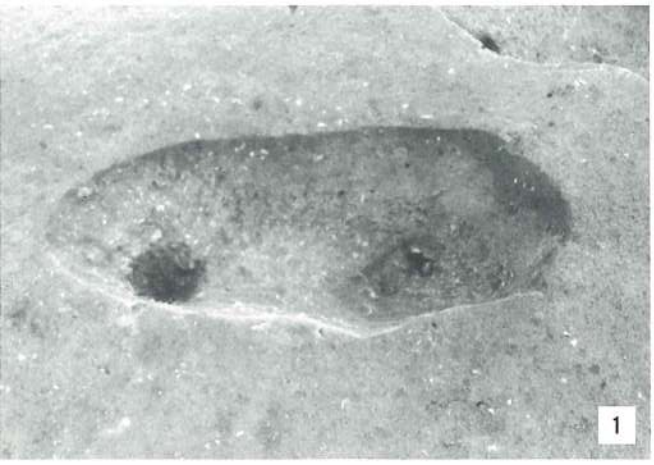
4．SK-232　―北より―

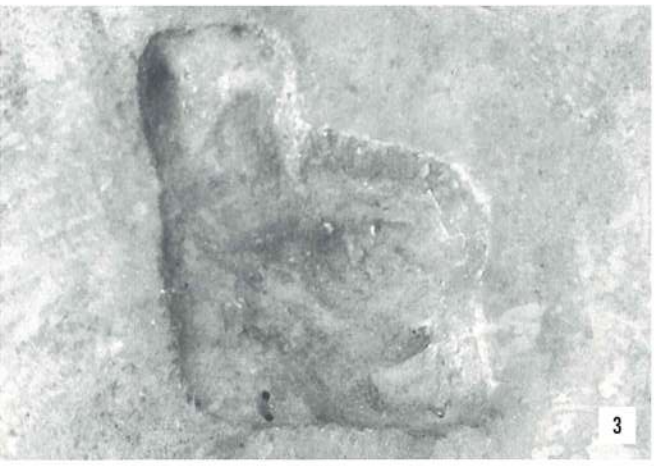
5．SK-233　―南東より―

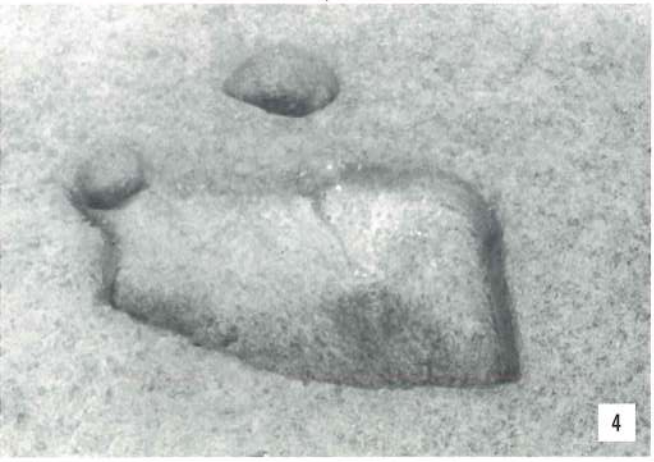
6．SK-234　―北西より―

7．SK-235　―北東より―

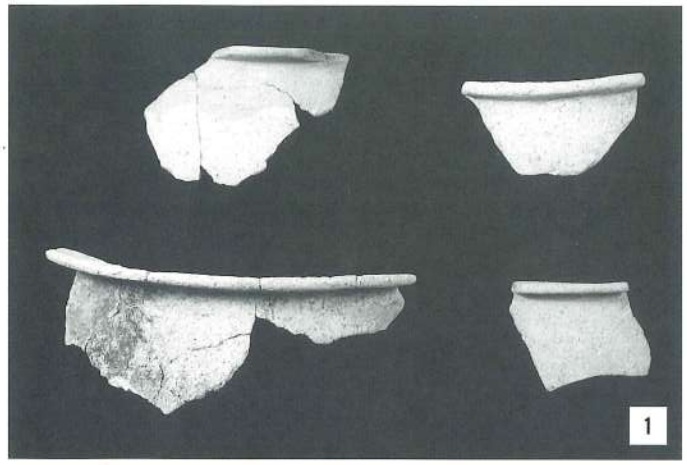
8．SK-241　―北より―

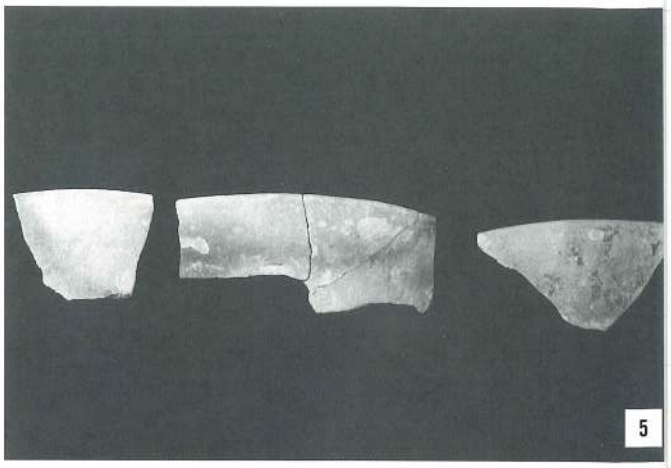


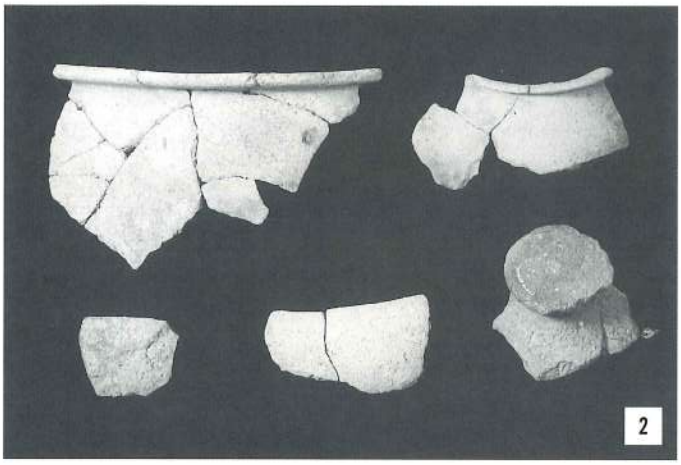


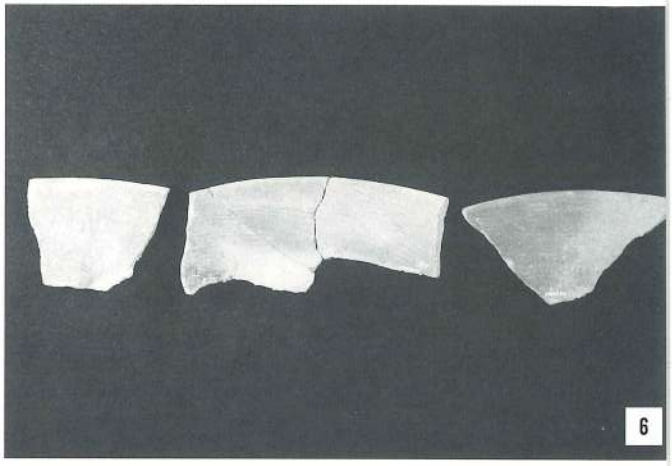


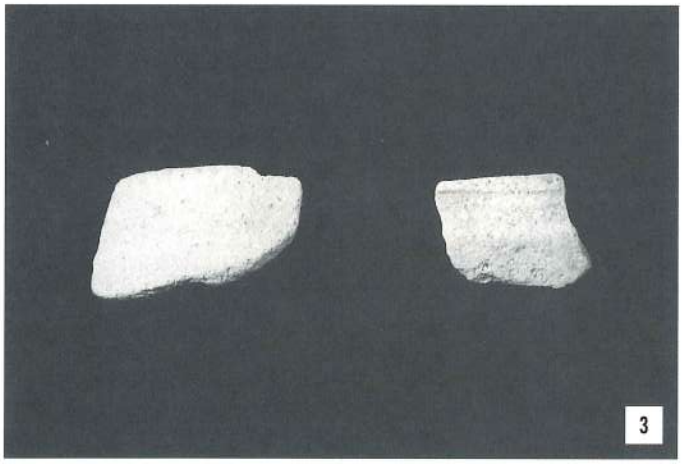
1．SK-242　―北西より―
2．SK-243　―南より―
3．SK-245　―南より―
4．SK-246　―南西より―
5．SK-247　―南東より―
6．SK-249　―南西より―
7．SK-250　―南より―

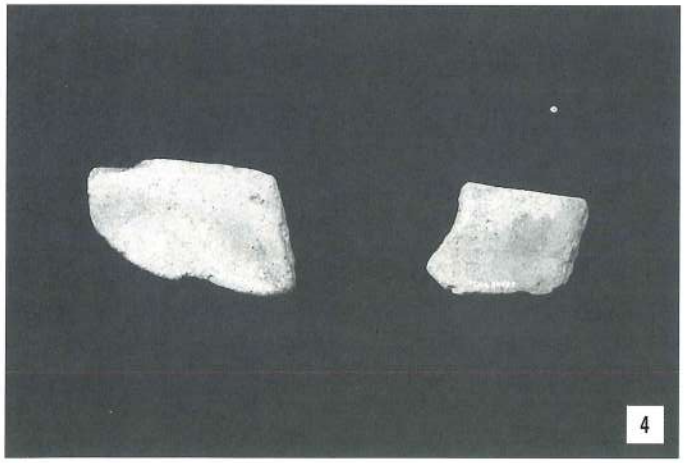


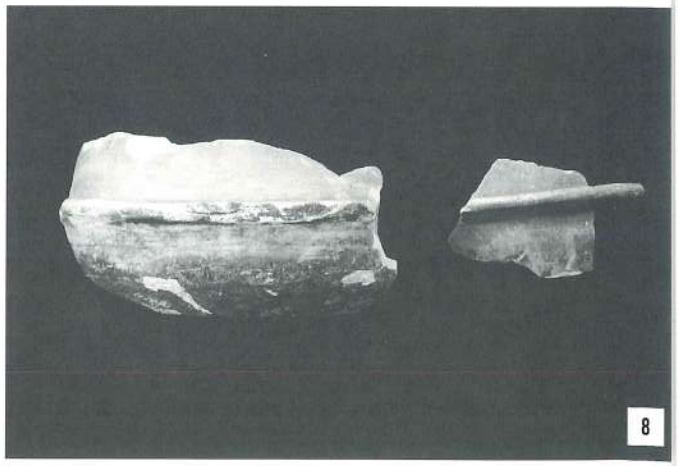












1．上）1・2、下）3・4

2．上）6・7、下）8～10

3．18・19

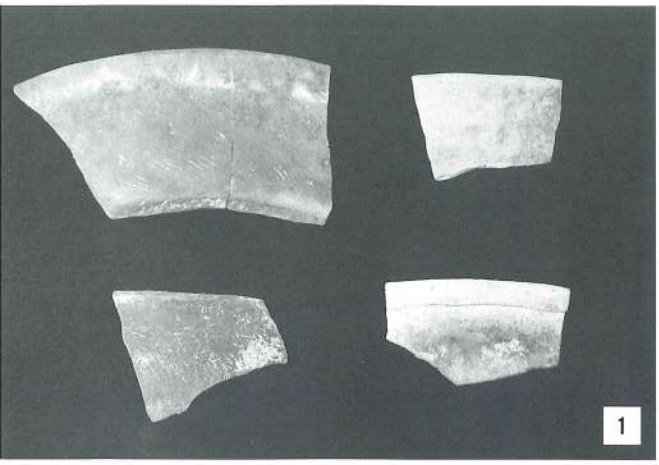
4．　同

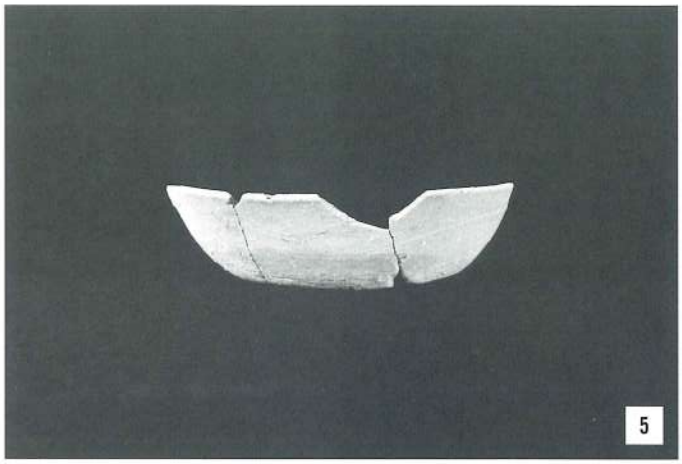
5．20～22

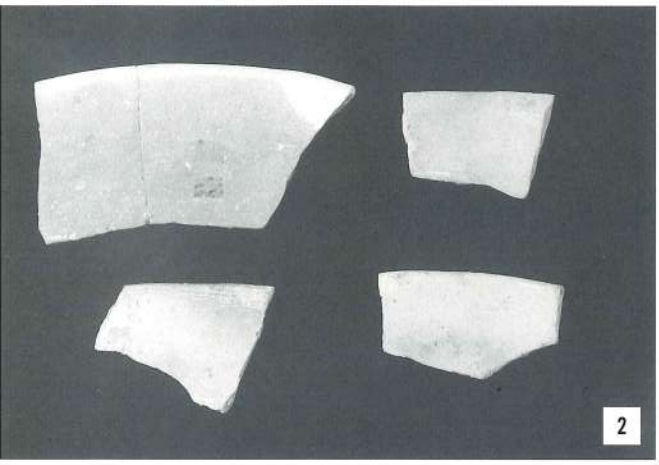
6．　同

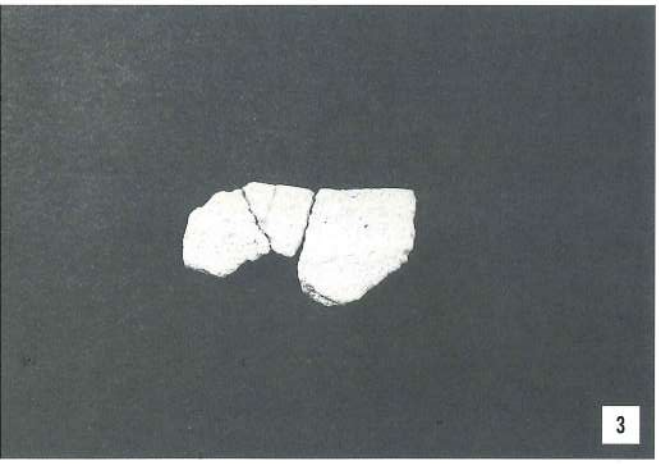
7．23

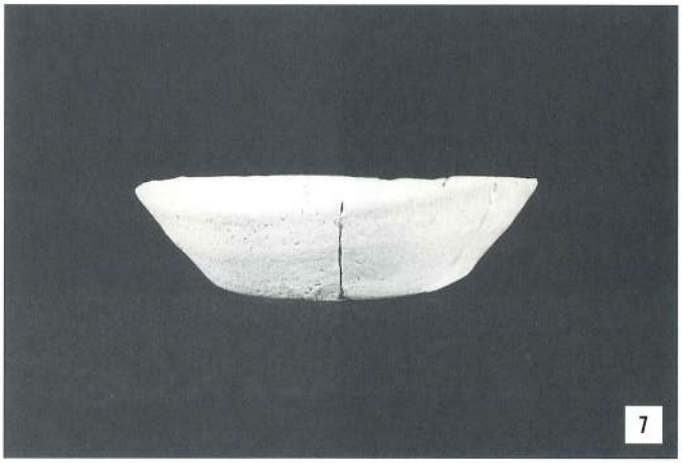
8．24・25

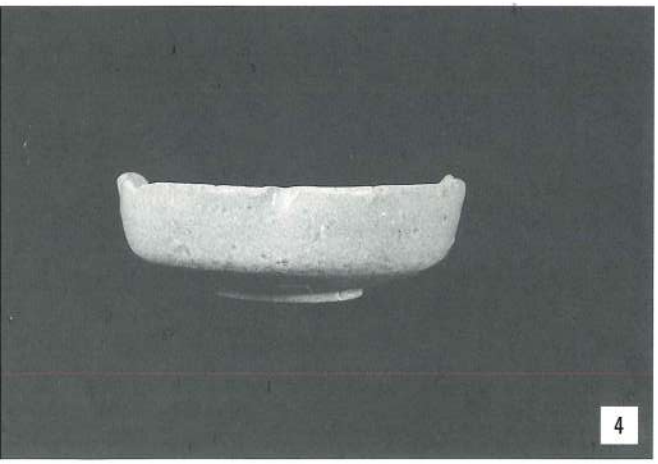


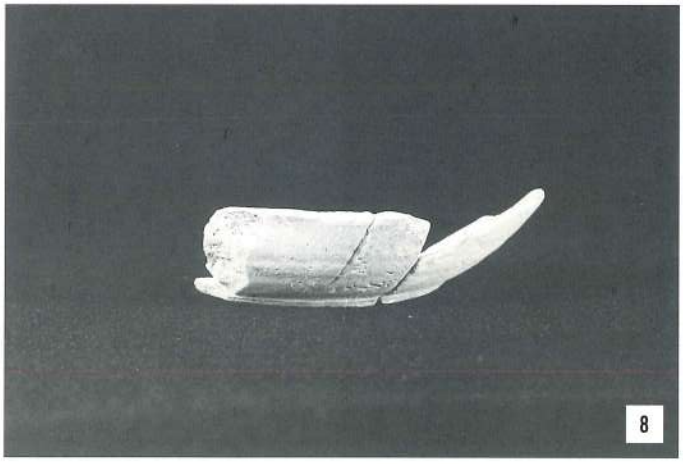




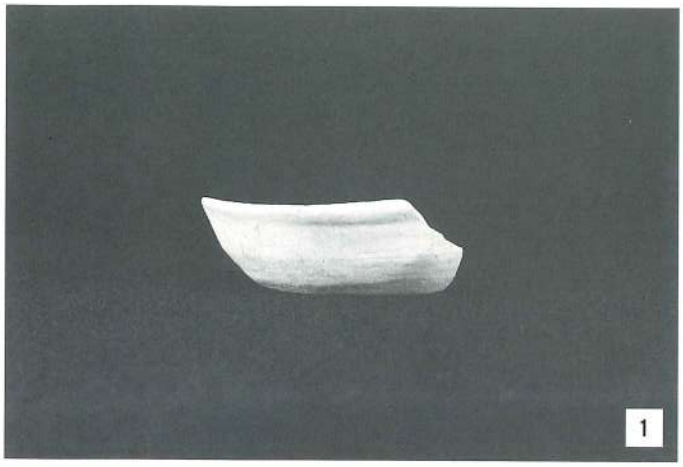


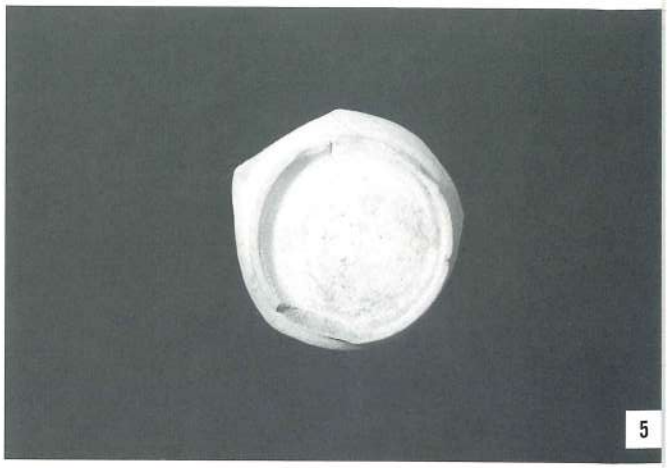


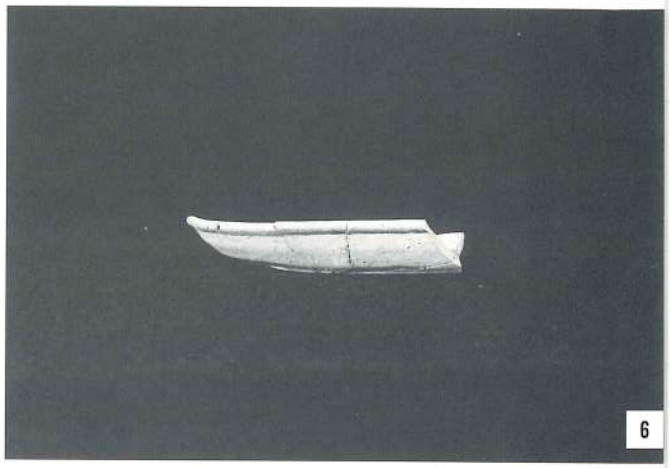


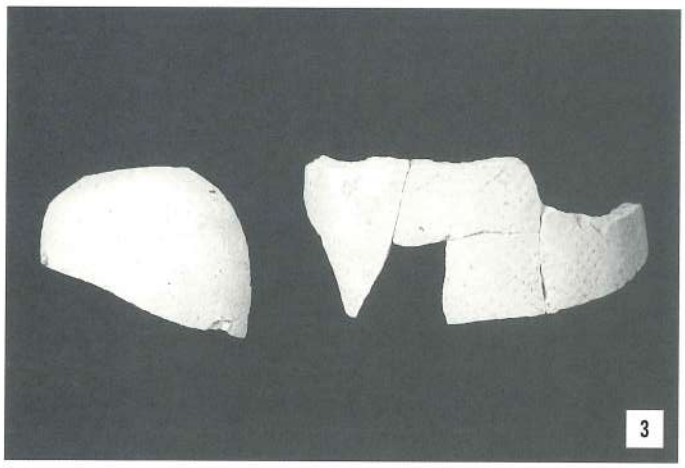


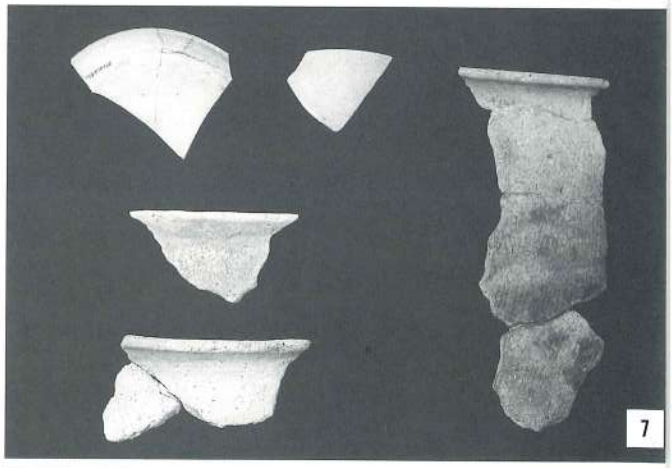
1．上）26・27、下）28・29
2．　　同
3．30
4．32
5．33
6．34
7．36
8．37

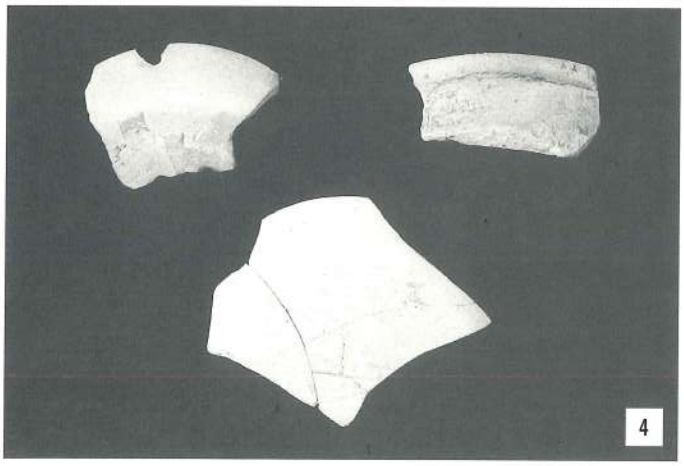


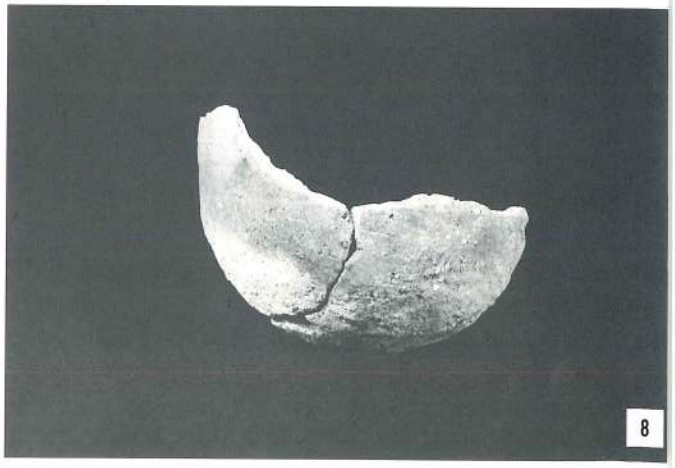












1．38

2．上）41・42、下）43・44

3．45・46

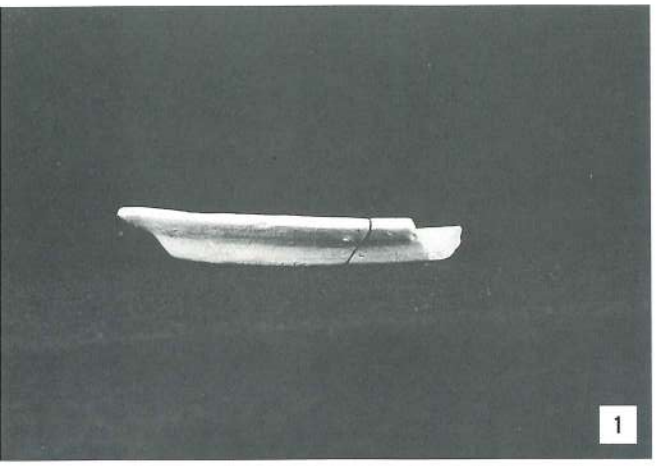
4．上）49・50、下）51

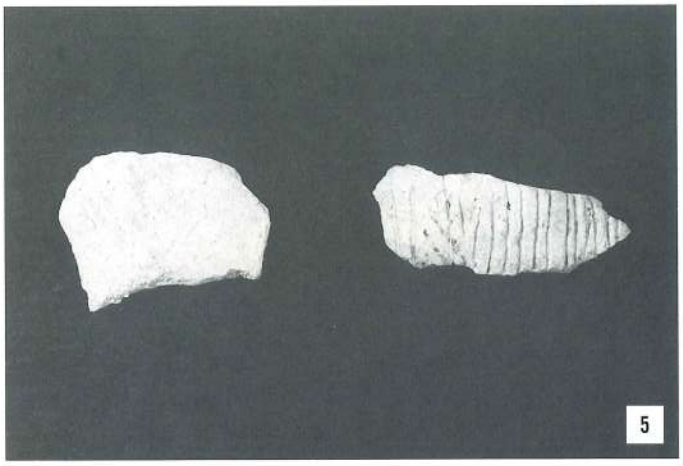
5．52

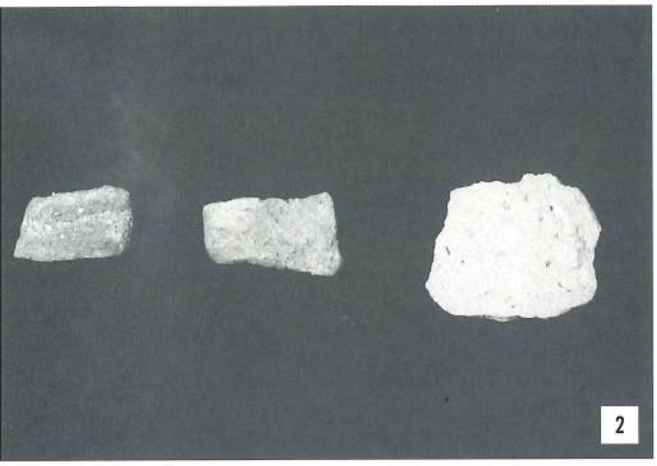
6．53

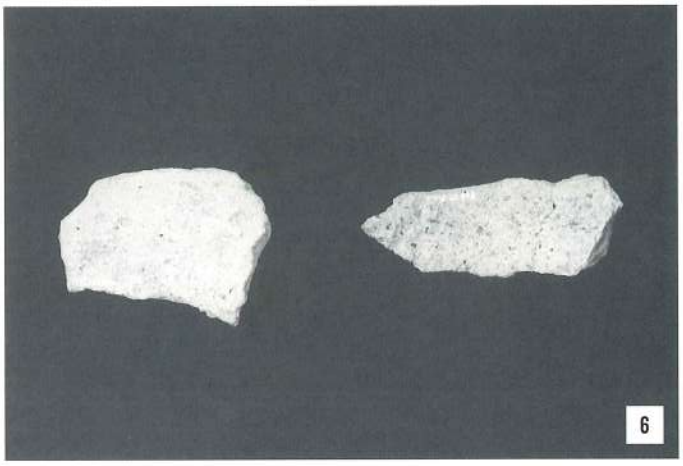
7．上）53・54、中）55、下）56、右）57

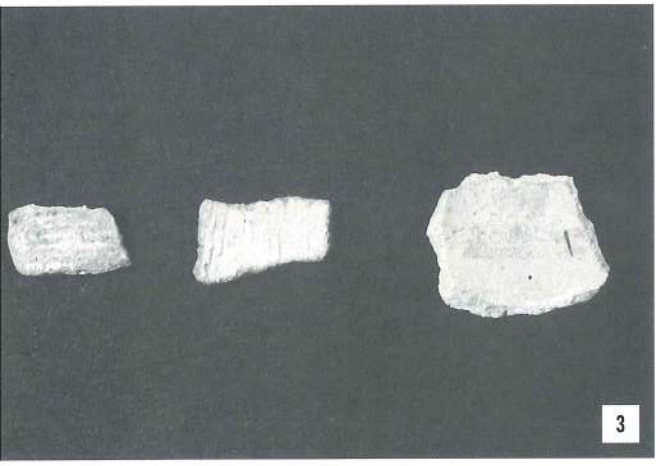
8．58

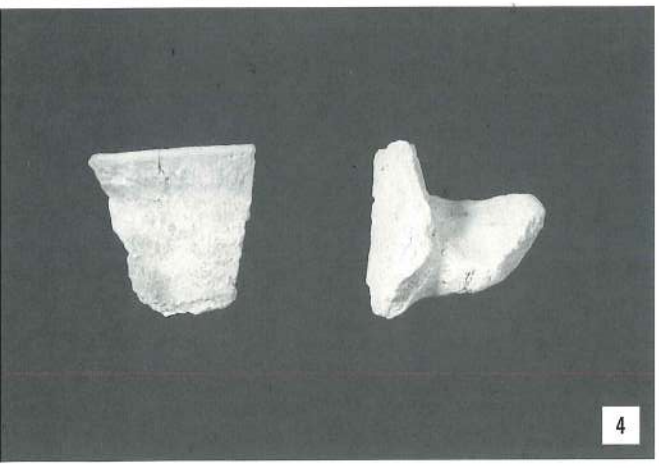












1．59

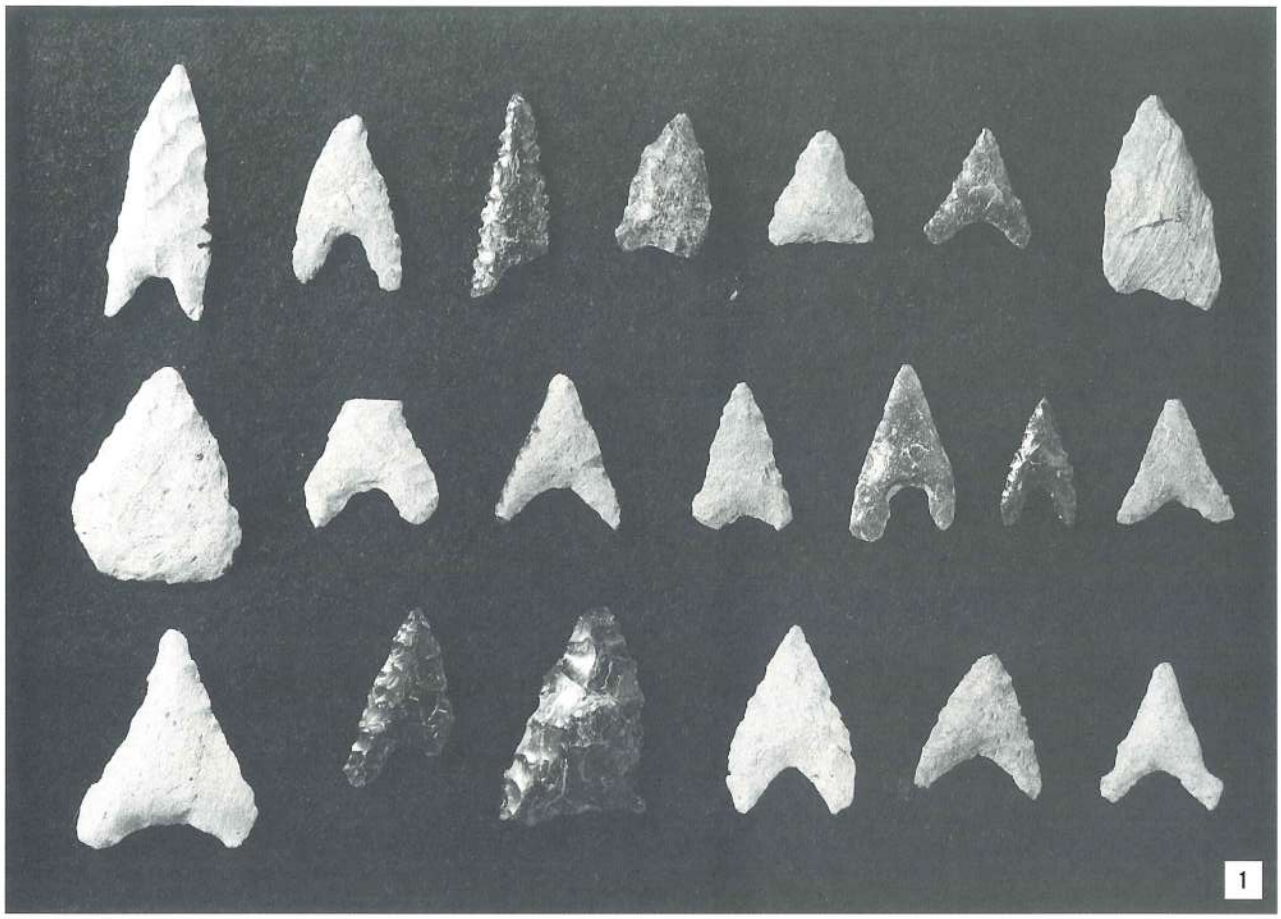
2．62～64

3．　同

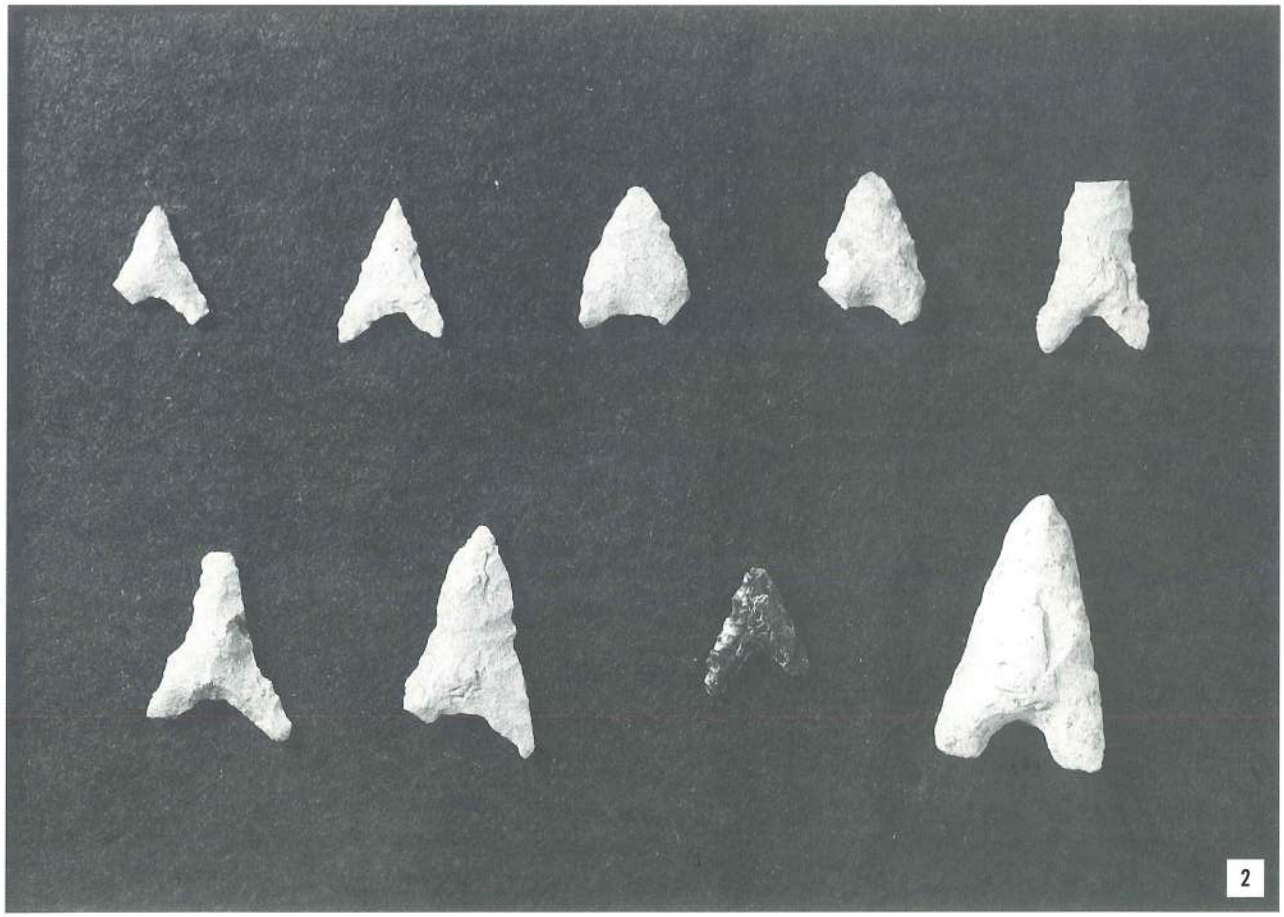
4．69・70

5．71・72

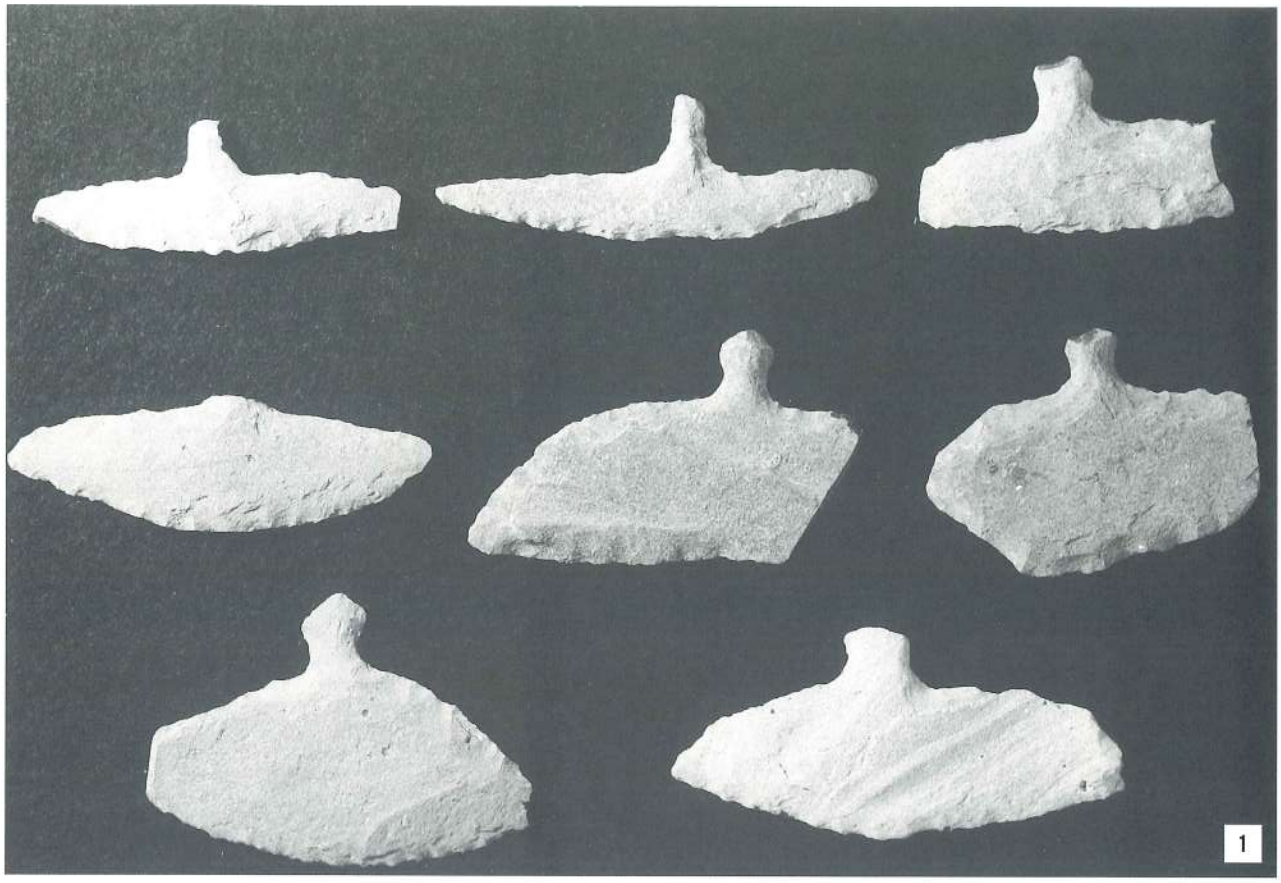
6．　同



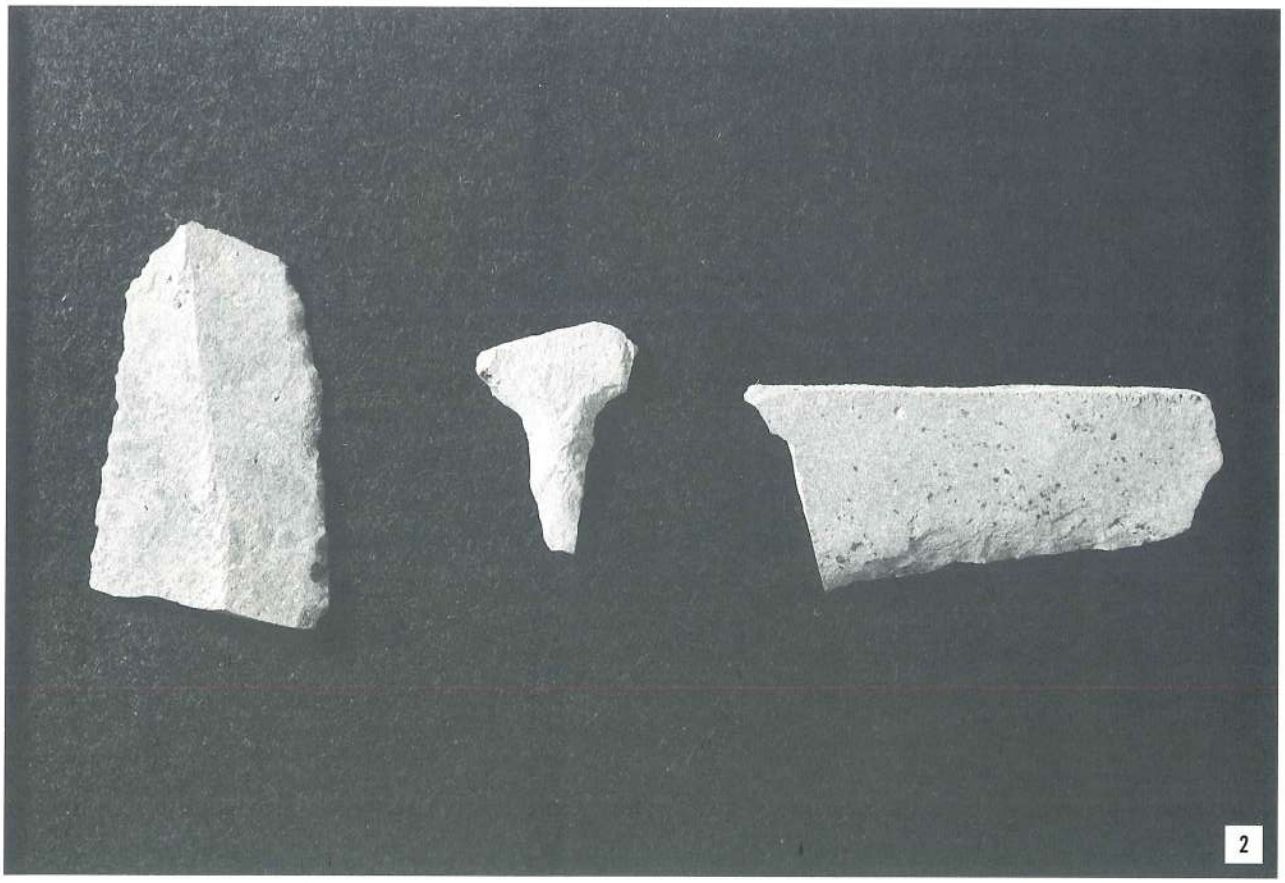
石鏃(1)（八藤遺跡4区出土）　上）1～7、中）8～14、下）15～20



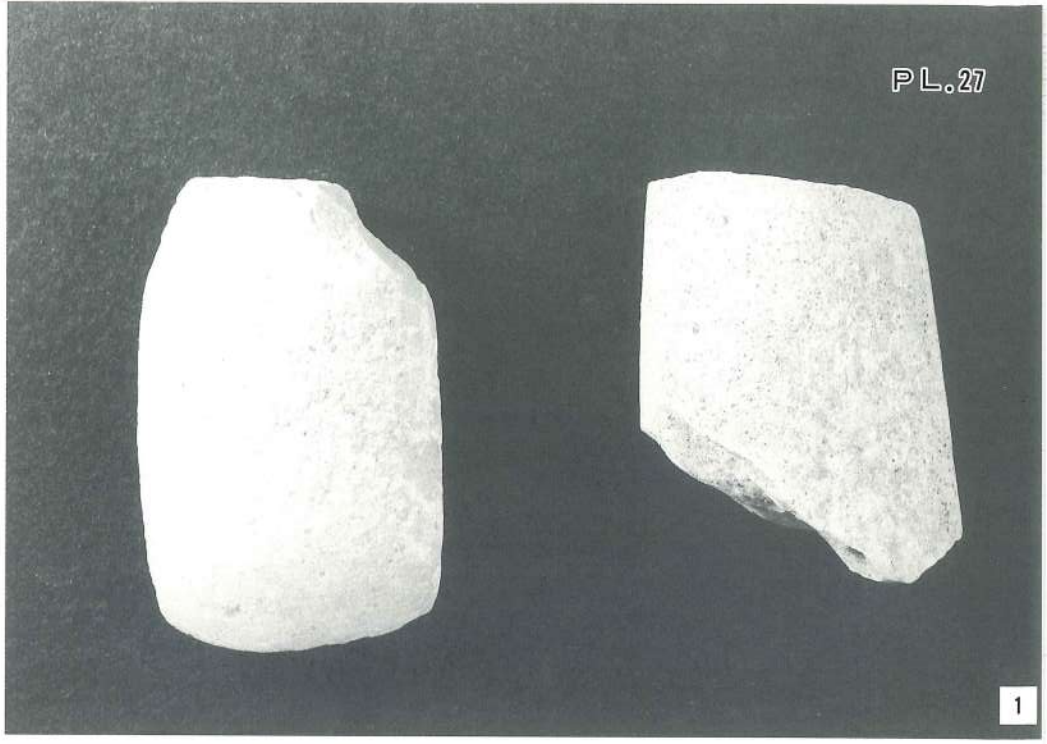
石鏃(2)（堤土塁跡2区出土）　上）21～25、中）26～29

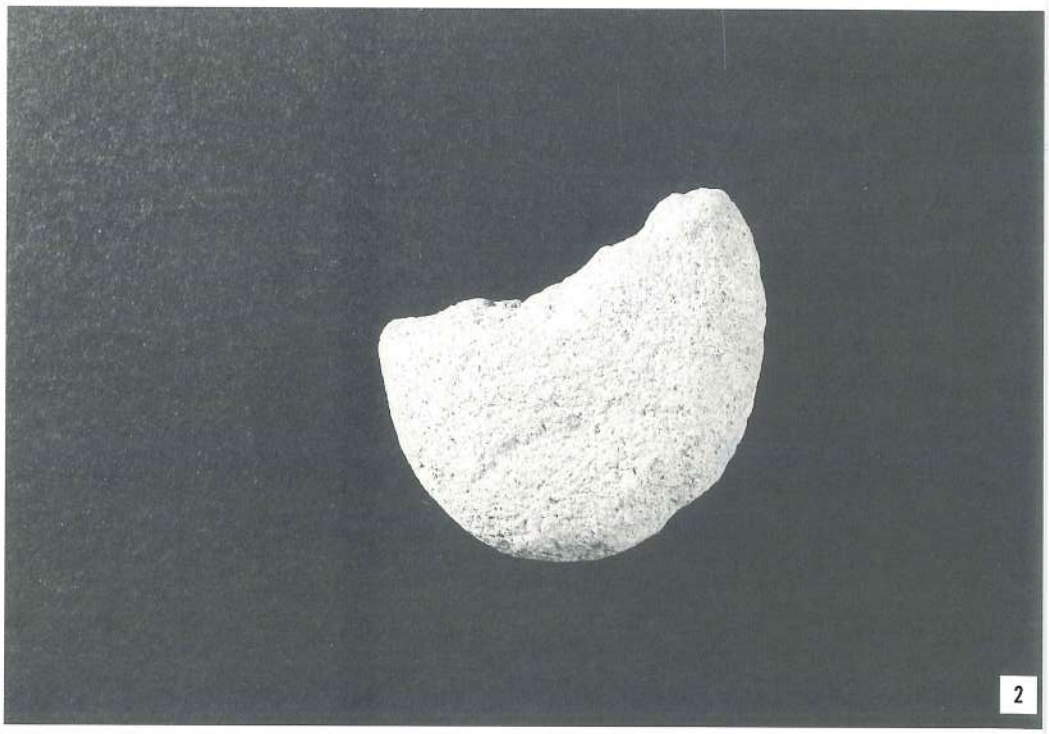


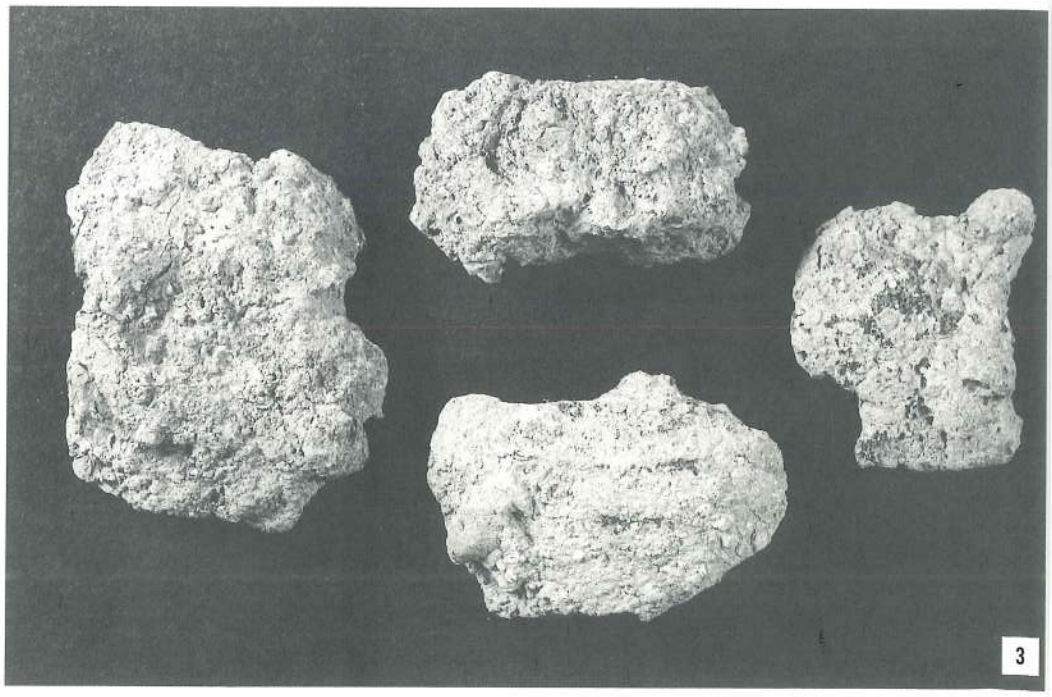
石匙　上)30 ～32、中) 33～35、下) 36・37



石剣　38・石錘　39・石鎌　40







1．石斧　41・42

2．叩き石　43

3．鉄滓　上）44～46、下）47

報告書抄録

ふりがな	やとういせきII・つつみどるいあとII
書名	八藤遺跡II・堤土塁跡II
巻次	
シリーズ名	上峰町文化財調査報告書
シリーズ番号	第14集
編著者名	原田 大介
編集機関	上峰町教育委員会
所在地	佐賀県三養基郡上峰町大字坊所319-4 上峰町民センター内 Tel 0952-52-383352-52-3833
発行年月日	1998年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査面積	調査期間 m²	調査原因
八藤	佐賀県三養基郡上峰町大字堤字迎原	41345	1004 2031 3015	33°20′36″	130°25′39″	1990. 6.25 ～ 1991. 3.29	10,650m²	農業基盤整備事業
堤土塁跡			4001	33°20′36″	130°25′31″		3,350m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八藤	集落跡	縄文時代 弥生時代 奈良・平安 中世	竪穴式住居址 5軒 掘立柱建物址 4棟 土壙 130基 溝跡 2遺構	縄文式土器（前、後期） 石器類 弥生式土器（中期） 土師器 須恵器 中世土器 中世陶器	
堤土塁跡					

上峰町文化財調査報告書第14集

八藤遺跡II・堤土塁跡II

平成10年3月24日印刷
平成10年3月31日発行

編集
発行　上峰町教育委員会
佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4

印刷　㈱昭和堂印刷　佐賀支店
佐賀県佐賀市高木瀬西4丁目12-1